

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16

鹿島遺跡
反田B遺跡
関場B遺跡

序 文

「福島空港・あぶくま南道路」は、東北自動車道矢吹インターチェンジから福島空港を経て磐越自動車道小野インターチェンジとを結ぶ自動車専用道路です。矢吹インターチェンジから福島空港間及び国道49号から小野インターチェンジ間については平成6年8月に路線発表され、平成8年9月から建設工事が進められています。

この路線の発表された区間には、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認してきました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であるとともに、我が国の歴史、文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。そこで、福島県教育委員会では、福島県土木部高速道路整備室及びあぶくま高原自動車道建設事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね、平成9年度から現状保存が困難な遺跡について記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成13年度に発掘調査した田村郡小野町に所在する鹿島遺跡・反田B遺跡・閑場B遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していくいただければ幸いに存じます。

最後に、この発掘調査に当たり、御協力いただいた福島県土木部、財團法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表すものであります。

平成14年11月

福島県教育委員会

教育長 高城俊春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団は、福島県教育委員会からの委託により、福島空港・あぶくま南道路に関する埋蔵文化財の調査を平成9年度から本格的に開始し、平成13年度には玉川村所在の6遺跡と小野町所在の3遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成13年度に実施した発掘調査のうち、田村郡小野町に所在する鹿島遺跡・反田B遺跡・関場B遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

鹿島遺跡からは、平安時代の堅穴住居跡が発見され、同時代の遺物の他、縄文土器や中国龍泉窯系の青磁片も出土しました。また、反田B遺跡では、縄文時代中期の埋甕と晚期の堅穴住居跡および早期から晚期におよぶ遺物包含層、関場B遺跡では、縄文時代晚期と近世の遺物包含層などが発見されました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、地域において広く活用していただければ、幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に深く感謝の意を表します。

平成14年11月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤栄佐久

緒　　言

- 1 本書は、平成13年度に実施した福島空港・あぶくま南道路関連の遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には、平成13年度に実施した福島空港・あぶくま南道路関連遺跡調査のうち、福島県田村郡小野町に所在する鹿島遺跡・反田B遺跡・閑場B遺跡の調査成果を収録した。
- 3 本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の協力を得て、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施したものである。
- 4 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配置し調査を実施した。

専門文化財主査 大越 道正	文化財主査 芳賀 英一	文化財主査 佐々木慎一
文化財主査 能登谷宣康	文化財主査 吉田 昌彦	文化財主査 関 博人
文化財副主査 佐藤 啓	文化財副主査 国井 秀紀	文化財主事 津田 直子
文化財主事 吉田 泰弘	文化財主事 阿部 知己	文化財主事 山元 出
文化財主事 遠藤千映美	文化財主事 笠井 崇吉	
- 5 本書は、調査を担当した職員が分担して執筆し、各原稿の文末に文責を明記した。
- 6 本書に掲載した自然科学分析・空中写真撮影は、次の機関が行った。

石器の石材鑑定	バリノ・サーヴェイ株式会社
空中写真撮影	有限会社南会測量
- 7 本書に掲載した地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000地形図を複製使用したものである。(承認番号平14東複第241号)
- 8 発掘調査から本書の作成にいたるまで、次の機関から助言・協力を得た。

小野町教育委員会	福島県土木部三春土木事務所
----------	---------------
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を省略し、各編ごとにまとめて掲載した。
- 10 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

用 例

1 本書の遺構実測図の用例は、次のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は真北を示す。方位の無いものは、すべて図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 率 採図のスケール右脇に示し、堅穴住居跡は1/50、土坑は1/40で採録した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「↑↑」の記号で表現し、相対的に緩傾斜の部分には「↑↑」の記号で表現し、後世の擾乱部や人為的な削土部は「↓↓」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土はローマ数字でL I、遺構内堆積土は算用数字でℓ 1と示した。
土色については、『新版 標準土色帖』(農林水産庁農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所 1994)に基づいた。
- (5) 線 種 実線は上端・下端・調査区境、短い破線は推定線・抉り込み線、長い破線は掘形、一点鎖線は貼床範囲・盛土範囲、二点鎖線は踏み締まり範囲を示す。
- (6) 標 高 東京湾からの標準海拔標高を示す。
- (7) 網 点 遺構に関する網点等の用例は各挿図に示した。
- (8) ピットの深さ ピット番号脇の()内に確認面からの深さをcmで示した。

2 本書における遺物実測図等の用例は、次のとおりである。

- (1) 縮 尺 率 採図のスケール右脇に示したが、原則として土器は1/3または1/4、石器・石製品は1/3または2/3で採録した。
- (2) 遺物番号 遺物は採図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば、図1の2番の遺物を「図1-2」と表記し、写真図版中では「1-2」と表示した。
- (3) 遺物註記 計測値・産地・胎質・樹種・石質は実測図脇に表示し、()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。陶磁器の産地は生産地名を記し、瀬戸・美濃産では瀬・美と略し、胎質は陶器は陶、磁器は磁と記した。
- (4) 遺物断面 須恵器以外の土器は断面を白抜きで示し、須恵器は断面を黒染とした。粘土積上痕は一点鎖線で示し、胎土に纖維を混入する土器は断面に三角印を示した。
- (5) 網 点 遺物に関する網点等の用例は各挿図に示した。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

小野町-O N	鹿島遺跡-K S M	反田B遺跡-S R T · B	関場B遺跡-S B · B
グリッド-G	ピット-P	遺構外堆積土-L	遺構内堆積土-ℓ
堅穴住居跡-S I	掘立柱建物跡-S B	溝跡-S D	井戸跡-S E
土坑-S K	焼土遺構-S G	柱列跡-S A	

目 次

序 章

第1節 調査の経緯	1
第2節 地理的環境	4
第3節 歴史的環境	6

第1編 鹿 島 遺 跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	1 3
第1節 位置と地形	1 3
第2節 調査経過	1 3
第3節 調査方法	1 5
第2章 遺構と遺物	1 7
第1節 遺構の分布と基本土層	1 7
第2節 坪穴住居跡	2 0
1号住居跡(2 0) 2号住居跡(2 5)	
第3節 掘立柱建物跡	2 9
1号建物跡(3 0) 2号建物跡(3 2) 3号建物跡(3 3)	
第4節 柱列跡	3 5
1号柱列跡(3 5)	
第5節 土坑	3 5
1号土坑(3 5) 2号土坑(3 6) 3号土坑(3 6) 4号土坑(3 7)	
5号土坑(3 7) 6号土坑(3 8) 7号土坑(3 8) 8号土坑(4 0)	
第6節 溝跡	4 0
1号溝跡(4 1) 2号溝跡(4 1) 3号溝跡(4 1)	
第7節 小穴	4 3
第8節 遺構外出土遺物	4 8
第3章 まとめ	5 5

第2編 反田B 遺 跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	5 9
第1節 位置と地形	5 9

第2節 調査経過	6 0
第3節 調査方法	6 1
第2章 遺構と遺物	6 2
第1節 遺構の分布と基本土層	6 2
第2節 堅穴住居跡	6 5
1号住居跡(6 5) 2号住居跡(6 8)	
第3節 堅穴状遺構	7 3
1号堅穴状遺構(7 3)	
第4節 土坑	7 5
1号土坑(7 6)	
第5節 土器埋設遺構	7 6
1号土器埋設遺構(7 6) 2号土器埋設遺構(7 8)	
第6節 遺物包含層	7 9
第7節 遺構外出土遺物	8 7
第3章 まとめ	9 3
 第3編 関場B遺跡	
第1章 遺跡の環境と調査経過	9 7
第1節 位置と地形	9 7
第2節 調査経過	9 7
第3節 調査方法	9 9
第2章 遺構と遺物	1 0 0
第1節 遺構の分布と基本土層	1 0 0
第2節 土坑	1 0 2
1号土坑(1 0 2)	
第3節 遺物包含層	1 0 3
第3章 まとめ	1 0 8
 付 編	
福島県小野町鹿島遺跡および反田B遺跡出土石器の石材について	1 1 1

挿図・表・写真目次

序 章

[挿 図]

図1 福島空港・あぶくま南道路位置図	1
図2 遺跡周辺地質図	5

[表]

表1 平成13年度福島空港・あぶくま南道路 関連発掘調査遺跡一覧	3
表2 鹿島・反田B・関場B遺跡周辺の 遺跡一覧	9

第1編 鹿島遺跡

[挿 図]

図1 鹿島遺跡調査区位置図	1 4
図2 グリッド配置図	1 6
図3 造構配置図・基本土層	1 8
図4 基本土層	1 9
図5 1号住居跡（1）	2 1
図6 1号住居跡（2）	2 2
図7 1号住居跡カマド	2 3
図8 1号住居跡掘形・出土遺物	2 4
図9 2号住居跡	2 7
図10 2号住居跡カマド・出土遺物	2 8
図11 2号住居跡出土遺物	2 9
図12 1号建物跡	3 1
図13 2号建物跡	3 2

[表]

表1 小穴一覧（1）	4 7
------------	-----

[写 真]

1-1 調査区遠景（1）	1 1 7
1-2 調査区遠景（2）	1 1 7
1-3 調査区近景	1 1 8
1-4 基本土層	1 1 8
1-5 1号住居跡全景	1 1 9
1-6 1号住居跡	1 1 9
1-7 2号住居跡全景	1 2 0
1-8 2号住居跡	1 2 0
1-9 1号建物跡全景	1 2 1
1-10 2号建物跡全景	1 2 1

図14 3号建物跡	3 4
図15 1号柱列跡	3 5
図16 1～6号土坑	3 9
図17 7・8号土坑	4 0
図18 1～3号溝跡	4 2
図19 小穴（1）	4 4
図20 小穴（2）	4 5
図21 小穴・出土遺物	4 6
図22 遺構外出土遺物（1）	5 1
図23 遺構外出土遺物（2）	5 2
図24 遺構外出土遺物（3）	5 3
図25 遺構外出土遺物（4）	5 4

表2 小穴一覧（2）	4 8
------------	-----

1-11 3号建物跡と周辺の小穴群全景	1 2 2
1-12 1・2号土坑	1 2 2
1-13 3・4号土坑	1 2 3
1-14 5・6号土坑	1 2 3
1-15 7・8号土坑	1 2 4
1-16 1・2号溝跡と遺構外遺物出土状況	1 2 4
1-17 1・2号住居跡出土土器、遺構外出土 縄文土器・土器、青磁	1 2 5
1-18 遺構外出土縄文土器（1）	1 2 6
1-19 遺構外出土縄文土器（2）	1 2 6

第2編 反田B遺跡

[挿図]

図1	反田B遺跡調査区位置図	5 9
図2	遺構配置図	6 3
図3	基本土層	6 4
図4	1号住居跡	6 6
図5	1号住居跡出土遺物	6 7
図6	2号住居跡（1）	7 0
図7	2号住居跡（2）	7 1
図8	2号住居跡、出土遺物	7 2
図9	1号堅穴状遺構、出土遺物	7 4
図10	1号土坑	7 6
[写真]		
2-1	遺跡全景・基本土層	1 2 7
2-2	1号住居跡	1 2 8
2-3	2号住居跡	1 2 9
2-4	1号堅穴状遺構・1号土坑	1 3 0
図11	1号土器埋設遺構、出土遺物	7 7
図12	2号土器埋設遺構、出土遺物	7 9
図13	北側谷部遺物包含層	8 1
図14	遺物包含層範囲	8 2
図15	遺物包含層出土遺物（1）	8 5
図16	遺物包含層出土遺物（2）	8 6
図17	遺構外出土遺物（1）	9 0
図18	遺構外出土遺物（2）	9 1
図19	遺構外出土遺物（3）	9 2

第3編 開場B遺跡

[挿図]

図1	開場B遺跡調査区位置図	9 8
図2	遺構配置図	1 0 1
図3	基本土層	1 0 2
[写真]		
3-1	遺跡全景（1）	1 3 3
3-2	遺跡全景（2）	1 3 3
3-3	基本土層・1号土坑・遺物包含層	1 3 4
3-4	遺物包含層・黒森館跡	1 3 5
図4	1号土坑、出土遺物	1 0 3
図5	遺物包含層出土遺物（1）	1 0 4
図6	遺物包含層出土遺物（2）	1 0 6
3-5	遺物包含層出土縄文土器・土製品	1 3 6
3-6	1号土坑出土陶器、遺物包含層出土 土師器・陶磁器	1 3 6

付編

[挿図]

図1	鹿島遺跡出土石器の岩種構成	1 1 4
[表]		
表1	鹿島・反田B遺跡出土石器の岩質鑑定 一覧表	1 1 3
図2	反田B遺跡出土石器の岩種	1 1 4
表2	鹿島遺跡出土石器・岩種一覧表	1 1 4
表3	反田B遺跡出土石器・岩種一覧表	1 1 4

序 章

第1節 調査の経緯

1 福島空港・あぶくま南道路建設事業の概要

福島県が整備を進めている地域高規格道路「福島空港・あぶくま南道路」（愛称・あぶくま高原道路）は、東北自動車道矢吹インターチェンジ（以下 I C と略す）から福島空港を経て、磐越自動車道小野 I C に至る自動車専用道路である。本事業は、福島県が福島空港を中心として高速交通網を確立する必要性から、主要地方道矢吹小野線の地方道改築事業として位置付け、路線総延長 34.8 km、設計速度 80 km/h、車線数 4 車線で計画、当面東北自動車道矢吹 I C ~ 福島空港と磐越自動車道小野 I C ~ 国道 49 号線までが優先区間として平成 6 年 8 月に路線発表した。本路線は、国土交通省が重点的に整備を進めている地域高規格道路の計画路線に平成 6 年から計画全体が組み込まれ、平成 10 年度までに玉川村吉～平田村上蓬田区間に除いて整備区間に、平成 13 年度には玉川村吉地内が整備区間として新たに組み入れられた。福島県土木部では道路建設の本格化に伴い、平成 7 年度から平田村に「あぶくま高原自動車道建設事務所」を開所し、平成 8 年度から当面暫定 2 車線での供用を目指して本線工事に着手して、平成 13 年 3 月 27 日には、矢吹 I C ~ 玉川 I C 間の 10.5 km が開通した。この区間の開通により、東北自動車道から福島空港や須賀川市を会場とする「うつくしま未来博」のアクセス向上が図られた。

2 平成 12 年度までの調査経過

本路線建設工区内の埋蔵文化財の調査は、所在確認のための表面調査も含め平成 8 年度より実施している。平成 8 年度は、矢吹町及び小野町の分布調査を両町教育委員会が主体となって進め、表

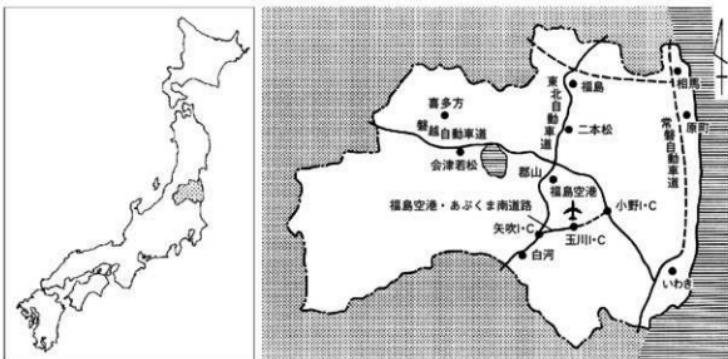


図 1 福島空港・あぶくま南道路位置図

序 章

面調査の結果、矢吹町7遺跡・小野町8遺跡と遺跡推定地1箇所（矢吹町）を確認・発見した。この内、工事着工優先箇所にかかる11遺跡（矢吹町7遺跡・小野町4遺跡）について、試掘調査が実施された（矢吹町教育委員会1999）。

平成9年度からは、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（平成13年度より財団法人福島県文化振興事業団に名称変更）に調査業務を委託し、本路線建設工区にかかる埋蔵文化財の調査を一貫して行うこととした。

平成9年度は、矢吹町内の8遺跡（上宮崎A・上宮崎B・小又・下宮崎A・白山A・白山C・白山D・白山E遺跡）、小野町内の1遺跡（北ノ内遺跡）の発掘調査と矢吹町内及び小野町内の11遺跡、遺跡推定地1箇所の試掘調査を実施した〔福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告1～3〕・〔福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告1〕。また、本路線中具体的に路線発表になっている東北自動車道矢吹IC～福島空港間と磐越自動車道小野IC～国道49号間における遺跡の所在確認調査（表面調査）を実施し、周知の遺跡を含む37遺跡と遺跡推定地22箇所を発見・確認した〔福島県内遺跡分布調査報告4〕。

平成10年度は、矢吹町内の10遺跡（田町・八幡町A・八幡町B・文京町・弥栄A・白山D・白山E・後原・弘法山遺跡、弘法山古墳群）、玉川村内の1遺跡（金波B遺跡）、小野町内の3遺跡（柳作A・柳作B・柳作C遺跡）の発掘調査と矢吹町内・玉川村内・小野町内の12遺跡、遺跡推定地8箇所の試掘調査を実施し、玉川村川辺地区に所在する遺跡の調査にも着手した〔福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4～10〕・〔福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告2〕・〔福島県内遺跡分布調査報告5〕。

平成11年度は、矢吹町内の3遺跡（赤沢A・赤沢B・後原遺跡）、玉川村内の3遺跡（高原・江平・金波B遺跡）の発掘調査と矢吹町内・玉川村内の9遺跡、遺跡推定地4箇所の試掘調査を実施し、玉川村吉・南須釜地区の表面調査を実施し、周知の遺跡を含む7遺跡と遺跡推定地8箇所を発見・確認した〔福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告9～11〕・〔福島県内遺跡分布調査報告6〕。

平成12年度は、玉川村内の6遺跡（江平・堂平A・堂平D・堂平E・堂平F・栗木内遺跡）の発掘調査と矢吹町内・玉川村内・小野町内の7遺跡、遺跡推定地5箇所の試掘調査を実施し、県道古殿須賀川線から国道49号までの区間の表面調査では、周知の遺跡を含む14遺跡と遺跡推定地25箇所を発見・確認した〔福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12・13〕・〔福島県内遺跡分布調査報告7〕。なお、平成12年度の試掘調査をもって、矢吹町内の調査を全て終了した。

3 平成13年度の調査経過

平成13年度の調査は、前年度末から福島県教育委員会・福島県土木部高速道路整備室・あぶくま高原自動車道建設事務所・財団法人福島県文化センター（平成13年度より財団法人福島県文化振興事業団に名称変更）の間で協議を重ね、玉川村内に所在する6遺跡と小野町内に所在する3遺跡の発掘調査を実施した。

年度当初は、玉川村内の遺跡部分にかかる工事が急がれていたことと、小野町における調査予定遺跡が鹿島遺跡以外に確定していないことから、財団法人福島県文化振興事業団では、4月1日付の福島県教育委員会との委託契約を受けて、14名の調査員を配して、玉川村内に所在する遺跡に着手することにした。

4月9日より吉に所在する宮ノ前A遺跡(5,300m²)・中下遺跡(3,100m²)、川辺に所在する堂平G遺跡(3,100m²)、10日より栗生に所在する栗木内遺跡(6,200m²)の調査に着手した。なお、栗木内遺跡及び宮ノ前A遺跡に関しては、前年度末までの協議において工事側より段階的な引き渡しの要望があったことから、その引き渡し優先順位に従って調査を進めることを基本とした。

4月中旬までは、調査前の事務、調査連絡所・休憩所の設置、調査区内外の環境整備、重機による表土剥ぎ、作業員雇用・安全教育など調査初動期の作業が主体であったが、4月下旬になると、調査は順調に進捗するようになり、5月10日には宮ノ前A遺跡において、調査の終了した調査区南端部700m²を工事側に対して引き渡し、21日には栗木内遺跡の最優先引き渡し箇所の内、調査の終了した東斜面の南側と西斜面下位の合計1,900m²を工事側に対して引き渡した。

堂平G遺跡では遺構が希薄であり、6月上旬になると、尾根頂部から西側の1,600m²に関して調査終了の目処が立ったことから、13日にその部分を工事側に引き渡し、残る東側に関しても、29日には終了した。また、中下遺跡では、6月下旬になると、調査終了の目処が立ったことから、作業員の一部を隣接する宮ノ前A遺跡に移動させた。

7月に入り、2日からは、堂平G遺跡の調査終了を受けて、新たに吉に所在する池ノ上遺跡、南須釜に所在する兎田遺跡の調査に着手するとともに、3日には、堂平G遺跡の東側1,500m²及び栗木内遺跡の最優先引き渡し箇所の残り部分と西斜面中位から上位南側にかけての合計1,200m²を工事側に対して引き渡した。この際、工事側より栗木内遺跡の引き渡し箇所に隣接する西斜面上位中央部に関して早急な引き渡しの要請があった。13日には中下遺跡の調査が終了し、同遺跡の調査員・作業員は全て宮ノ前A遺跡に合流した。なお、中下遺跡の引き渡しは、調査終了前の11日に実施した。一方、栗木内遺跡では、丘陵頂部から東斜面にかけて遺構が多数検出され、17日には、当初の予定になかった調査区南西部に隣接する区域200m²に関して追加調査することになった。また、福島県教

表1 平成13年度福島空港・あぶくま南道路関連発掘調査一覧

町村名	地区名	遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	主要時代	種別
玉川村	栗生	栗木内	6,400	平成13年4月10日～9月18日	縄文・古墳・平安	集落跡・散布地
玉川村	川辺	堂平G	3,100	平成13年4月9日～6月29日	縄文・奈良・平安	集落跡・散布地
玉川村	吉	宮ノ前A	5,300	平成13年4月9日～9月14日	縄文・平安・近世	集落跡・散布地
玉川村	吉	中下	3,100	平成13年4月9日～7月13日	平安	集落跡
玉川村	吉	池ノ上	1,200	平成13年7月2日～9月14日	縄文・弥生・平安	散布地
玉川村	南須釜	兎田	2,500	平成13年7月2日～9月28日	縄文・弥生・近世	集落跡・墓地
小野町	菖蒲谷	鹿島	3,300	平成13年9月5日～11月30日	縄文・平安	集落跡・散布地
小野町	菖蒲谷	反田B	1,300	平成13年9月19日～11月20日	縄文	集落跡・散布地
小野町	雁股田	岡場B	1,200	平成13年10月1日～11月9日	縄文・平安・近世	散布地

育委員会は、6～7月に小野町菖蒲谷及び雁股田において試掘調査を実施し、要保存範囲が生じた2箇所に関して、反田B遺跡及び閑場B遺跡として登録した。

7月中及び8月前半は雨天による作業中止が一日もなく、栗木内遺跡では、7月3日の引き渡しの際に工事側より要請のあった箇所500m²の引き渡しを8月3日に行った。また、8月7日には栗木内遺跡の堅穴住居跡内より銅製八稜鏡が出土した。8月下旬からは、小野町鹿島遺跡(3,300m²)の調査準備を開始し、9月5日より同遺跡の調査に着手した。

9月上旬になると、栗木内遺跡他4遺跡の調査終了の目処が立ち、14日に各遺跡を工事側に対し引き渡し、兎田遺跡以外の各遺跡に関しては18日までに器材の撤収等を済ませ、全ての調査を終了し、翌19日からは小野町反田B遺跡(1,300m²)の調査に着手した。なお、兎田遺跡に関しては、調査区南西に隣接する区域の近世墓の位置を正確に把握するために、12日より工事側で表土剥ぎを実施したところ、土坑等が多数検出されたことから、14日の引き渡しの際に急遽関係機関による協議がもたらされ、遺構の分布する1,100m²に関して更に追加調査することになった。財團法人福島県文化振興事業団では調査員を増員してこれに当たり、28日には追加された区域の調査を終了した。これにより、平成9年度から進めてきた、東北自動車道矢吹ICから福島空港間に所在する遺跡の発掘調査は全て終了したことになる。

10月1日からは小野町閑場B遺跡(1,200m²)の調査にも着手し、2日には兎田遺跡の追加部分の引き渡しを行った。閑場B遺跡は遺構・遺物が少なく、10月下旬には調査終了の目処が立つたことから、11月9日には調査を終了し、13日に工事側に対して引き渡しを行った。11月に入ると、霜が降りるようになり、日が暮れるのも早くなるなど作業条件が悪くなる一方であったが、順次、調査の終了した遺跡の作業員を調査中の遺跡に投入する方法により、反田B遺跡の調査は20日に終了し、鹿島遺跡の調査も30日までに全て終了することができた。なお、反田B遺跡及び鹿島遺跡の引き渡しは27日に行った。

(大越・芳賀)

第2節 地理的環境

福島県は全国第3位の県土を有し、約80%を山地が占め、残り20%は平地と盆地である。南北に連なる阿武隈高地及び奥羽山脈によって、東から浜通り地方・中通り地方・会津地方の3地方に区分されている。浜通り地方は太平洋に面していることから、気候は比較的温暖で冬期間の降水量も少なく、海洋性気候を示している。中通り地方は阿武隈川に沿って帶状に盆地が続き、夏は暑く、冬は寒い盆地特有の気候を示している。会津地方は奥羽山脈と飯豊・越後山脈に挟まれた会津盆地を中心とする地域で、内陸性の気候を示し、夏の気温は高く、冬は日本海からの季節風の影響による降雪量も多い。

鹿島遺跡・反田B遺跡・閑場B遺跡は、中通り地方中部の田村郡小野町に所在する。小野町は北で船引町・大越町・滝根町、東でいわき市、南で石川郡平田村、西で郡山市と接し、町内を国道349

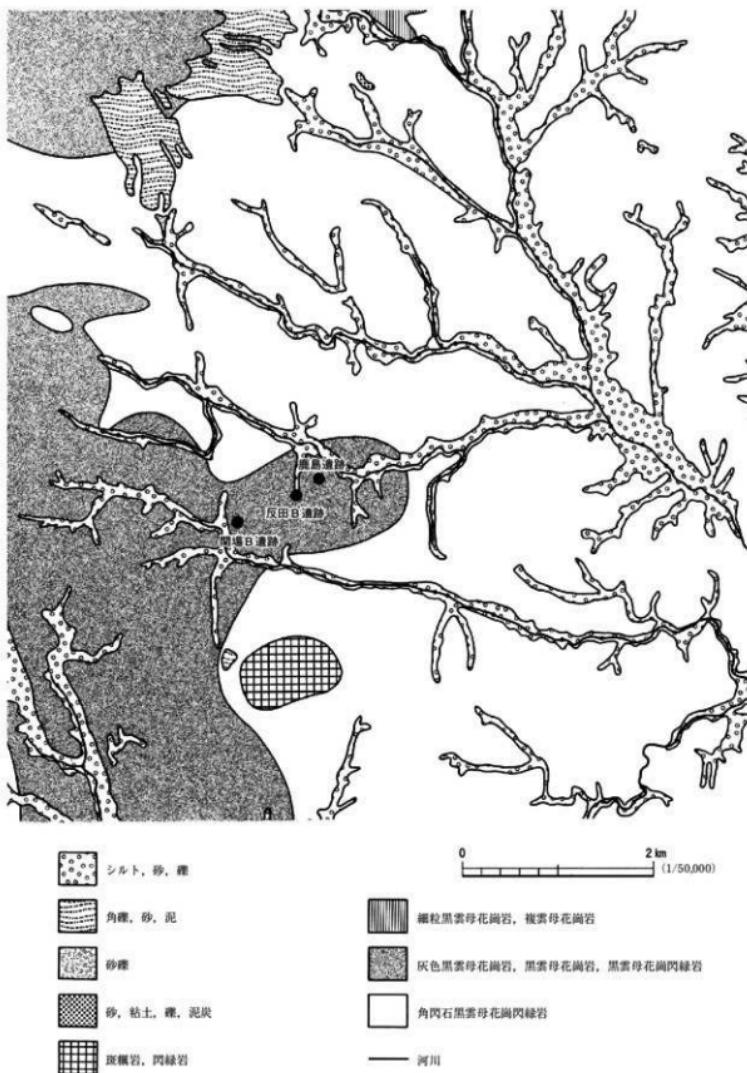


図2 遺跡周辺地質図

号とJR磐越東線が南北に走り、中通り地方と浜通り地方を結ぶ交通の要衝になっている。また、小野町は阿武隈高地の中央部に位置し、東部に矢大臣山（964.7m）、北西部に黒石山（896.4m）、高柴山（884.4m）、南部に十石山（718m）があり、これらの山々は分水界をなすと同時に行政区画の境界にもなっている。小野町北西部が源流となる右支夏井川は、小野町夏井地区で滝根町方面から流れてくる本流の夏井川と合流し、いわき市を通って太平洋に注いでいる。同河川の両岸に細長く開けた平坦部には標高450m前後的小規模な段丘が形成されている。一方、前述の山地は、右支夏井川の支流である車川・黒森川、十石川等の小河川によって開析され、他は起伏の多い複雑な地形を呈している。開析谷には浸食丘や小規模な河岸段丘が認められる。現況の土地利用は、丘陵から尾根にかけては山林、尾根から開析谷斜面にかけては段々畑や桑畠・宅地、開析谷には狭小な谷地水田が形成されている。

阿武隈高地一帯の地質は、古～中生代に貫入した新田の花崗岩類が分布しており、小野町周辺では旧期花崗岩類が基盤となる。これが長期間にわたって浸食・風化され、表層部は「真砂」化している。そのため、基盤でありながらもスコップなどで容易に掘り込むことができる。また、付近の矢大臣山・大滝根山等の山塊は斑れい岩や閃綠岩類からなり、長年の浸食に抗してルーフベンダント（根なし岩）状の残丘となる。また、滝根町・大越町地区では、石灰岩が山肌に露出するカルストと呼ばれる高原風景を開拓し、鍾乳洞が発見されている。

小野町の気候は、平成元～9年の福島地方気象台地域気象観測資料の統計によると、真夏の最高気温は34.3℃、真冬の最低気温は-15.6℃を記録している。最暖期の8月の平均気温は22.6℃、最寒期の1月の平均気温は-0.5℃で年平均気温は10.5℃である。風速は年平均1.2mと、温涼な地域である。年間平均降水量は1,220mmで、最も降水量の多い夏の月平均降水量は264mmと比較的多く、最も少ない冬の月平均降水量は18mmである。積雪は少なく過去50年間の記録を見ても、最深積雪は1.5cm程度である。

(津田)

第3節 歴史的環境

小野町の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は、現在132箇所が周知されている。これらの遺跡の大部分は、右支夏井川及びその支流によって形成された谷底平野や河岸段丘に多く分布しているが、縄文時代の集落跡や中・近世の城館跡は丘陵の平坦地や谷底平野に面した丘陵を利用して営まれている。磐越自動車道並びにあぶくま高原自動車道路建設に伴う発掘調査など、近年町内遺跡の調査が多く行われ、各時代の遺跡の内容が明らかにされつつある。

町内において旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていない。縄文時代の遺跡の内、小滝遺跡・鴨ヶ館跡・粧内遺跡・猪久保城跡・鍛冶久保遺跡などの小規模遺跡の発掘調査が磐越自動車道建設に伴い実施されている。これらの遺跡はすべて後世の遺構も発見された複合遺跡である。これらの中で最も古い遺跡は猪久保城跡であり、草創期の石槍が出土している。小滝遺跡・鴨ヶ館跡では早期前

葉に位置づけられる稻荷台式や稻荷原式系統の撲糸文土器が微量出土し、これらと共に厚手の無文土器の出土も少量認められる。また、柳作B遺跡では日計式押型文土器が出土している。これらの資料が今のところ、町内では最古の土器群である。早期中葉の遺物は、小滝遺跡・鴨ヶ館跡・粧内遺跡・長久保遺跡において田戸下層式や常世I式などの貝殻・沈線文土器が散見される。柳作B遺跡でも常世I式土器が出土している。早期後半になると、遺構が検出される遺跡が確認されている。鍛治久保遺跡では茅山下層式土器の伴う堅穴住居跡が2軒、鴨ヶ館跡でも縄文条痕土器の伴う堅穴住居跡が1軒認められる。早期後半の遺物としては、鍛治久保遺跡や小滝遺跡で野鳥式や櫻木下層式などの初期の条痕文土器が散見され、茅山下層式土器は小滝遺跡でまとまった資料が得られている他に、鴨ヶ館跡や粧内遺跡・鍛治久保遺跡で出土している。鴨ヶ館跡では該期の大畠G式土器・日向B式土器も出土している。早期終末の土器はこの他に粧内遺跡にも認められる。また、早期に機能したと思われる落し穴状の土坑も鴨ヶ館跡・粧内遺跡・鍛治久保遺跡でそれぞれ検出されている。いずれも群をなすものではなく、単独あるいは散在する傾向が見られる。

前期の資料は、小滝遺跡でまとまって出土し、堅穴住居跡は前期初頭に当たるらしい。遺物包含層でも花積下層式土器のまとまった資料が得られている。また、東北系の大木2b式土器・大木4式土器・大木6式土器や関東系の浮島I式土器・浮島III式土器・諸磯b式土器の出土が見られるほか、鴨ヶ館跡では大木6式土器が、鍛治久保遺跡でも浮島I式や諸磯b式の土器が出土している。柳作B遺跡でも大木3式土器が多く、堅穴住居跡のいくつかはこの時期に当たる。

矢大臣（新田）遺跡は中期から後期に営まれた大集落跡で、町内では最も著名な遺跡の1つである。大木8b式土器期の大型堅穴住居跡や大木9式土器期・大木10式土器期の堅穴住居跡が調査された他、遺物包含層からはおびただしい量の該期の土器を中心とした遺物が出土している。また、未調査であるが、堀切遺跡や清太郎遺跡においても大木8a式や大木8b式の土器が耕作等で掘り出されている。特に、堀切遺跡においては石圍炉が発見されており、完形に近い大木8b式土器が数点出土している。後期の資料としては、矢大臣遺跡で綱取I・II式土器期の堅穴住居跡が検出されている。また、猪久保城跡で加曾利B式土器が僅かであるが出土しており、未調査だが梅ノ木畠遺跡や長賀遺跡では瘤付土器も出土している。晚期の資料は小滝遺跡にわずかに認められ、長久保遺跡では土偶が採集されている。

弥生時代の遺跡は、万景B遺跡・小滝遺跡・鴨ヶ館跡・本飯豊遺跡・猪久保城跡・鍛治久保遺跡などで遺物が散見されるが、明確な遺構の検出された遺跡はなく、堅穴住居跡が集中する集落跡として認識された遺跡もまだない。小滝遺跡では今泉式・西麻生式に相当する土器が少し見られ、鴨ヶ館跡・本飯豊遺跡では二ッ釜式～川原町口式土器が認められる。万景B遺跡では朝庄痕のある土器破片が出土している。

古墳時代には、落合遺跡・安橋遺跡・本飯豊遺跡・万景E遺跡・大豆柄古墳群などの遺跡がある。この内、落合遺跡と本飯豊遺跡が発掘調査されており、落合遺跡では前期の堅穴住居跡が2・9軒調査され、阿武隈高地では珍しい4世紀後半の集落跡であることが明らかになった。安橋遺跡では石製

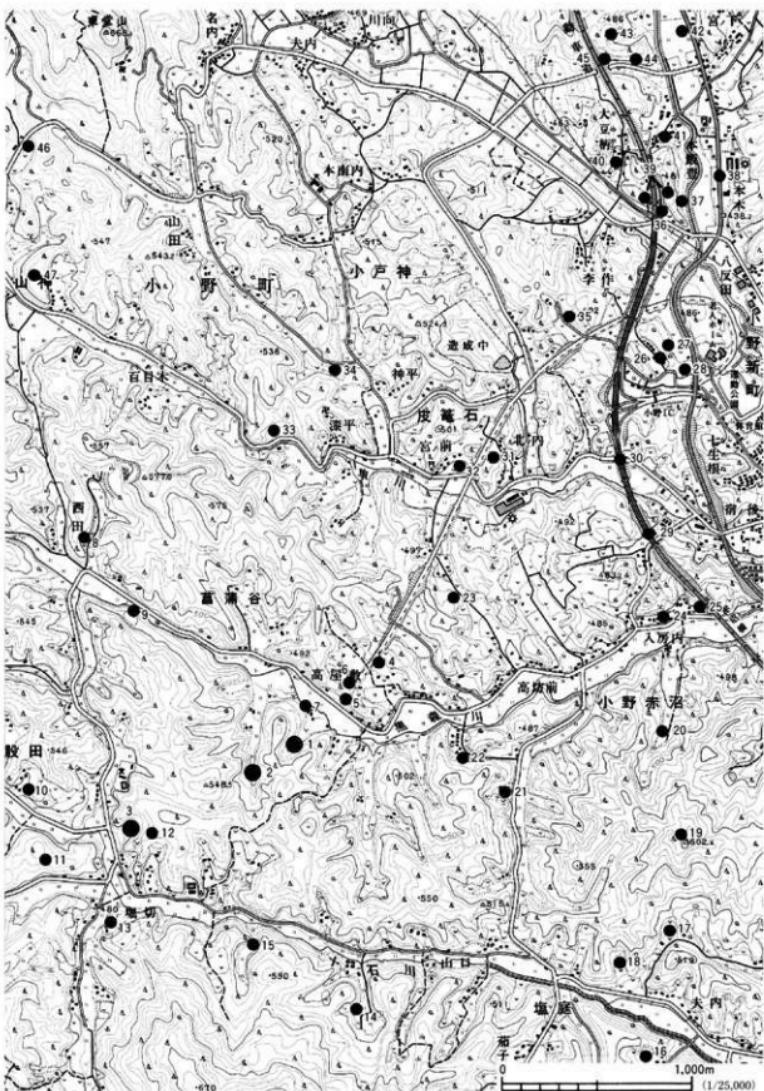


図3 鹿島・反田B・関場B遺跡周辺の遺跡

表2 鹿島・反田B・閑場B遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所 在 地	遺 跡 の 概 要
1	鹿島遺跡	小野町菖蒲谷字鹿島	平安時代の集落跡 本報告
2	反田B遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文時代の集落跡 本報告
3	閑場B遺跡	小野町雁股田字閑場	縄文・平安時代の散布地 本報告
4	柳作A遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安時代の集落跡
5	柳作B遺跡	小野町菖蒲谷字柳作	縄文時代の集落跡
6	柳作C遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安時代の集落跡
7	反田遺跡	小野町菖蒲谷字反田	奈良・平安時代の散布地
8	西田遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文時代の散布地
9	堂田遺跡	小野町菖蒲谷字堂田	縄文時代の散布地
10	閑場遺跡	小野町雁股田字閑場	縄文・奈良・平安時代の散布地
11	仁井殿遺跡	小野町雁股田字仁井殿	縄文時代の散布地
12	黒森遺跡	小野町雁股田字堀切	中世の城館跡
13	堀切遺跡	小野町雁股田字千保	縄文時代の散布地
14	神山A遺跡	小野町塙庭字古南府中	縄文時代の散布地
15	神山B遺跡	小野町雁股田字新切	縄文時代の散布地
16	池ノ作遺跡	小野町塙庭字池ノ作	縄文時代の散布地
17	夫内A遺跡	小野町塙庭字夫内	縄文時代の散布地
18	夫内B遺跡	小野町塙庭字夫内	奈良・平安時代の散布地
19	小塙遺跡	小野町谷津作字館	中世の城館跡
20	入房内遺跡	小野町小野赤沼字坊入	古墳・奈良時代の散布地
21	永田原遺跡	小野町小野赤沼字永田原	縄文・奈良・平安時代の散布地
22	鉢塚遺跡	小野町小野赤沼字鉢沼	縄文時代の散布地
23	四郎坊遺跡	小野町小野赤沼字四郎坊	奈良・平安時代の散布地
24	石崎遺跡	小野町小野赤沼字西ノ内	奈良・平安時代の散布地
25	閑根前遺跡	小野町小野赤沼字閑根前	奈良・平安時代の散布地
26	西馬番遺跡	小野町小野新町字西馬番	奈良・平安時代の散布地
27	馬番遺跡	小野町小野新町字馬番・七生根	奈良・平安時代の散布地
28	七生根遺跡	小野町小野新町字七生根	奈良・平安時代の散布地
29	五百成遺跡	小野町皮菴石字五百成	奈良・平安時代の散布地
30	範内遺跡	小野町皮菴石字範内	奈良・平安時代の集落跡
31	北ノ内遺跡	小野町皮菴石字北ノ内	平安時代・近世の集落跡
32	宮ノ前遺跡	小野町皮菴石字宮ノ前	古墳・平安時代の散布地
33	古防遺跡	小野町皮菴石字古防	縄文・奈良・平安時代の散布地
34	神平遺跡	小野町皮菴石字神平	縄文時代の散布地
35	李作遺跡	小野町皮菴石字李作	奈良・平安時代の散布地
36	落合遺跡	小野町飯農字落合	古墳・平安時代の集落跡
37	葛ノ本遺跡	小野町飯農字葛ノ本	奈良・平安時代の散布地
38	二本松遺跡	小野町飯農字二本松	古墳・平安時代の散布地
39	大豆柄古墳群	小野町飯農字大豆柄	古墳
40	月清水遺跡	小野町飯農字月清水	奈良・平安時代の散布地
41	本飯農遺跡	小野町飯農字本飯農	古墳・平安時代の集落跡
42	柿人遺跡	小野町飯農字柿人	古墳・平安時代の散布地
43	前久保遺跡	小野町飯農字河沼・寺ノ下	縄文・古墳～平安時代の散布地
44	作田A遺跡	小野町飯農字作田	奈良・平安時代の散布地
45	作田B遺跡	小野町飯農字作田	奈良・平安時代の集落跡
46	畠田遺跡	小野町小野山字畠田	縄文時代の散布地
47	西牧館跡	小野町小野山字八升蔵	中世の城館跡

模造品が出土している。本飯豊遺跡では7世紀の堅穴住居跡が調査されている。落合・本飯豊遺跡のある丘陵には群集墳の大豆柄古墳群があり、古墳時代において遺跡群を構成するかもしれない。

奈良時代の遺跡は、柿人遺跡・作田B遺跡・本飯豊遺跡・落合遺跡・粧内遺跡・柳作A遺跡・柳作C遺跡で堅穴住居跡が調査されている。これらの遺跡は平安時代まで集落が継続的に営まれる点、堅穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される点で共通する。しかし、この内、落合遺跡や本飯豊遺跡は前代から継続的に営まれている集落であり、粧内遺跡・作田B遺跡・柳作A遺跡・柳作C遺跡のように8世紀に集落が開始される遺跡とは異なる。また、鍛冶久保遺跡・猪久保城跡・北ノ内遺跡・滝遺跡・小滝遺跡などは平安時代の堅穴住居跡は1軒あるいは数軒のみ検出され、本地域での平安時代における集落の在り方は一様でないことがわかる。

鎌倉時代以降、戦国時代までの遺跡の代表例としては、猪久保城跡・鴨ヶ館跡などの城館跡がある。前者は文献に一切記録されていない山城跡で、平場16箇所に主殿や藏を含む掘立柱建物跡8棟の他、門・柵・土橋・堀など多くの遺構が発見され、15世紀前半に破却されたと見られている。鴨ヶ館跡は郡山方面と三春方面の分岐点に古地し、丘陵上では掘立柱建物跡や方形の土坑群が発見され、丘陵斜面から裾部にかけて堀・通路・門を伴う虎口などが発見されている。出土遺物などより、15世紀後半から16世紀前半に機能したとされる。

江戸時代では、鍛冶久保遺跡で17世紀前葉から19世紀始めまでの民家跡を始め、18世紀後半の墓跡、19世紀前半の陶器窯跡が検出されている。江戸時代の墓跡は本飯豊遺跡でも調査された。

(山元・津田)

引用・参考文献

- 矢吹町教育委員会 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告」
 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・福島県土木部
 1998 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告1」
 1998 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告2」
 1998 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告3」
 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4」
 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告5」
 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告6」
 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告7」
 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告1」
 1999 「福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告2」
 2000 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告8」
 2001 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告9」
 2001 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告10」
 2001 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告11」
 2002 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12」
 2002 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告13」
 福島県教育委員会 1996 「福島県遺跡地図 中通り地方」
 1998 「福島県内遺跡分布調査報告4」
 1999 「福島県内遺跡分布調査報告5」
 2000 「福島県内遺跡分布調査報告6」
 2001 「福島県内遺跡分布調査報告7」

第1編 鹿島遺跡

遺跡略号 O N—K S M

所在 地 田村郡小野町大字菖蒲谷字鹿島

調査期間 平成13年9月5日～11月30日

調査員 能登谷宣康・吉田 昌彦・国井 秀紀

山元 出

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

鹿島遺跡は、福島県田村郡小野町大字菖蒲谷字鹿島に所在する。JR磐越東線小野新町駅から西へ約3.2kmに位置し、北約300mに県道矢吹・小野線が通っている。

菖蒲谷地区は、夏井川水系の黒森川の中流域に当たり、東流する黒森川およびその支流が形成した谷・支谷・狭小な低位段丘、およびそれらによって樹枝状に開析された山地性丘陵で地形が構成される。本遺跡は、そのうちの黒森川右岸に南西側から入り込む、両脇を標高500mほどの丘陵に挟まれる細長い支谷に立地する。遺跡は、黒森川から200mほど入り込んだ地点に当たり、標高は460～470m程度で丘陵との比高差は30m程度である。支谷には幾筋もの小支谷が合流しており、谷部を埋積する土壤からは水分の抜ける事のない典型的な谷地である。谷底の東山裾側に沢筋があり、東岸は急斜面となるが、西岸には緩斜面が形成されている。現況は切土と盛土が繰り返され、沢は水田、切土され拡幅された西岸は畑地として利用されている。

近隣の遺跡としては、本遺跡が所在する谷の西側丘陵頂部から裾部にかけて古代の遺物が散布する反田遺跡が存在し、南側の痩せた尾根筋を挟んだ谷地の対岸には本書に所収されている反田B遺跡が所在する。黒森川対岸の丘陵上には縄文時代前期の集落跡である柳作B遺跡が所在し、その北方の谷部には本遺跡と同時代の遺跡である柳作A・C遺跡が位置している。(山元)

第2節 調査経過

鹿島遺跡は、財団法人福島県文化センター（平成13年度より財団法人福島県文化振興事業団に改称）が福島県教育委員会の委託を受けて平成9年度に実施した、あぶくま高原自動車道建設に伴う表面調査により、面積約27,000m²の範囲を遺跡推定地(ON-B2)とした。その後、福島県土木部あぶくま高原自動車道建設事務所より予定工区が提示され、平成12年10～11月に試掘調査を実施した。この試掘調査の結果、堅穴住居跡などの遺構と繩文土器・土師器などの遺物が発見されたことから、工区内の3,300m²に関して遺跡と認定し、小字名から「鹿島遺跡」と命名した。試掘調査の結果を受けて、福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・あぶくま高原自動車道建設事務所の3者で協議をもち、平成13年度に発掘調査を実施することとした。

平成13年度に入り、財団法人福島県文化振興事業団では玉川村に所在する遺跡の発掘調査を優先させ、本遺跡の調査は8月以降に着手することにした。その後、工事側より10月下旬から11月上旬までに本遺跡の調査を終了してほしいとの要望が出され、玉川村分の遺跡の調査終了も9月にずれ込む見通しとなつたが、財団法人福島県文化振興事業団では8月下旬から準備を開始し、9月上旬

から調査員1名を当座配して調査に着手することにした。現地へ進入するには北側の県道小野・矢吹線からあぶくま高原道路予定地を通り黒森川を渡る方策しかとれないため、あぶくま高原自動車道建設事務所を通じ、河川管理側である三春土木事務所とも協議し、進入路を設定した。

9月5日より重機による表土剥ぎと調査連絡所用地・駐車場の造成を開始し、18日からは表土剥ぎが終了した区域から順次人力による遺構検出・精査及び遺物包含層掘り下げを開始とともに調査員を常時3名配して調査に当たった。重機による表土剥ぎは25日に終了した。なお、9月6日に財團法人福島県文化振興事業団より工事側に対して、11月末終了予定の調査工程を提示したところ、工事側より調査終了までは調査区北東方の工事を行う予定であるとの返答を得、提示した調査工程は了承された。

9月末から10月上旬には、雨天による作業中止がしばしばあったが、調査が進むにつれて、調査区南部から掘立柱建物跡を含む柱穴群が検出され、中央部からは竪穴住居跡や溝跡が検出された。また、調査区南東部は沢部であることが判明し、ここに堆積している土量が膨大であることから、この沢部の堆積土除去のために10月中旬より再び重機を投入した。

10月下旬からは、調査区北部の遺構検出・精査及び遺物包含層掘り下げにも着手した。調査区北部からは掘立柱建物跡や土坑が検出され、南東部の沢から小さな沢が入り込んでいることも判明した。この沢は湧水が著しく、足元が悪い上に、調査区境の法面が崩壊するなど作業は難航を極めた。

11月に入ると、連日霜が降りるようになり、日も短くなってくるなど作業条件は徐々に悪くなる一方であったが、調査は終了に向けて徐々に進捗し、12日からは調査の終了した閑場B遺跡より作業員を増員し、19日からは同じく調査の終了した反田B遺跡より作業員を増員したことにより、11月末までの調査終了の目途が立ったことから、27日には工事側に対し現地引渡しを行い、30日までに調査連絡所の撤去及び器材の撤収を済ませて、すべての調査を終了した。なお、11月29日にはフォトバルーン搭載カメラによる遺跡全景の空中写真撮影を実施した。

(能登谷)



図1 鹿島遺跡調査区位置図

第3節 調査方法

鹿島遺跡の発掘調査を行うにあたって、試掘調査担当者立会のもと、工事側の工区を示す幅杭及び地形をもとに調査区を設定し、国土座標軸を基に調査区全体をカバーする10mごとの方眼（グリッド）を設定した。グリッド原点の座標値は、国土座標第IX系X=+141,380, Y=+67,680で、調査区の北西側に位置する。各グリッドには、南北方向に北から南へA・B……Lというようにアルファベットの大文字を付し、東西方向には西から東へ1・2……9というように算用数字を付して、D8グリッド、H5グリッドなどと呼称し、個別の番号を与えた。このグリッド番号は、遺構の大まかな位置表示を行ったり、遺構外遺物の出土位置を表示するのに使用した。

更に、遺構平面図を作成するための水糸ラインを1m方眼で規定した。水糸ラインの方向は、グリッドの分割線の方向と一致しており、その原点はグリッド設定の原点と同じである。水糸ラインには水糸番号を付し、国土座標のXをNに、YをEに置換して、それぞれ座標の下3桁を使用することとした。Nの数値は北へ1m毎に増し、南へ1m毎に減じ、Eの数値は東へ1m毎に増し、西へ1m毎に減ずる。因みに、原点はN380・E680と表される。

また、調査区外の基準点から調査区内のF7グリッド杭（B.M.=464.011m）およびI3グリッド杭（B.M.=468.467m）に水準点を移動し、測量の際の標高算出に使用した。

発掘作業に際しては、重機を使用して調査区の表土を除去し、その後、人力により遺構の検出作業及び遺物包含層の掘り下げを行った。遺構の掘り込みは、堅穴住居跡を4分割法、土坑及び掘立柱建物跡の柱穴は2分割法を基本とし、4分割法の場合、北東区画から時計回りにa-d区と表記することとした。遺物の取り上げに際しては、遺構内のものは上記の区画ごと、遺構外のものはグリッドごとに取り上げ、遺構外の土層番号は基本土層をLとローマ数字を組み合わせてL I・L II……と表し、遺構内の土層はlと算用数字の組み合わせでl 1・l 2……と表記した。なお、さらに分層される堆積土については、小文字のアルファベットを付加して使用した。

調査の記録は、実測図作成及び写真撮影により行った。遺構図は、基本的に1/20縮尺で平面図と断面図を作成し、遺構の細部・遺物の出土状態などを1/10縮尺、調査区の地形測量図を1/200縮尺で作成した。写真是、検出状況・土層堆積状況・完掘全景などについて3.5mm判及び6×4.5cm判のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用して随時撮影し、調査終了時にはフォトバルーン搭載カメラによって、遺跡全景や調査区各部の空中写真撮影を実施した。

調査において出土した遺物は、財團法人福島県文化振興事業団に持ち帰り、個々に出土地点を記録して、遺構ごとあるいはグリッドごとに整理（接合・図化・写真撮影）した。(能登谷)

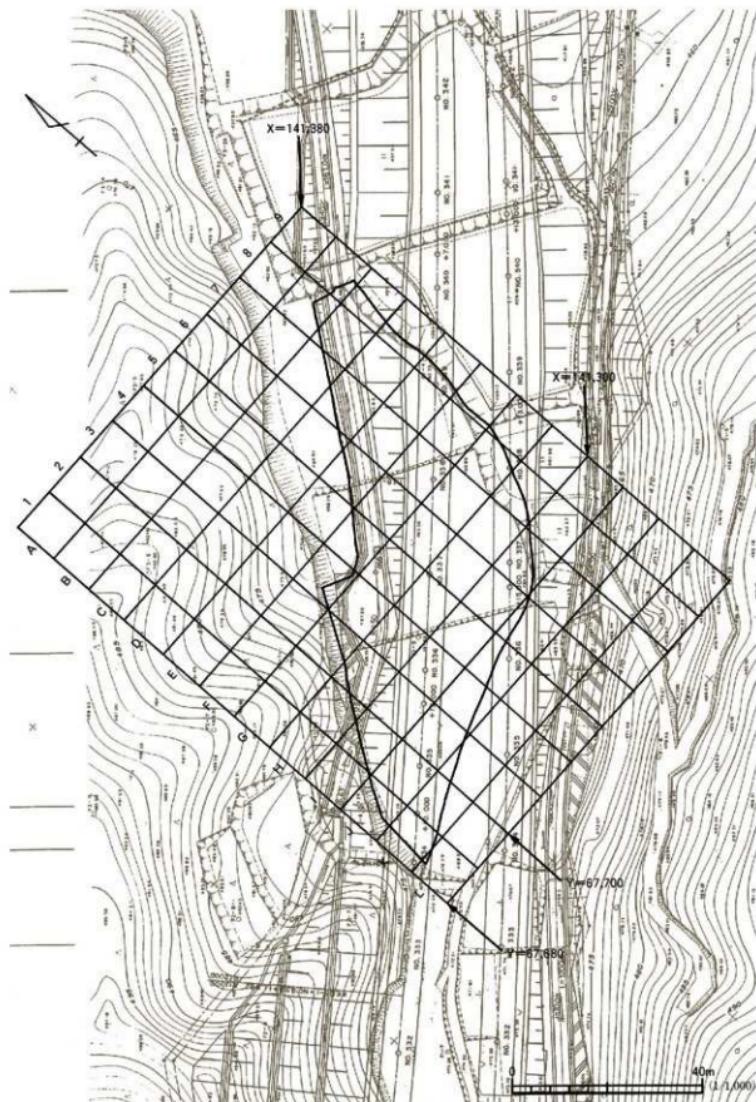


図2 グリッド配置図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布状況（図3、写真1-3）

今回の調査において、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、柱列跡1列、土坑8基、溝跡3条、小穴138基が検出された。

調査区は北東-南西方向に長く、東部に谷の沢筋があり、西半はその西岸の緩斜面である。東部の沢筋は水田開発に伴って削平されており、全ての遺構は西岸緩斜面から検出されている。西岸緩斜面には、北部・中央部・南端部に3筋の小支谷が入り込んで、それによって遺構の分布も区切られている。

北部の小支谷の南岸には1・2号建物跡、1号柱列跡、小穴群、2・3・5～8号土坑が分布している。この部分の土壤は特に水気が多く、近現代の暗渠が縦横に走っている。中央部の小支谷の北岸には1・2号住居跡と3条の溝跡および若干の小穴がある。その対岸には3号建物跡と4号土坑、小穴群が分布する。中央部と南端部両支谷間の沢筋の落ち際には1号土坑が孤立して存在している。また、各小支谷に堆積する黒色土は、縄文時代の希薄な遺物包含層となっている。（山元）

基本土層（図3・4、写真1-4）

調査区内における基本土層の観察は5地点において行った。北部の小支谷の堆積状況はC・D8グリッドに設定したトレンチにおいて行い（E-E'）、中央部の小支谷についてはH6・7グリッドに設定したトレンチにおいて行った（D-D'）。沢部についてはG・H7グリッドにトレンチを設定して行った（C-C'）。緩斜面の堆積状況については畑の段に沿って、E6～F7グリッド（A-A'）とH4～J6グリッド（B-B'）に設定した観察用ベルトによって行った。なお、調査区全域には耕地造成に伴う盛土が厚く施され、沢部では層厚90cmを測った。

L Iは盛土施工前の旧耕作土であり、緩斜面上では4層、沢部では6層に細分された。基本的に砂質で、沢部ではグライ化層を挟む水成堆積を呈する。

L IIは緩斜面上に堆積する黒色土で、2層に細分される。上位のL II aは褐灰色土をマーブル状に含み、土師器を包含する。L II bは基本的に無遺物層であり、古代以降の遺構の検出面となる。

L IIIは小支谷内に堆積する土で、縄文土器を若干包含している。一部には沼沢バミスを含む。

L IVは2層に細分される。L IV bは特に粘性・締まり共に強い不透水層となる。

L Vは漸移層であり、沢部ではグライ化している。

L VIは基盤層で、斜面では粘質土もしくは真砂土であり、沢部では砂である。

（山元）

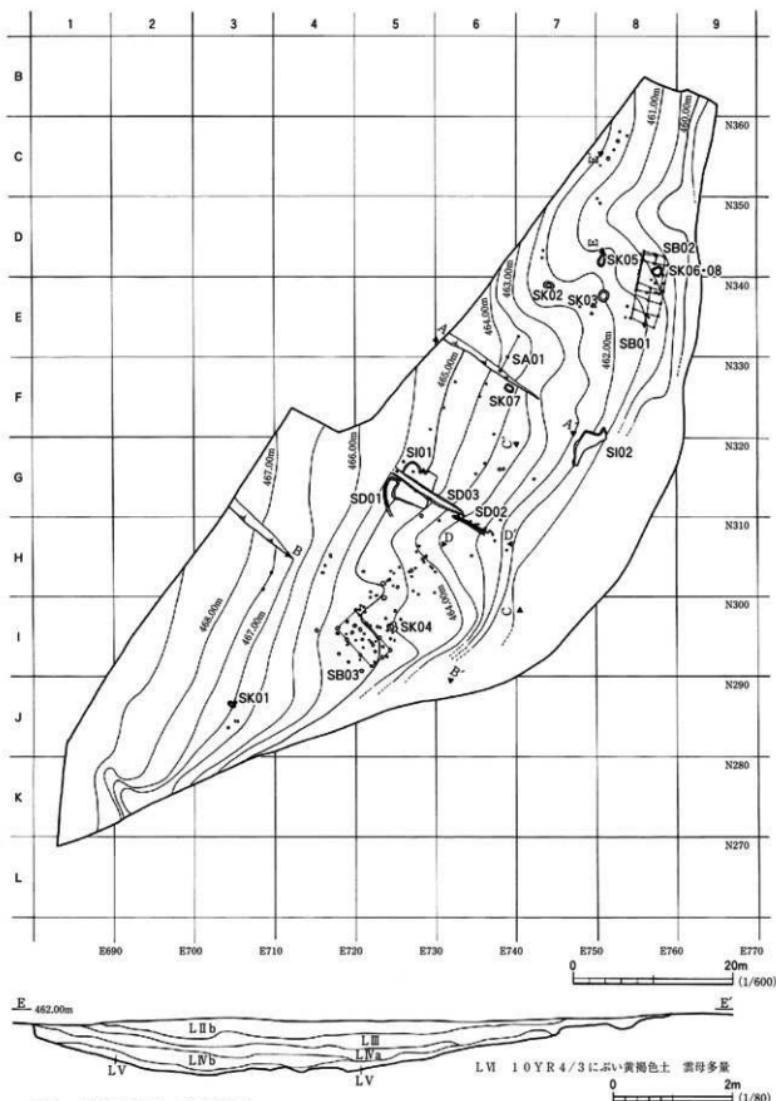


図3 遺構配置図・基本土層

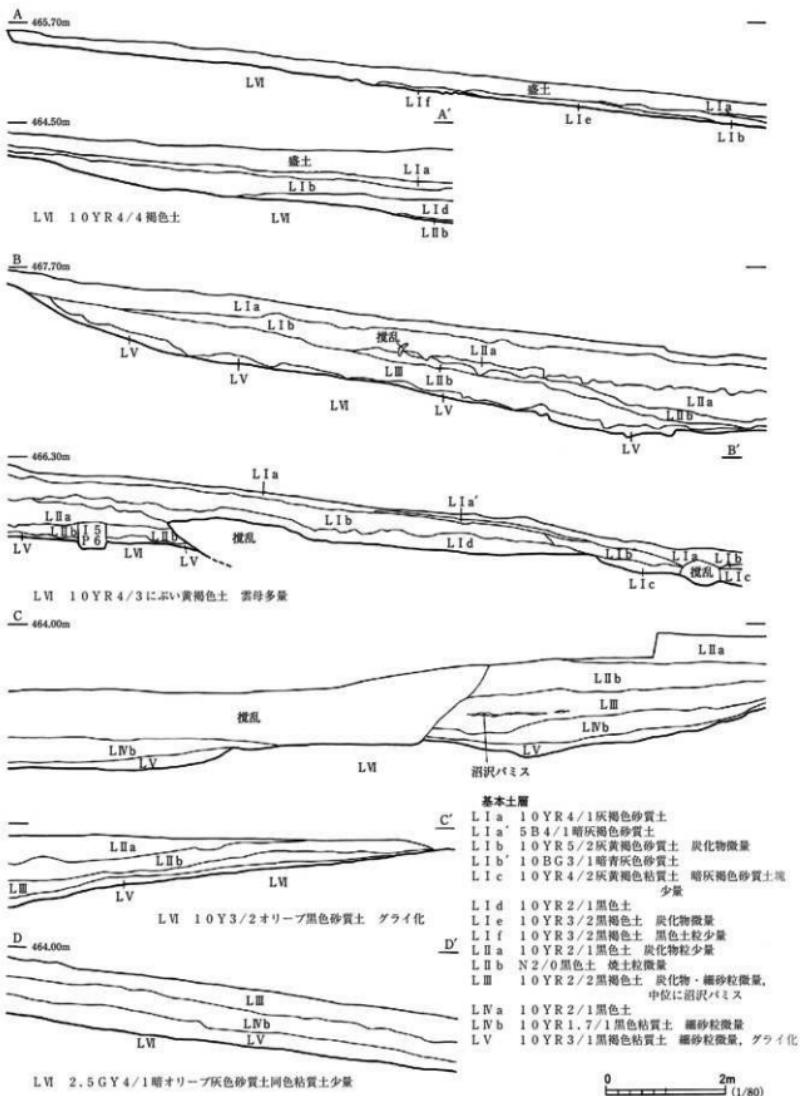


図4 基本土層

第2節 壁穴住居跡

今回の調査では、壁穴住居跡が2軒検出された。いずれも、カマドを有する方形基調の壁穴住居跡で、出土遺物から平安時代前半に帰属するものと推測される。

1号住居跡 S I O 1

遺構(図5~8、写真1~5・6)

調査区中央部のG 5・6グリッドに位置する。本遺構は、平成12年度に実施された試掘調査の際に、今回調査の基本土層L II b上面で検出された。本遺構は、北西から南東方向に下降する傾斜面上に構築されていることから、西側では壁が高く遺存するが、東側では壁が遺存していない。本遺構の西側に隣接する1号溝跡は、溝跡の位置や堆積土の特徴から、本遺構の外周溝と考えている。本遺構中央とその東西では新しい時期の小穴G 5-P 5~8と重複している。

遺構内堆積土は、10層に分けられ、 ℓ 1・2は含有物や堆積状況から人為堆積土、 ℓ 3~6は凸レンズ状の自然堆積土、 ℓ 7~10は人為堆積による埋土と考えている。この内、 ℓ 8~10は貼床と判断した。

平面形は、遺存状態から方形を呈するものと推測され、西壁の下端で計測した軸方位は、真北から22° 東を指す。遺存する規模は、東辺4.5m、西辺4.7m、南辺4.5m、北辺4.5mを測り、検出面からの深さは最大55cmである。周壁は、西壁と南・北壁の一部が残り、遺存状態の良好な西壁は直立に立ち上がる。床面は、掘形底面に新たな土を入れて整地され、多少の凹凸があるもののほぼ平坦である。貼床は床面の全面に認められ、床面の中央には踏み締まりが認められる。また、床面には、西壁側中央から東側にかけて排水溝が掘り込まれるが、この溝は住居内で終息する。掘形は、南西側を除く範囲に確認され、東側では床面から最大47cm掘り込まれている。掘形底面の西側にはL VIが観察されるのに対して、東側ではL II bが観察される。東側が深く掘り込まれているのは、東側がL II bであるため、あるいは、防湿のためと考えられる。

遺構内施設としては、カマド2基とピット20個が確認された。カマドは北壁と西壁に認められ、その遺存状態から、カマドの作り替えが行なわれていたと考えられ、住居廃絶時には最終的に北壁側のカマドが使用されている。

新カマドは北壁中央部に取り付き、カマドの両袖と燃焼部が確認されている。カマド内堆積土は5層に分けられ、 ℓ 1が住居内堆積土の ℓ 4に相当し、 ℓ 2~4は燃焼部天井崩落土。 ℓ 5はカマド袖である。カマドの構造は、北壁のL VIに褐色土を貼り付けた袖が貼床上に作られている。袖は北壁から約65cmの長さが遺存し、高さは20~25cmを測る。また、袖先端部には土師器壺や石が芯材として使用されている。燃焼部底面から側壁と奥壁にかけて、楕円形を呈する赤褐色の焼土化範囲が形成されている。その規模は、長径1.65m、短径70cmを測り、厚さは最大4cmまで達する。この他

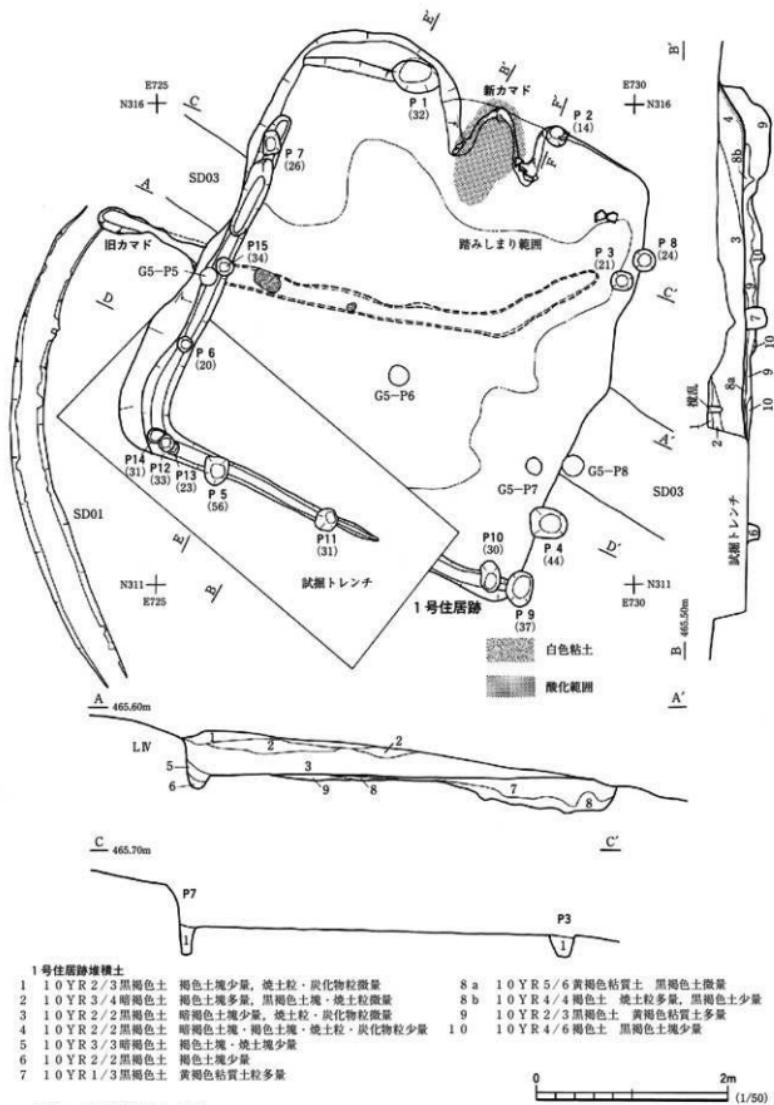


図5 1号住居跡（1）

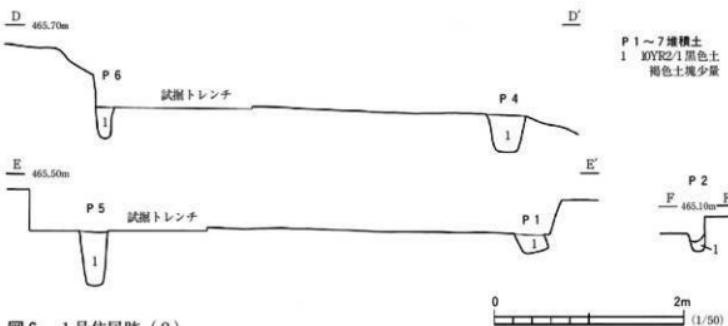


図6 1号住居跡（2）

に、燃焼部奥壁の直下には、白色粘土が認められる。

旧カマドは西壁に取り付き、煙道部のみが確認されている。煙道部直下の床面には焼土化範囲は確認されなかった。旧カマド内堆積土は5層に分けられ、ℓ1・2は流入土、ℓ3は煙道部天井の崩落土、ℓ4・5は煙道部掘形埋土である。このことから、煙道の天井は、煙道内に流入土が堆積する以前に崩落したものと考えている。また、煙道上部が削平されているものの、煙道の断面や堆積土から、煙道はトンネル状に掘り込まれていた可能性が高い。煙道底面は、燃焼部奥壁から外側に向かって12°の角度で傾斜し、高くなる。煙道はL VIを掘り込んで作られ、規模は、全長1.15m、最大幅2.5cmを測り、検出面からの深さは最大2.5cmである。煙道の側壁の上半部は、赤褐色に焼土化し、その厚さは4cmまで達する。

ピットは、P 1～16が床面及び壁溝内、P 17～20が床下から検出された。P 1～4・8・9は床面から確認され、P 5～7・10～15は壁溝から検出した。いずれも、その位置から壁柱穴と考えられる。ピットの平面形は円形と梢円形が多いが、P 7は長方形を呈する。規模は、長径1.6～5.0cm、短径1.5～3.3cmを測り、P 1・4・5・9は他のピットに比べて大きい。ピットの深さは1.4～5.1cmであり、その平均は約3.0cmである。P 16は旧カマドの北側に構築され、貼床により埋め戻されている。平面形は梢円形を呈し、規模は長径8.5cm、短径6.5cmを測る。P 16の性格は、配置や規模から旧カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。P 17～20は床下ピットである。

遺物 (図8、写真1-17)

本遺構からは、土師器片135点、須恵器片1点が出土した。遺物は各層から出土しているが、カマドと床面直上から約半数が出土している。その内、特徴的で遺存状態が良好な土師器片3点、須恵器片1点を図示した。図示できなかった土師器には杯と甕の器種が見られ、杯はロクロ整形で内面にヘラミガキの後に黒色処理が施される。甕は小型と大型のものが見られ、非ロクロ整形のものが多い。

図8-1～3は土師器である。1は西壁中央から東側に延びる溝内より出土した手捏土器で、底

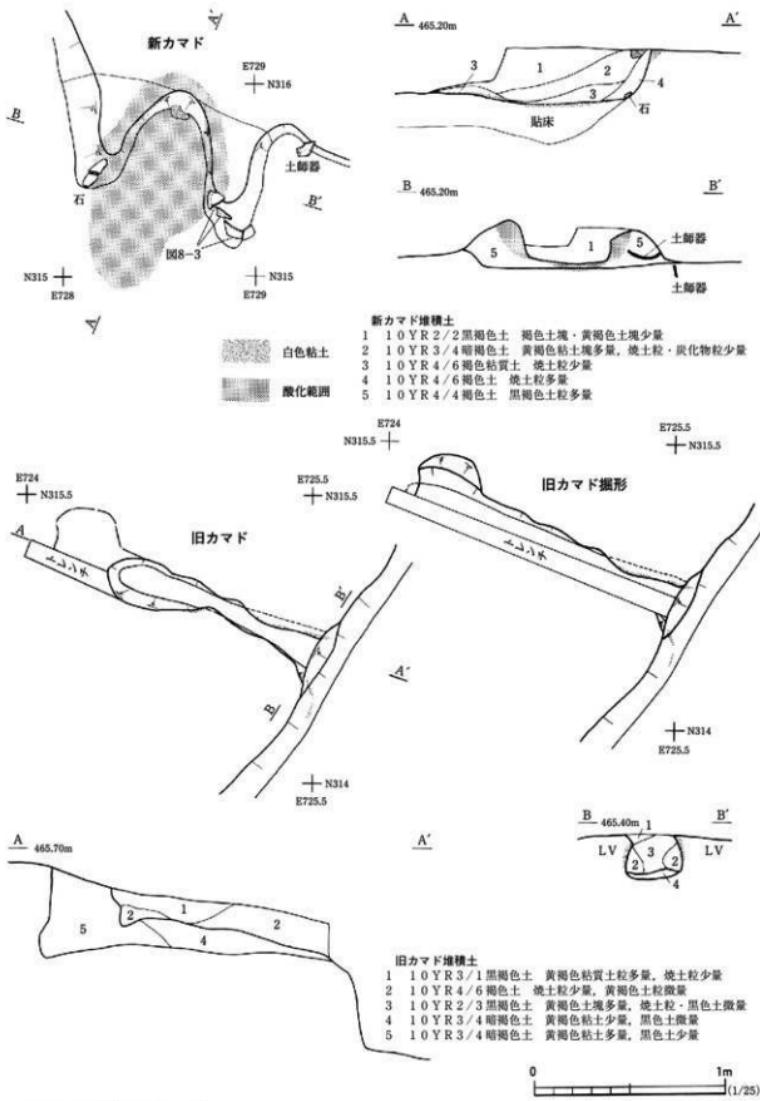


図7 1号住居跡カマド

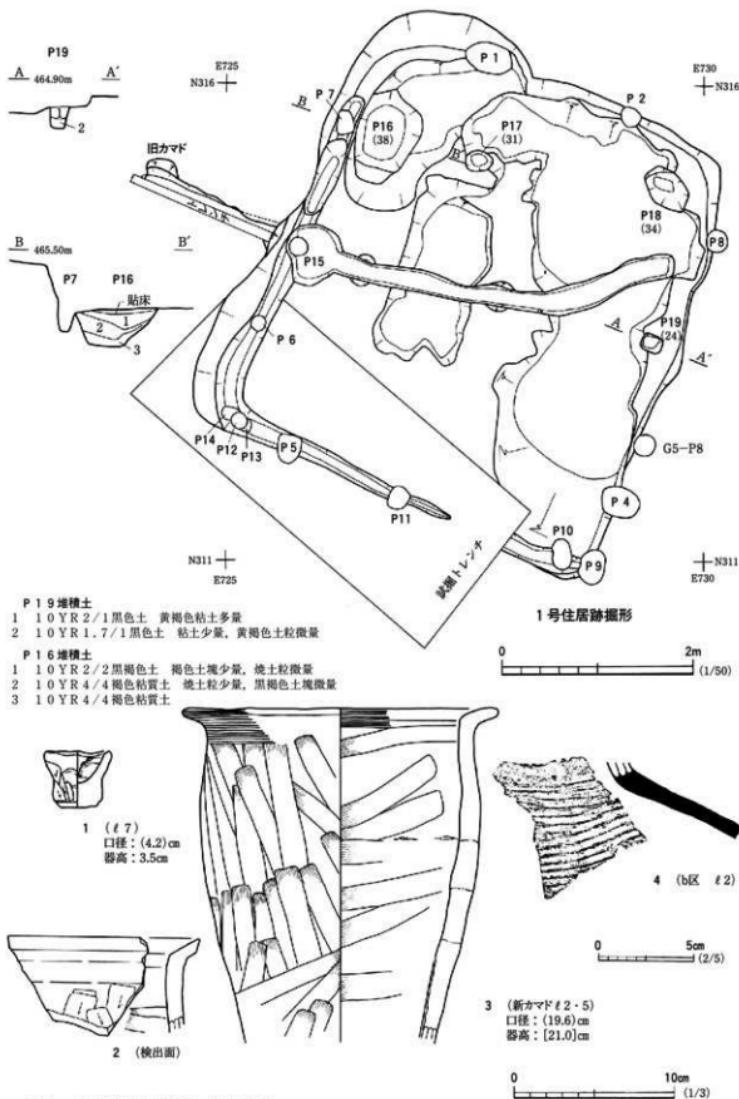


図8 1号住居跡掘形、出土遺物

部から直立気味に立ち上がり、胴部から口縁部にかけて外傾する。調整は内面にナデ、外面には指頭痕の後にケズリが観察される。2・3は壺で、2がロクロ整形、3が非ロクロ整形である。2は「く」字状に屈曲する口縁部片である。3は新カマド内から出土した長胴壺で、口縁部が「く」字状に屈曲する。器面調整は、外面にヘラナデ、口縁部外面にヨコナデが観察される。

図8-4は須恵器壺の肩部片である。内面に当具痕は確認できないが、外面には平行タタキメが観察できる。胎土内には白色の細粒が認められ、焼成は硬く良好である。

まとめ

本遺構はカマドの作り替えが確認された壁柱穴構造の堅穴住居跡である。特徴的な施設として、住居跡の外周溝や住居跡内の壁溝、床面下の溝が確認され、遺構の立地からいすれも排水関係の施設と考えている。遺構の年代は、住居跡内から出土した遺物の特徴から9世紀前半と考えている。

(国井)

2号住居跡 S I O 2

遺構(図9・10、写真1-7・8)

本遺構は、調査区中央部の南東向き緩斜面に存在し、F7・F8・G7・G8グリッドに位置している。L VI上面で黒色を呈する北東-南西主軸の長方形の落ち込みとして検出した。ただ、重機による表土剥ぎの際に、遺構の南東側半分を削平している。

遺構南東側半分を欠失していることから全容が不明であるが、平面形は、長方形ないしは方形を呈していたものと推測される。なお、西壁のほぼ中央部は外側へ弧状に張り出している。北西隅と南西隅を結んだ線を主軸とした場合、その方位はN約20°Eを測る。南北長は4.4mを測り、東西の残存長は北部で3m、南部で60cmを測る。

床面は貼床で堅く締まりがあり、全体的に斜面下方の南東方向に緩く下降している。また、床面北半は平坦であるのに対して、床面南半は起伏があり、不整である。北西隅に長さ1.27m、幅2.5cm、深さ約10cmの壁溝が存在する。他に、柱穴と推測されるピットなどは検出されなかった。

周壁は西壁と北・南壁の西部が残存している。周壁の立ち上がりは直立気味であるが、西壁のほぼ中央部は比較的緩く、北部ではオーバーハングしている。壁高は西壁中央部から北部にかけては3.3~3.7cmを測り、北壁は東方に行くにつれて低くなっている。なお、南西部は削平したため、約10cmの残存高となっている。

遺構内堆積土は3層に分かれ、 ℓ 1は径5mm~3cmの灰白色粘土を多量に含むが自然堆積土と推測され、 ℓ 2・3は西壁中央部の崩落土である。 ℓ 4~14は貼床土で、基本的には黄褐色粘土ないしは青灰色粘土・緑灰色砂質土を多量に含み、堅く締まっている。堆積状況から ℓ 4~8、 ℓ 9~10、 ℓ 11~13の3段階に分けて投入されたものと推測される。この貼床土の厚さは、西壁際では約10cmであり、それより東方では2.0~4.0cmを測る。

遺構内堆積土の ℓ 1~3を除去したところ、遺構北東部からカマドが検出された。北壁に付設さ

れたもので、燃焼部と煙道部からなり、煙道部が住居外の北東方向に延びている。燃焼部底面の被熱範囲の南端から計測した全長は1,63mを測り、主軸方位はN15°Eを測る。

燃焼部の奥側は北壁から40cm程張り出して設けられており、左袖は住居内に直線的に張り出している。右袖は削平により残存していないことから不明であるが、左袖はにぶい黄色粘土と土師器甕片を芯材に、客土して構築されている。左袖の規模は、長さ37cm、幅45cm、高さ約10cmを測る。左袖の壁面は被熱により硬化している。底面は緩く東方に下降しており、中央部に硬化した約5cmの高まりがある以外は、主軸方向では水平である。この高まりは被熱により硬化したものと推測され、その範囲は東西45cm、南北35cmの不定形である。更に、その周りには硬化していない暗赤褐色の被熱範囲が確認され、その範囲は長軸70cm、短軸65cmの不整形を呈している。燃焼部と煙道部の境は不明瞭であるが、主軸方向で水平な部分は、被熱範囲の南端から80~90cmの地点まで続いている。

燃焼部の奥側及び煙道部の住居外への張出しあは、平面形が不整三角形を呈し、規模は長さ1.1m、南端部の幅80cmを測り、北端から55cmの地点での幅は50cmを測る。煙道部底面は、燃焼部底面から続く水平面の端部から40cmほどは緩く上昇し、それより北方では更に緩く上昇している。なお、燃焼部から続く水平面との傾斜変換点の両脇より、別個体の土師器甕の大型破片がそれぞれ外面をカマド内に向けて立て掛けられて出土し、更に、それぞれの破片内からは対面する土師器片と同一個体の破片が出土した。

カマド内堆積土は3層に分かれ、 ℓ 1・3は煙道構築土と推測される土や焼土粒を含む自然堆積土、 ℓ 2は燃焼部天井崩落土と推測される。 ℓ 4以下は袖構築土・掘形埋土・貼床土である。 ℓ 4は被熱により硬化している。

貼床土を全て除去した段階の掘形底面は、西壁際約40cmでは段状になっており、それより東方は起伏が激しく、全体的に不整である。また、西側約1.6mはLVI、その東方はLIII~Vである。掘形底面の東西長は北部で3.1m、南部で1.6mを測る。なお、カマド燃焼部に当たる部分は掘形底面を更に長径90cm、短径79cm、深さ18cmの楕円形に掘り込んでおり、その底面中央部は主軸方向に延びる溝状となっている。

遺物(図10・11、写真1-17)

遺構内堆積土より土師器片34点が出土し、カマド内堆積土より土師器甕2個体分を含む土師器片37点が出土した。図示した土師器の他、ロクロ整形の土師器甕の口縁部破片も出土した。

図10-1・2は、 ℓ 1から出土したロクロ整形の土師器杯で底部から口縁部に向かって内湾気味に立ち上がるが、2の口縁部では若干外反する。体部下半から底面にかけて回転ヘラケズリされ、底面切り離しは不明である。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。なお、1の外面には欠損のため全体の様子は不明であるが、文字の下部が「十」と墨書きされている。

図11-1・2はカマド煙道部より出土した非ロクロ整形の土師器長胴甕である。1は底部を欠失しているが、胴部は内湾気味に立ち上がり、頸部で緩く屈曲して口縁部に至っている。口縁部の立

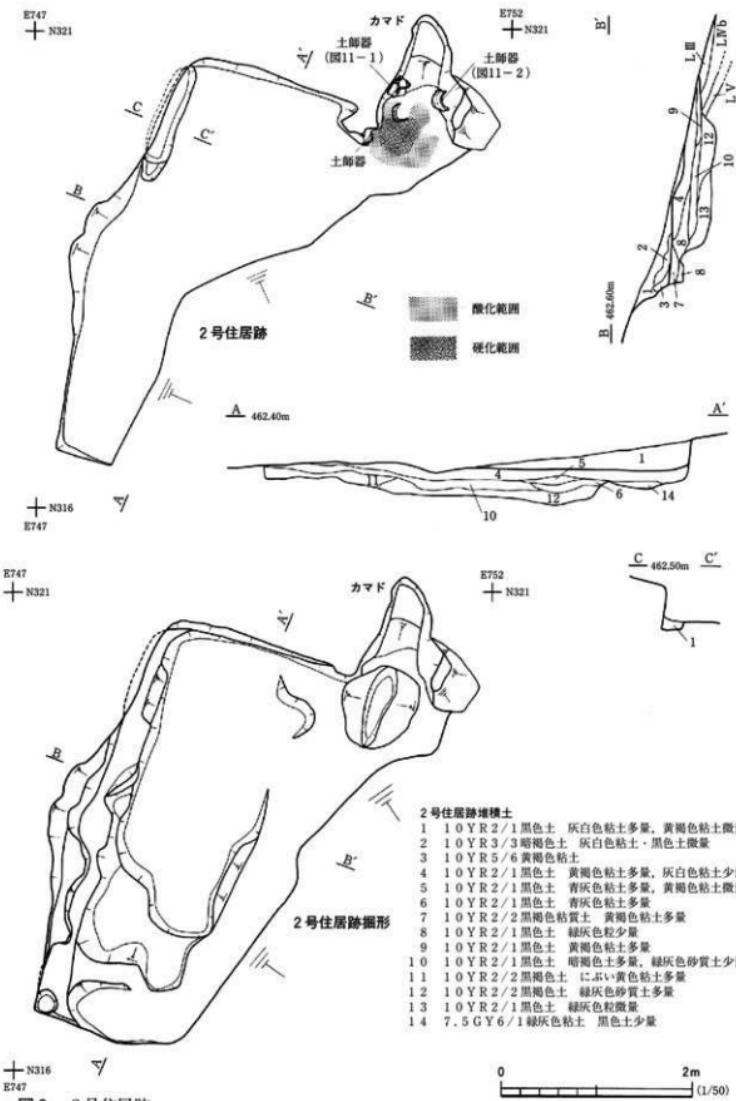


図9 2号住居跡

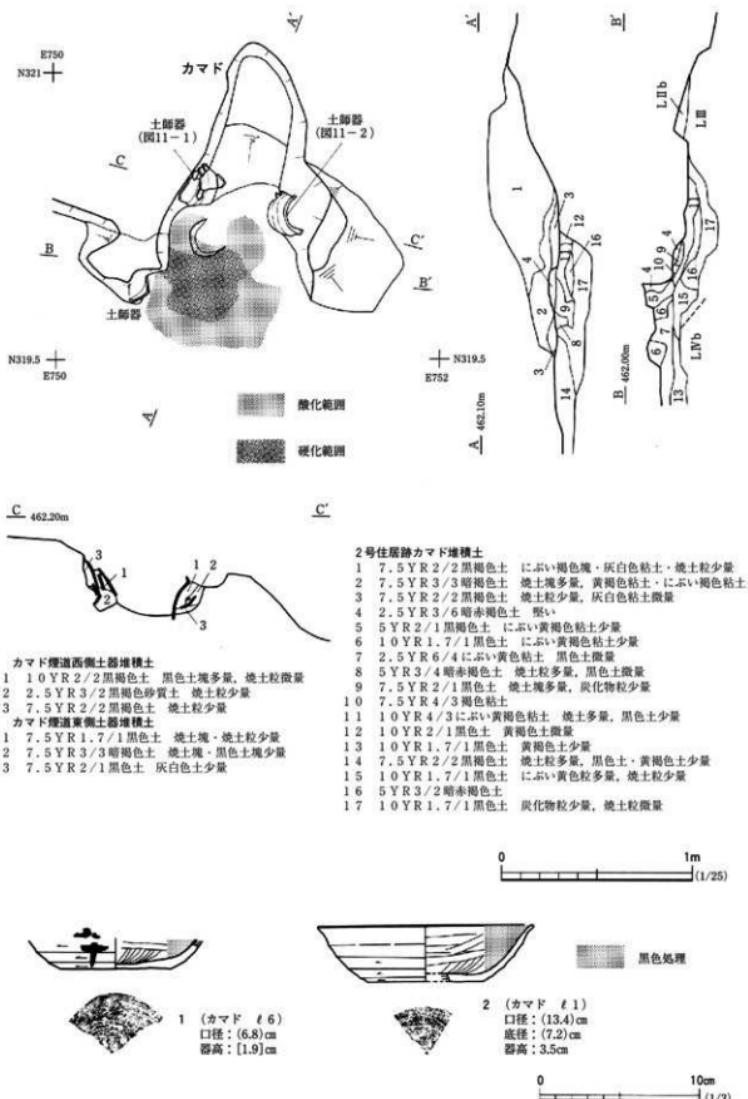


図10 2号住居跡カマド、出土遺物

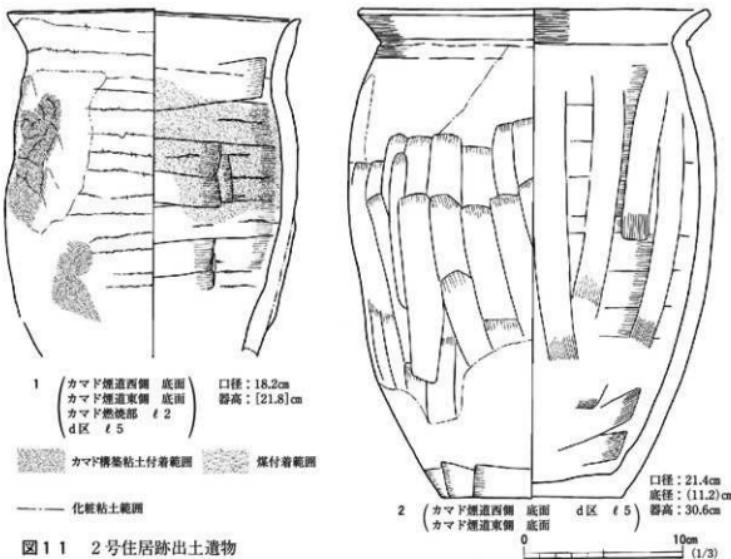


図11 2号住居跡出土遺物

ち上がりは急で、端部は薄く作られている。内外面には粘土積み上げ痕が顕著に認められ、外面に部分的に残存する化粧粘土の上にはヘラナデが認められる。内面もヘラナデされている。2は底部から内湾気味に立ち上がり、頭部で「く」の字状に屈曲する器形で、胴部上半に張りを持つ。口縁部は短く直線的に外傾し、端部は丸く作られている。外面は胴部下半をハラケヅリした後に化粧粘土を施したものと推測され、その後、両面とも口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデされている。

まとめ

本造構は南東側半分を欠失しているが、カマドを持つ竪穴住居跡で、カマドは北壁に付設されている。床面は厚い貼床で、柱穴は確認されなかった。なお、カマド燃焼部の一部が北壁から張り出して設けられているのが特徴的で、底面の傾斜変換点の両脇から立った状態で出土した土師器甕片は煙道基部の芯材と推測される。

遺構の時期は、出土遺物から平安時代前葉の9世紀前半と推測される。

(能登谷)

第3節 掘立柱建物跡

今回の調査において、掘立柱建物跡が調査区北部から2棟、調査区南部から1棟検出された。調査区北部の1・2号建物跡は重複しており、3号建物跡は多数の小穴とともに検出された。1・2号建物跡と3号建物跡は占地を異にし、柱穴の規模、柱間寸法、軸線方位も異なることから、両者

の時期は異なるものと推測される。

1号建物跡 SB01

遺構 (図12、写真1-9)

本遺構は、調査区北部のD・E 8グリッドに位置し、沢に向かう下りの緩斜面上で検出された。P1とP7の標高差は1.3mである。当初、P6~8・15の4基が検出されていたが、その後、LVI上面で、周囲から小穴40個が発見されたため、それらの中から配置や深さ・堆積土等を考慮し、最終的に17個が本遺構を構成するものとした。本遺構北側に重なるような形でSB02が重複している。P17がSB02・P8に切られていることから、本遺構より新しいことが判明している。さらに、遺構同士の直接の切り合いがないので新旧関係は不明であるが、遺構範囲内にはSK06・08が存在する。また、本遺構周辺には西方5m程度の所にSK03・05、南方約15mにSI02が存在する。

本遺構は、南北に長い長方形の身舎と南北の庇から構成されている。全体の規模は、南北長8.7m、東西長3.45mを測り、軸線方位は身舎の東側柱列でN12°Eである。身舎は南北3間、東西2間で、南北に長く、身舎の規模は北側柱列で3.45m、東側柱列で6.55m、南側柱列で3.2m、西側柱列で6.35mを測り、柱間寸法は北側柱列で西から1.7+1.75m、東側柱列で北から3.25+1.65+1.65m、南側柱列で西から1.75+1.45m、西側柱列で北から2.9+1.7+1.75mを測る。北の庇は1間×1間で、規模は北側柱列で1.6m、東側柱列で0.95m、西側柱列で0.6mを測る。南の庇は1間×2間で、規模は東側柱列で1.5m、南側柱列で3.1m、西側柱列で1.15mを測り、南側柱列の柱間寸法は西から1.8+1.3mを測る。

柱穴の平面形は梢円形を呈するものが多く、P3・16・17の3個のみが隅丸方形である。柱穴の規模は長径20~46cm(平均28.4cm)、短径16~34cm(平均23.8cm)を測る。深さは14~78cmを測り、遺構南側平坦部で深く、北側斜面では浅いという傾向を示す。柱穴内堆積土は黒色土を主体とし、地山の褐色粘土塊を含んでいる。P9・14の2個は暗渠排水のための搅乱溝の真下にありグライ化が見られた。さらに、P9では土層中に柱材が残っていた。また、P3・1より土師器片1点が出土した。

まとめ

本建物跡は、南北3間、東西2間の身舎の南北に庇がつく南北棟の掘立柱建物跡で、本遺跡では最大規模の遺構である。身舎の東側柱列の内、北側2個のP1・2の柱間は、南側の各柱間の約2間分に当たり、北側柱列・南側柱列の長さともほぼ近い。また、P2・10の中间点及びP3・9の中间点にはそれぞれP13・14が存在し、身舎の柱穴配置に南北で差が見られる。身舎は北のP1・2・10・11で囲まれる部分と南のP2・4・8・10で囲まれる部分からなる2間構造であり、北は土間と推測される。この北側の広い部分にSK06・08の2基の土坑が存在しており、本建物跡とは何らかの関連があったものと思われる。

本建物跡の機能した時期については、特定するには至っていない。

(吉田)

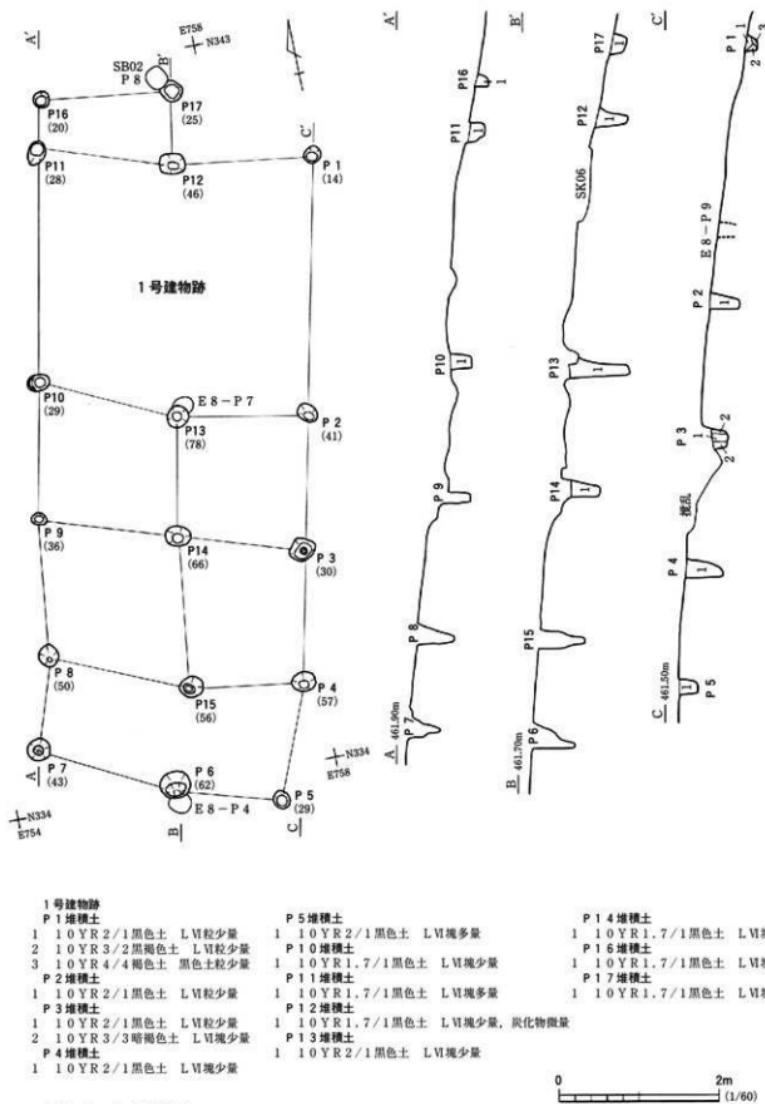


図12 1号建物跡

2号建物跡 SB02

遺構(図1.3、写真1-10)

本遺構は、調査区北側の緩斜面に存在し、D・E 8 グリッドに位置する。LVII上面において検出された。周辺には、西方 5m 程度の所に SK 03・05、南方約 20m に SI 02 が存在する。SB 01 と重複しており、ピットの重複状況から、SB 01 は本遺構より古い時期のものと考えられる。さらに、遺構範囲内に SK 06・08 が存在するが、直接切り合いがないので新旧関係は不明である。

本遺構は、P 1～8 の柱穴からなる掘立柱建物跡である。平面形は、東西 2 間、南北 2 間の南北に長い長方形で、軸線方位は西側柱列で N 12° E である。規模は、北側柱列で 2.6 m、東側柱列で 4.6 m、南側柱列で 2.95 m、西側柱列で 4.95 m を測り、柱間寸法は北側柱列で西から $1.45 + 1.15$ m、東側柱列で北から $2.2 + 2.4$ m、南側柱列で西から $1.45 + 1.5$ m、西側柱列で北から $2.5 + 2.45$ m を測る。柱穴の平面形は楕円形ないしは隅丸長方形を呈する。規模は長軸 2.1～3.6 cm、短軸 1.9～2.8 cm、深さ 2.1～3.5 cm を測る。柱穴内堆積土は雲母を多量に含む黒色土で、L II に相当すると思われる。また、各柱穴内からは遺物は出土していない。

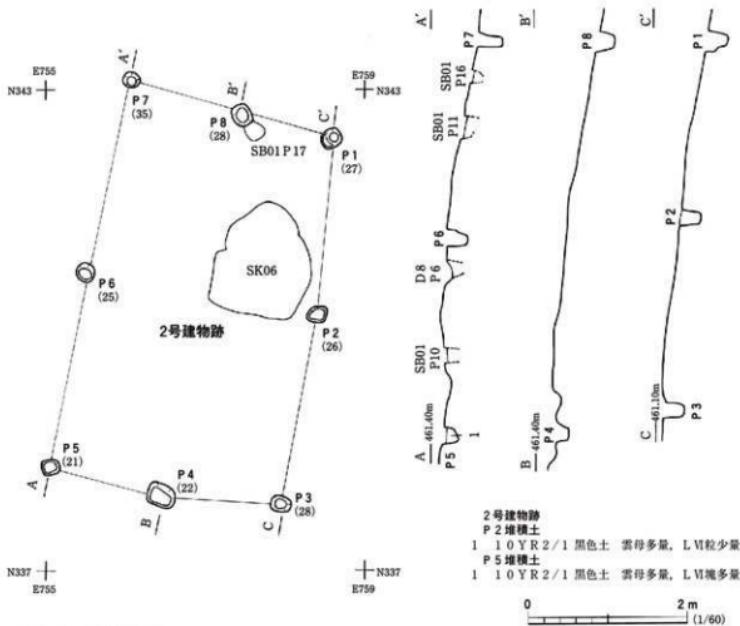


図13 2号建物跡

まとめ

本建物跡は、南北2間、東西2間の南北棟である。南側及び北側柱列の柱間は1.15~1.5m間隔で、東側及び西側柱列の柱間は2.2~2.5mである。SB01より新しいことは判明しているが、本建物跡の所属時期を知ることのできる資料は出土していない。

(吉田)

3号建物跡 SB03

遺構(図14、写真1-11)

本遺構は、調査区南部のI4・5グリッドに所在する。地形は遺跡の所在する谷戸の沢筋と、調査区中央に東西に入り込む小支谷の合流地点の西側に形成された緩斜面に位置する。検出面はLIIbで、同時に52個の柱穴が検出されたが、配列がよくわからなかったため、半裁して堆積土の観察を行った後に、最終的にはLVI上面まで掘り下げて遺構の確認を行った。その結果、沢筋に桁が直交するように配列された柱穴の組み合わせを抽出できたため、掘立柱建物跡と判断した。近接する遺構はピットの他に、東3mにSK04が所在し、小支谷を挟んでSI01と対峙している。他遺構との重複は、本遺構のP1がI4-P4と切り合っており、土層断面の観察により、本遺構の方が新しいと判断した。

柱穴は10個の柱穴が桁行3間、梁行2間になるように配列されている。各柱筋はそれぞれ直交せず、若干歪みが見られる。また、棟持柱と思われるP2はP1-3を結ぶ線よりも、30cm程度内側に入り込んでいる。桁方向の柱筋は、P1-8間を基準とすると、N43°Wを指し、南西から北東方向に伸びる谷の開口部に正面が向くような形になる。全体の規模は、四隅の柱穴の中心間距離で、桁行は北東辺6.6m、南西辺6.5m、梁行は北西辺3.4m、南東辺3.2mを測る。各柱穴間の距離は、梁方向1.5~1.7m、桁方向は中央の柱間が広く取られ2.4~2.5m、両脇が2~2.1mを測る。

各柱穴は径3.5~4.5cmの隅丸方形を基調とする形状に掘り込まれている。LVI上面からの深さは3.5~6.1cmを測る。図14のC-C'を見ると、北西のP1とP2が浅いことが目に付くが、この部分はLIIb・IIIの堆積が他所よりも厚いためと思われる。故に元来、これらの柱穴は斜面の傾斜に沿って6.0cm程度掘り込まれていたものと推測される。柱穴内堆積土は、多くがLIIaを主体とし、LVIを多量に含んだ土で、P9・10のように石が投げ込まれているものもあった。また、柱痕も認められず、全て柱抜き取り後に埋め戻されたものと思われる。P5では#1~3が柱痕状の堆積を見せるが、これらの土層にはLVI塊を含んでおり、これも柱のみ抜き取られ、後に埋め戻されたものと考えられる。

柱穴内から遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、沢沿いに作られた2間×3間の掘立柱建物跡である。出土遺物がないため詳細な所属時期は分からぬが、堆積土が土師器を包含するLIIaを基調としていることから、平安時代以降の所産と考えている。

(山元)

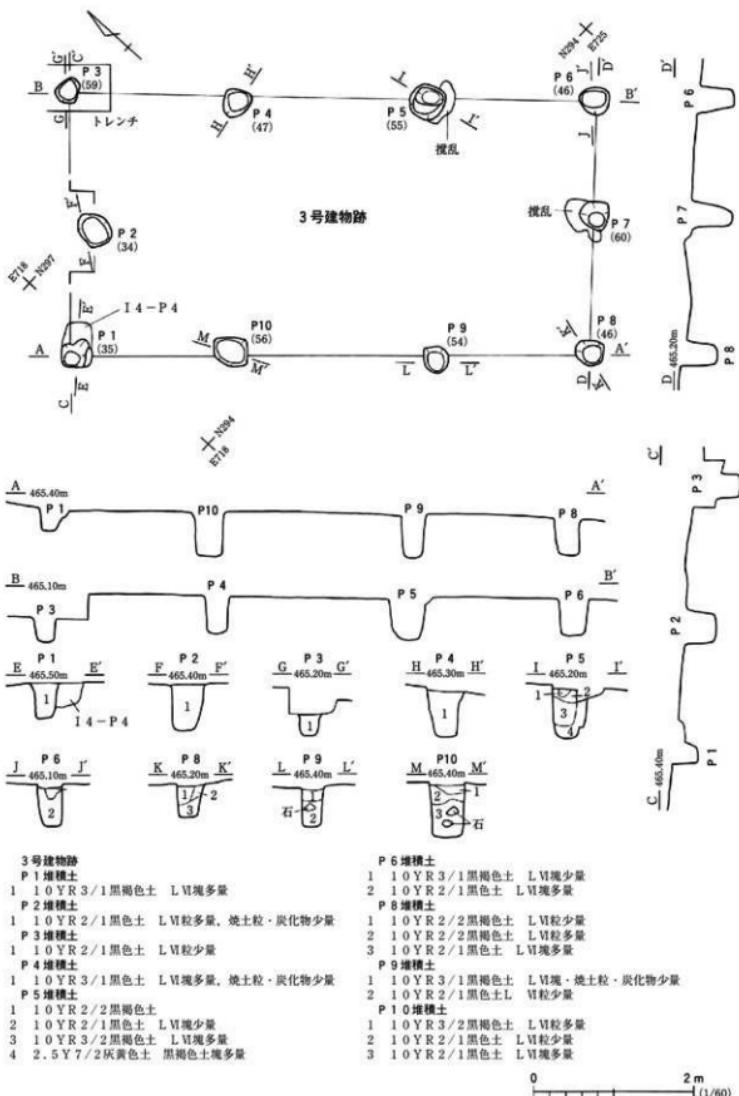


図14 3号建物跡

第4節 柱 列 跡 N333 E738

1号柱列跡 SA 01 (図15)

本遺構は、調査区中央部やや北寄りに存在し、E 6・E 7・F 6グリッドに位置する。L II上面でP 2・3を検出し、さらに、L VI上面でP 1を検出した。これら3個が1列に並んでいること、堆積土の状況などから、L VI上面で柱列として確認した。重複する遺構はない。P 1の南東2mにSK 07が存在する。全長は4.9mを測り、軸線方位はN 30°Eである。柱間寸法は、P 1-2が2.05m、P 2-3が2.85mを測る。柱穴の平面形は円形ないしは梢円形を呈し、規模は長軸3.6~4.5cm、短軸3.2~4.3cm、深さ3.6~5.4cmを測る。また、P 1の周囲は浅いくぼみとなっている。柱穴内堆積土は黒色土主体で粘性がある。P 2・3には柱痕があり、柱痕の周囲がL VI主体の土で埋め戻されている様子を伺うことができる。なお、軸線延長上北方約2.5mの地点には、平面形・規模をほぼ同一にする小穴2個が2.1mの間隔で並んでおり、本遺構との関連性も考えられる。

本遺構の帰属時期は、他の遺構との重複や出土遺物が全くなかったため判然としないが、平安時代以降と推測される。

(吉田)

第5節 土 坑

今回の調査では土坑が8基検出された。その内、5基は調査区北部から近接して検出され、調査区中央部及び調査区南部では1~2基が散在的に検出された。

1号土坑 SK 01 (図16, 写真1-12)

本遺構は、調査区南西部の緩斜面に存在し、J 3グリッドに位置する。検出面はL VI上面で、検出時ははっきりとした黒色梢円形のプランであった。本遺構の周辺に他の遺構はない。

遺構内堆積土は黒色土の単層である。西側の土層中に大きさ20cm程度の石が含まれていた。

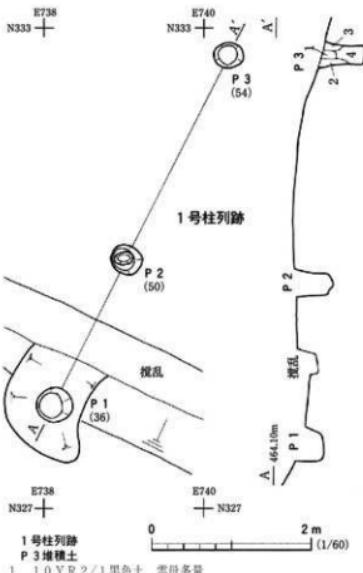


図15 1号柱列跡

- 1号柱列跡
P 3堆積土
- 1 10 YR 2/1 黒色土 霧母多量
 - 2 10 YR 4/6 黒色土 霧母多量、黒色土塊少量、粘性あり
 - 3 10 YR 4/4 黒色土 霧母多量、黒色土塊多量、粘性あり
 - 4 10 YR 1.7/1 黒色土 霧母少量、粘性強

平面形は楕円形を呈し、長軸方位はN 60° Wである。これは斜面の傾斜方向とほぼ同一方向を指している。規模は長軸9.6 cm、短軸5.6 cm、深さ2.5 cmを測る。底面は中央部にやや平坦な面があるが、その周囲では傾斜面やくぼみが見られる。周壁は全体的に急角度で立ち上がっており、北西面ではほぼ垂直である。

本遺構からの出土遺物は認められず、遺構内堆積土も単一層で特筆するべき特徴も見当たらなかった。このため、本遺構の機能時期や性格は不明である。
(吉田)

2号土坑 SK02 (図16、写真1-12)

本遺構は、調査区北東部の平坦面に存在し、E 7 グリッドに位置する。L II b と想定される一面の黒色土に、ほんやり楕円形に浮かぶ黒褐色土のプランとして検出された。本遺構の東にはSK 03、北東にSK 05、南西にSA 01があり、それぞれ10 m以内の範囲に接続している。

遺構内堆積土は黒褐色土の単層である。土色及び炭化物粒・黒色土粒の含有状況から、基本土層のL I e・fに相当するものと思われる。本遺構の南側は遺構を半蔵する際に若干掘り過ぎてしまった。平面形は楕円形を呈し、長軸方位はN 75° Wである。規模は、長軸1.18 m、短軸8.0 cm、深さ2.8 cmを測る。底面はしまりがなく、平坦である。周壁は緩やかに立ち上がり、次第に急角度で開口部へ至っている。

本遺構からの出土遺物は認められず、特筆するべき特徴も見当たらなかった。このため、本遺構の機能時期や性格は不明である。
(吉田)

3号土坑 SK03 (図16、写真1-13)

本遺構は、調査区北東部のE 8 グリッドに位置する。周辺は平坦面から谷部に下降する緩斜面である。検出面はL VI上面で、円形に近い黒色土のプランとして検出された。本遺構の周囲には、北方3 mにSK 05、西方5 mにSK 02、東方にSB 01・02及びSK 06・08が存在している。

遺構内堆積土は5層に分層した。すべて黒色土である。下層に向かうにつれて、暗く青みを増す傾向にある。ℓ 2・3は同系色で、上層のℓ 2には灰黄褐色粘土が帶状に多量混入している。これは、ℓ 4・5についても同様の傾向が認められた。ℓ 2～5は粘性を持つ。特に、ℓ 5はきめの細かい堅く締まった状態で、粘性も強く、水分を多量に含み、下部はグライ化していた。なお、ℓ 1中には厚さ5 cm程の板状の石があり、ℓ 5には篠竹を主体とする腐敗していない植物の小片が含まれていた。平面形は隅丸方形に近い形を呈し、中位では楕円形を呈する。長軸方位はN 25° Eである。規模は長軸1.44 m、短軸1.2 m、深さ7.0 cmを測り、中位の楕円形を呈する部分では長軸1.06 m、短軸9.2 cmを測る。底面付近はグライ化しており、底面周囲の層から常に湧水が見られる。周壁は底面付近においては45°近くで立ち上がり、急斜面になっているが、上部は緩やかな傾斜を示すという2段構造を呈する。

本遺構からの出土遺物は認められなかったが、周囲の暗渠排水溝には篠竹が埋設されており、暗渠

排水溝内からはℓ 5内のものとはほぼ同じ残滓物も認められた。このことから、本遺構の最終的な機能時期はかなり新しく、暗渠排水溝と同じ時期のごみ捨て穴の可能性も考えられる。 (吉 III)

4号土坑 SK04 (図16, 写真1-13)

本遺構は、調査区南部のI 5グリッドに所在する。地形は遺跡の所在する谷戸の沢筋と、調査区中央に北西から入り込む小支谷の合流地点の西側に形成された緩斜面に位置する。近隣の遺構は西3mにS B 0 3が所在する。基本土層観察用ベルト（図4のB-B'）の北壁に本遺構の壁の立ち上がりが認められ、その手前に黒色の落ち込みを検出した。よって、ベルトによって残された南半では検出面は掘込面であるL II bで、北半はそこから段を以て落ちてL VIが検出面となっている。西壁がI 5-P 7と重複し、堆積状況の観察により本遺構の方が古いと判断した。

遺構の北半の上端が残存しないため、平面形は不明だが、円形を基調とするものと推測される。壁はなだらかに立ち上がり、中端に不整な段を有する。底面も不整にくぼみ、擂鉢状の底面を呈する。規模は、残存部の最大値で長径1.32m、短径1.07mを測る。L II b上面からの深さは5.7cmを測る。堆積土は4層に分層される。ℓ 1・4はL II aを基調とする。ℓ 2・3もL II aを基調とするが、黒味が強くL II bの混入が想像され、また、L VIを多量に含むことから、壁の崩落土と捉えている。以上を総合すると、自然堆積によって埋没したと判断される。

本遺構から遺物が出土していないことから、詳細な所属時期は不明だが、L II bを掘込面としていることから、古代に属すると推測される。 (山元)

5号土坑 SK05 (図16, 写真1-14)

本遺構は、調査区北東部のD 8グリッドに位置する。周辺は沢部上方の平坦部から急に落ち込んでいる場所で、本遺構の周辺のみがやや突出している。そのため、本遺構のすぐ西側は斜面上位からの湧水が溜まりやすい状態になっている。検出時は、L IV上面で境界の鮮やかな黒色椭円形のプランであった。本遺構の南方にはSK03、南西にはSK02、東方にはSK06・08、SB01・02が近接して存在する。

遺構内堆積土は7層に分層した。ℓ 1～4は雲母を含む粘性のある黒色土で、漆黒といつてよく、ℓ 1→ℓ 2→ℓ 3・4の順に黒さに微妙な差が認められた。含有する白色砂粒の量によるものと思われる。ℓ 5・6はともに黒褐色のきめの細かい粘土である。ℓ 7は黒色の粘土で非常に堅く締まっており、水分をかなり含有し、下部がグライ化している。平面形は南東方向に若干膨らんだ椭円形を呈する。長軸方位はN 30° Eである。規模は長軸1.54m、短軸90cm、深さ70cmを測る。東側に若干黒色土粒を含む柔らかい部分があり、20cm程掘り過ぎてしまった。底面は中央部に向かって緩やかにくぼんでいる。底面付近はグライ化しており、湧水がある。小さなビットらしきものもあったようだが、正確な確認はできなかった。周壁は底面から急な立ち上がりを見せ、西側で一部緩い部分がある以外はそのまま開口部まで切り立った壁が続いている。

全体的な形状及び壁面の状況・深さは、落し穴状土坑を連想させる。ただし、本遺構からの出土遺物は確認できず、また、時期や用途を特定する要素も見つからなかったため、性格等については不明である。

(吉田)

6号土坑 SK06 (図16, 写真1-14)

本遺構は、調査区北東部のD8グリッド東南隅に位置する。北方には沢部があり、本遺構が立地するのは沢に向かって北東に下る緩斜面である。LVI上面において、東西に長い長方形の黒色土プランとして検出された。SB01・02の範囲内に存在し、周囲には西方にSK05、やや西南にSK03が存在する。また、南北半分を本遺構が掘り込む状態でSK08と重複している。

遺構内堆積土は2層に分層した。いずれも黒色土で、上層の方がやや明るい。平面形は北東部がやや突出した長方形を呈し、長軸方位はN75°Wである。 ℓ 1を取り除くと、西から南にかけてテラス状に平坦部が残る以外は、まるで別遺構のように隅丸長方形の落ち込みが見られる。ちょうど穴を掘って大きめの長方形の板を被せたように見える。規模は長軸1.16m、短軸7.5cm、深さ3.5cmを測り、中段では長軸1m、短軸6.6cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、SK08の堆積土である貼床状の粘土層がみられる。周壁は各方向で状態が異なる。北壁では中位に軽いオーバーハングが認められる。東壁では底面から開口部まで壁がまっすぐ立ち上がっている。南壁及び西壁でも途中までは急な立ち上がりで、途中の平坦部を経て低い壁が開口部に続いている。 ℓ 1より土師器片2点が出土した。

本遺構は、形状及びSB01との位置関係などから、蓋のある貯蔵庫としての用途を想定した。ただし、出土遺物が細片で時期の特定には至らないことから、機能時期についてはSK08と同時期もしくは新しい時期であるとしか言及し得ず、さらに、SB01と同時期であるという確証も得られてはいない。

(吉田)

7号土坑 SK07 (図17, 写真1-15)

本遺構は、調査区中央部のF6グリッドに位置し、南東方向に下降する緩斜面に立地している。すぐ北東には後世の耕作造成時における段差があり、北西約2mにはSA01が存在する。LVI上面において検出した。

平面形は北西-南東主軸の不整長方形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸5.6~7.4cm、深さ2~1.4cmを測る。周壁及び底面はLVIである。周壁は緩やかに立ち上がり、西側で高く、東方に行くにつれて低くなっている。底面は平坦であるが、緩く東方に下降している。遺構内堆積土はLIIaに相当する黒色土の1層のみで、自然堆積土と考えられる。

本遺構からは遺構の時期や性格を知ることのできる資料が出土していないが、遺構内堆積土が調査区内より検出された堅穴住居跡や掘立柱建物跡の遺構内堆積土と近似することから、それらの遺構と同じ時期に帰属するものと推測される。

(能登谷)

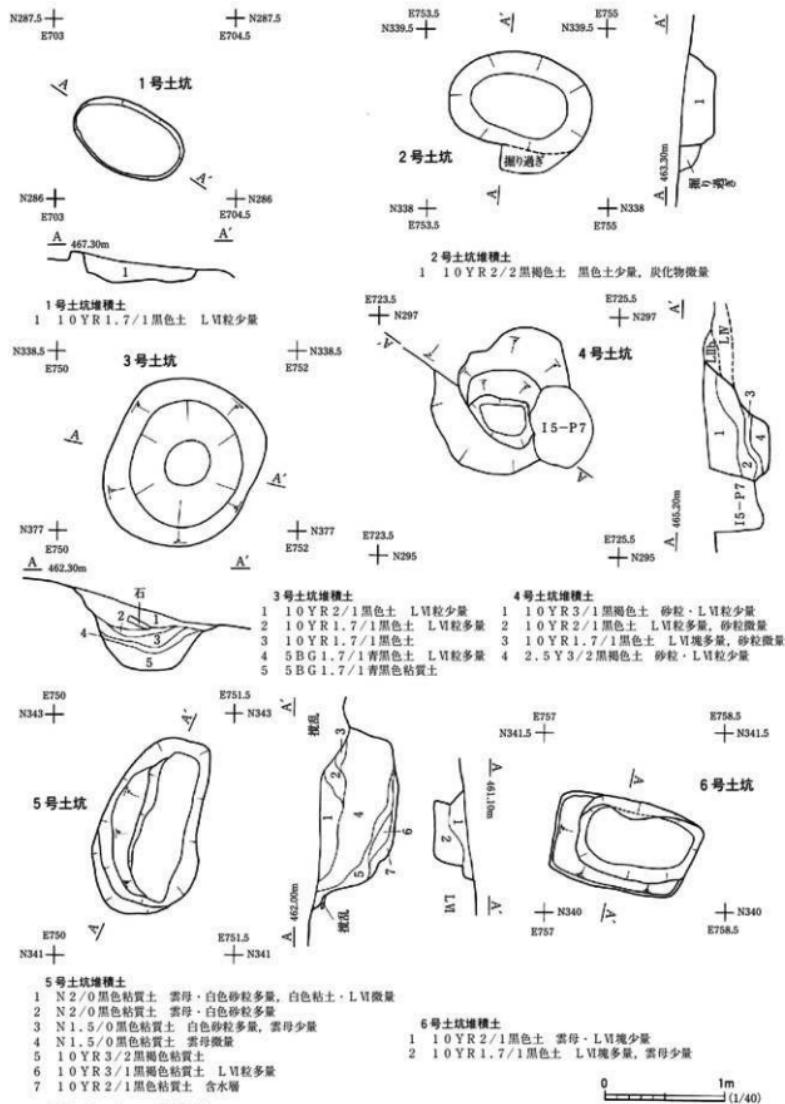


図16 1~6号土坑

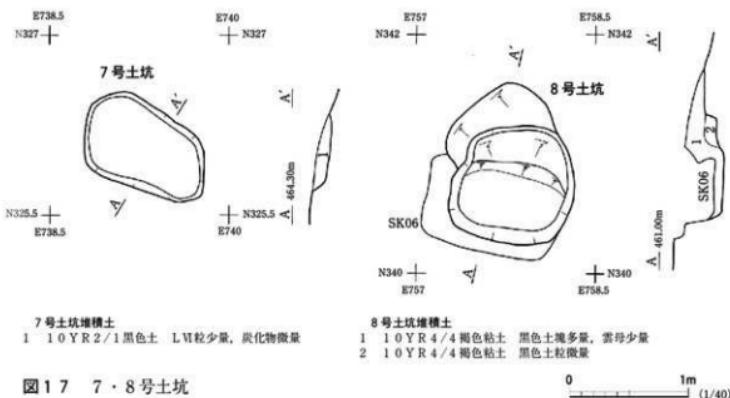


図17 7・8号土坑

8号土坑 SK08 (図17, 写真1-15)

本遺構は、調査区北東部の南向き緩斜面に存在し、D8グリッド東南隅に位置する。SK06の精査中に、堅く締まった貼床状の褐色粘土の広がりを検出した。SB01・02の遺構範囲内に存在し、西方にSK05、やや西南にSK03が存在する。本遺構の南半分はSK06に掘り込まれている。

遺構内堆積土は2層に分層し、黒色土塊を多量に含む締まりのある褐色粘土を ℓ 1、その下位の黒色土の少ない粘土を ℓ 2とした。 ℓ 1には黒色土が層状に広がる部分が見られる。本遺構は、南部が中央に段差のある隅丸方形に近い掘り込みで、その北西部に梢円形状の緩斜面が斜めに広がるという構成である。軸線方位をN20°Wと考えると、長軸1.3m、短軸9.0cm、深さ3.2cmを測る。隅丸方形の掘り込み部は長軸・短軸ともに1mを測る。底面には目立つ凹凸は見当たらない。周壁は南半分では壁面をSK06と共有するが、北方では掘り込みの段を越えてからは、遺構としての立ち上がりを示す壁面は確認できず、緩斜面が周囲の地形と一体化している。

本遺構からの出土遺物は確認できず、SB06及びSB01・02との関係については不明である。ただし、SK06をSB01に付帯する貯蔵庫として想定するならば、本遺構はその際の補強または補修の跡と考えられないこともない。本遺構の機能時期は、SK06と同時期、もしくは古い時期とのみ言及しておく。

(吉田)

第6節 溝 跡

今回の調査では、調査区中央部から溝跡が3条検出された。その内、1・2号溝跡は1号住居跡に伴う溝跡であり、3号溝跡は1号住居跡よりも新しい溝跡である。

1号溝跡 SD 01 (図18, 写真1-16)

本遺構は、調査区中央部のG 5グリッドに位置する溝跡である。検出面はL II b上面である。本遺構は、1号住居跡の西側から南側にかけて弧を描くように確認された。遺構北端は、L VI上面が確認されるほど削平を受けているため、遺構の一部が失われている可能性が高い。

遺構内堆積土は単層で、堆積状況から自然堆積と判断した。規模は、全長約5m、幅3.0~4.4cmを測り、検出面からの深さは最大1.8cmである。周壁は南北両端の壁が確認されず、それ以外は急な角度で立ち上がる。底面には溝を掘った際の工具痕と思われる小さなくぼみが多く観察された。底面は北から南へ下降し、北端底面に比べ南端底面の方が3.0cm低く、雨水等は斜面下位にあたる南側に向かって流れているものと考えられる。遺物は土師器片が2点出土しているが、細片のため図示しなかった。

本遺構は、その位置や堆積土の特徴から、1号住居跡に伴う外周溝と考えられる。このため、1号住居跡内への水の進入を防ぐ作りとなっている。遺構の年代は、1号住居跡と同じ9世紀前半と考えている。

(国井)

2号溝跡 SD 02 (図18, 写真1-16)

本遺構は、調査区中央部のG・H 6グリッドに位置する溝跡である。本遺構は1号住居跡の南西側の緩斜面で確認された。遺構検出面はL II b上面である。遺構の東側は掘り過ぎにより失われているが、北側では9個の小穴が本遺構に沿うように確認されている。

遺構内堆積土は単層で、異なる土を多量に含む堆積状況から人為堆積と判断した。本遺構は、直線的に延びており、その軸線方向は真北から60°西側に傾いている。これは等高線に直交する。規模は、全長約4.85m、幅2.5~3.8cmを測り、検出面からの深さは最大4.0cmである。周壁は北西側が緩やかに立ち上がり、それ以外は急な角度で立ち上がる。底面には1号溝跡と同様に、溝を掘った際の工具痕が小さなくぼみとして確認された。底面は北西から南東へ下降し、北西端に比べ南東端の方が約5.0cm低い。遺物は土師器片2点が出土しているが、細片のため図示しなかった。

本遺構は、1号溝跡と同様な工具痕が底面に観察される溝跡である。また、本遺構の軸線方向は1号住居跡南壁際の壁溝の軸線方向とも一致する。本遺構の性格は不明であるが、底面の工具痕や軸線方向から、1号住居跡に関連する溝跡と考えられる。このことから、遺構の年代を1号住居跡と同じ9世紀前半と考えている。

(国井)

3号溝跡 SD 03 (図18)

本遺構は、調査区中央部のG 5・6グリッドに位置する溝跡で、緩斜面で確認された。遺構検出面はL II b上面である。1号住居跡、G 5-P 4・6~8と重複し、1号住居跡よりも新しいが、G 5-P 4との関係は不明である。また、G 5-P 6~8は同様な堆積土で本遺構に並行すること

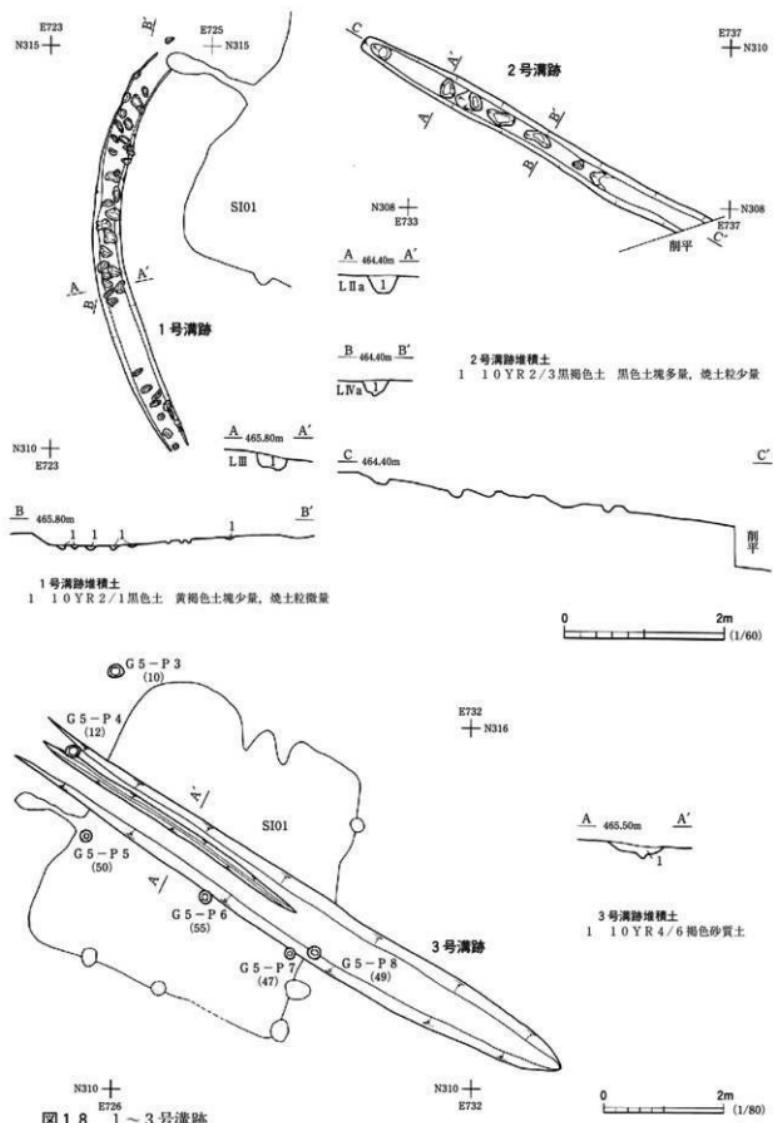


図18 1~3号溝跡

から、同時期のものと判断した。本遺構の北西側は削平により失われ、南東側は掘り過ぎにより失われている。

遺構内堆積土は単層で、基本土層のL I bに相当する土の自然堆積と判断した。本遺構の軸線方向は真北から58°西側に傾き、等高線に直交している。規模は全長約5.2m、幅45cm前後を測る。検出面からの深さは最大20cmである。周壁は北西側と南東側の両端では確認されていないが、それ以外は緩やかに立ち上がる。底面はL II bで、平坦であり、底面の北西側には全長2.55m、幅10cmを測る細い溝状のくぼみが見られる。底面は北西から南東へ下降し、北西端に比べ南東端の方が約1.5m低い。遺物は土器片が1点出土しているが、細片のため図示しなかった。

本遺構は、他の溝跡に比べてやや幅広の溝跡である。本遺構の性格は、底面の状況から遺跡と考えている。

遺構の年代は、遺構内堆積土が基本土層のL I bであることから、近世であろうか。（国井）

第7節 小 穴（図19～21、写真1-11）

今回の調査では、堅穴住居跡・掘立柱建物跡以外に138個の小穴を検出している。これらは、本来、堅穴住居跡・掘立柱建物跡の一部を構成した可能性を有するが、それらに帰属させ得なかつるものである。このような小穴には、グリッドごとに番号を付して呼称するようにした。これらの小穴は記述の都合上、個別の形態・計測値及び調査所見については表1・2の小穴一覧において記述し、ここで分布状況などについて調査区北部から順に概述する。

図29に示した調査区北部のC～Eグリッド列には、平面形が一辺20～30cmの方形を呈し、深さが40cmに満たず、堆積土が単層の小穴がまばらに分布する。縫まりのない堆積土の状況から見て、これらはおそらく近世以降の木杭痕かと思われる。ただ、同図①に示したC8-P3・4に関しては、柱痕が存在し、深さも70cm以上を測ることから、北西方向の調査区外に伸びて建物跡を構成する可能性がある。また、同図③のS B 01・02付近の小穴に関しては、前述した方形の小穴を除けば両建物跡に関連をもつものである可能性もある。

図20に示した調査区中央部のF・Gグリッド列には浅い小穴が散在する。これらは散在しながらもF5-P1, F6-P2・5のように等高線に沿って並ぶような状況が認められる。その柱筋の方向はSA01に近く、これらには同様の機能があったものと推測される。また、H6グリッドのSD02に沿って並ぶ一群は、堆積土がSD03に近似しており、これに付帯するものと思われる。

図21-⑥に示した調査区南部H-I 4～5グリッドの小穴は、規模が大きいものが多く、柱痕を有するものも散見される。SB03の北辺の延長線上に列状に集中し、さらに、SB03の桁方向に平行するように列をなすような状況も見られることから、同様の建物跡を構成していた可能性が高く、所属時期もSB03に近いものと思われる。また、同図⑦・⑧に図示した小穴に関しては、方形を呈し、調査区北部同様、近世以降の木杭痕かと思われる。

第1編 鹿島道路

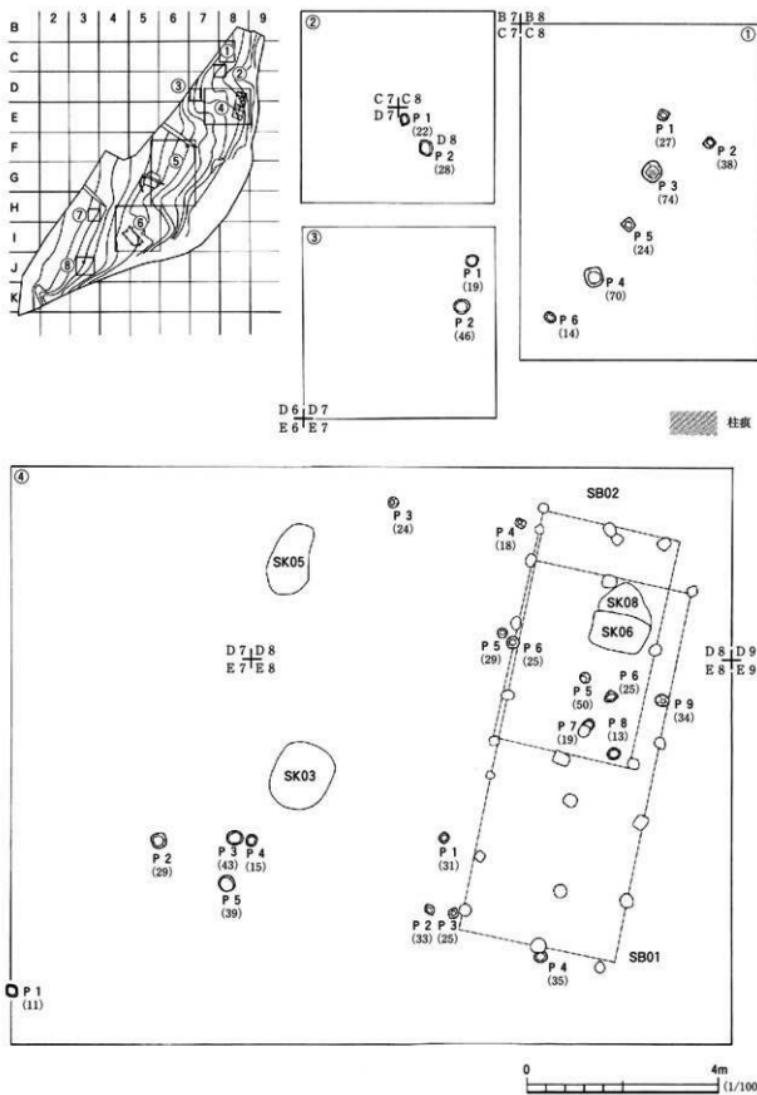


図19 小穴(1)

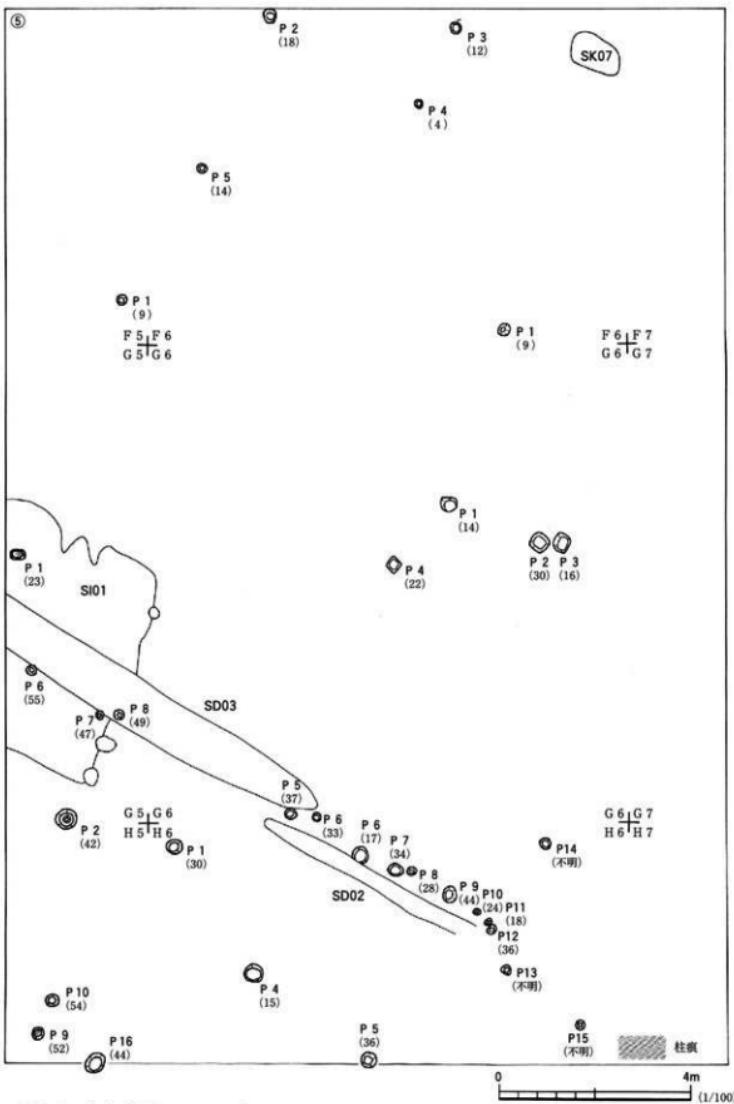


図20 小穴(2)

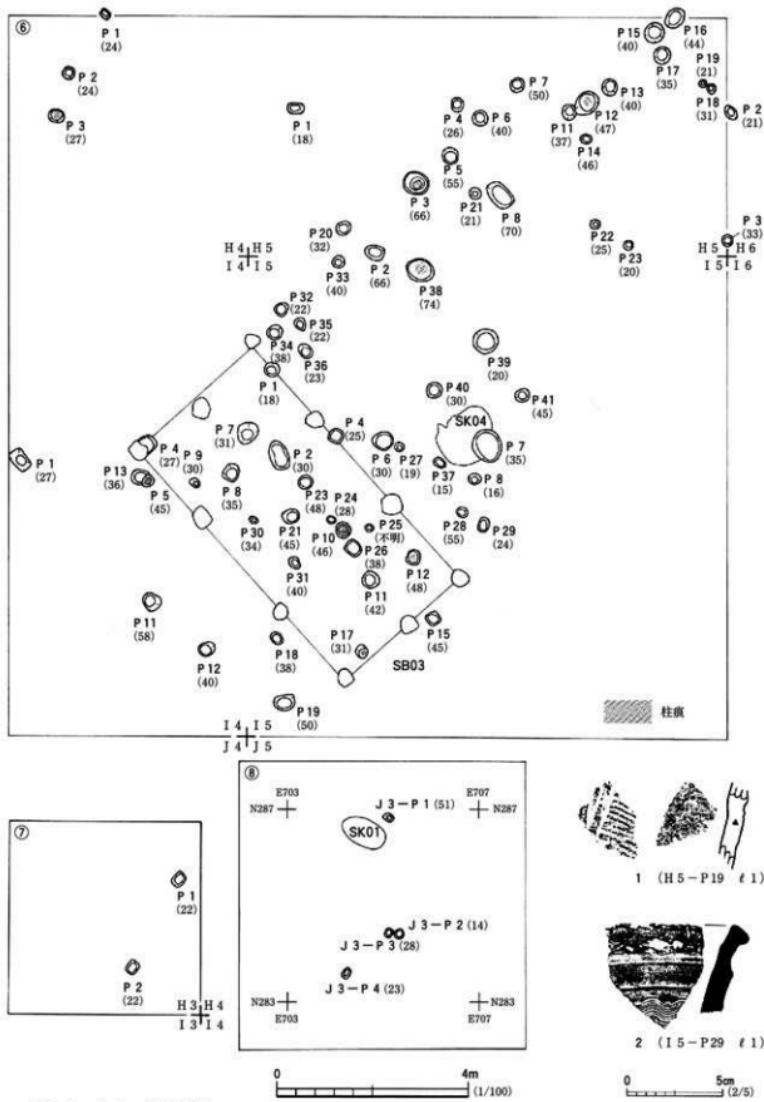


図2-1 小穴、出土遺物

表1 小穴一覧(1)

グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備考	グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備考	
C 8	P 1	方 形	22	22	27	1	無		H 5	P12	楕円形	58	46	47	2	有	< P 1 1	
	P 2	方 形	22	22	38	1	無			P13	楕円形	34	32	40	1	無		
	P 3	圓丸方形	42	40	74	6	有			P14	楕円形	24	20	46	1	無		
	P 4	円 形	40	38	70	4	無			P15	円 形	42	42	40	1	無		
	P 5	方 形	24	24	24	1	無			P16	楕円形	46	36	44	1	無		
	P 6	楕円形	22	18	14	1	無			P17	楕円形	38	36	35	1	無		
D 7	P 1	円 形	24	24	19	1	無		P18	円 形	20	20	31	1	無			
	P 2	楕円形	34	30	46	1	無			P19	楕円形	18	16	21	1	無		
	P 3	不定形	30	28	28	1	無			P20	円 形	30	30	32	1	無		
	P 4	楕円形	22	20	24	1	無			P21	円 形	26	26	21	1	無		
	P 5	長方形	22	18	18	1	無			P22	円 形	20	20	25	1	無		
	P 6	楕円形	22	20	29	1	無			P23	楕円形	22	20	20	1	無		
E 7	P 1	方 形	24	24	11	1	無		H 6	P 1	円 形	34	34	30	1	無		
	P 2	圓丸方形	32	32	29	1	無			P 2	楕円形	34	24	21	1	無		
	P 3	楕円形	34	30	43	1	無			P 3	楕円形	26	22	33	1	無		
	P 4	楕円形	24	22	15	1	無			P 4	楕円形	38	34	15	1	無		
	P 5	楕円形	36	32	39	2	無			P 5	円 形	32	32	36	1	無		
	P 6	円 形	26	25	1	無				P 6	円 形	34	34	17	1	無		
E 8	P 1	方 形	20	20	31	1	無		>SD02	P 7	楕円形	34	26	34	1	無		
	P 2	方 形	20	20	33	1	無			P 8	楕円形	18	16	28	1	無		
	P 3	方 形	20	20	25	1	無			P 9	楕円形	34	28	44	1	無		
	P 4	楕円形	28	22	35	2	有			P10	楕円形	16	12	24	1	無		
	P 5	円 形	22	22	50	2	無			P11	楕円形	18	12	18	1	無		
	P 6	不定形	28	24	25	1	無			P12	楕円形	22	16	36	1	無		
F 7	P 7	楕円形	28	20	19	1	無		<SB01P13	P13	円 形	20	20	-	1	無		
	P 8	楕円形	26	22	13	1	無			P14	楕円形	24	22	-	1	無		
	P 9	楕円形	30	26	34	1	無			P15	円 形	20	20	-	1	無		
	F 5	円 形	22	22	9	1	無			I 4	P 1	長方形	38	30	27	1	無	
	F 6	P 1	楕円形	28	24	9	1	無		P 2	長方形	-	-	-	-	欠番		
	P 2	不定形	28	26	18	1	無		P 3	長方形	38	30	35	1	無	<SB03P 1		
G 5	P 3	方 形	24	24	12	1	無		P 4	長方形	-	34	27	1	無	<SB03P 1		
	P 4	円 形	18	18	4	1	無		P 5	楕円形	28	22	45	3	無	>P13		
	P 5	円 形	20	20	14	1	無		P 6	楕円形	46	38	34	1	無	SB03P 2		
	P 7	不定形	50	48	25	1	無		P 7	不定形	50	42	31	2	無			
	P 8	楕円形	26	22	13	1	無		P 8	長方形	36	32	35	2	無			
	P 9	楕円形	30	26	34	1	無		P 9	楕円形	24	18	30	2	無			
G 6	P 1	圓丸方形	32	22	23	1	有		>SI01	P10	長方形	42	36	56	3	無		
	P 2	楕円形	46	42	12	1	無			P11	不定形	40	36	58	2	無		
	P 3	楕円形	28	22	10	1	無			P12	楕円形	34	30	40	1	無		
	P 4	長方形	24	18	12	1	無			P13	楕円形	40	34	36	1	無		
	P 5	円 形	20	20	50	1	無			P14	圓丸方形	28	28	45	1	無		
	P 6	圓丸方形	22	22	55	1	無			P15	圓丸方形	28	28	45	1	無	<P 5	
G 7	P 7	円 形	18	18	47	1	無		<SI01	P1	円 形	30	30	18	1	無		
	P 8	円 形	22	22	49	1	無			P 2	楕円形	62	40	30	1	無		
	P 9	圓丸方形	32	32	14	1	無			P 3	不定形	38	34	47	1	無		
	P 10	圓丸方形	38	38	30	2	無			P 4	圓丸方形	32	30	25	3	無		
	P 11	長方形	40	30	16	2	無			P 5	-	-	-	-	欠番			
	P 12	圓丸方形	30	30	22	2	無			P 6	楕円形	42	38	30	3	無		
H 4	P 13	長方形	22	16	24	1	無		>SK04	P 7	楕円形	70	60	35	1	無		
	P 14	円 形	24	24	24	1	無			P 8	円 形	24	24	16	1	無		
	P 15	圓丸方形	34	28	27	2	有			P 9	圓丸方形	44	44	55	4	無		
	P 16	長方形	30	24	22	5	有			P10	円 形	32	32	46	2	有		
	P 17	圓丸方形	26	22	42	2	有			P11	楕円形	36	34	42	2	有		
	P 18	長方形	32	22	48	3	有			P12	長方形	32	28	48	3	有		
H 5	P 19	圓丸方形	30	30	40	1	無		SB03P 6	P13	楕円形	38	34	46	2	有		
	P 20	圓丸方形	42	32	66	2	有			P14	不定形	40	36	50	1	有		
	P 21	圓丸方形	30	28	26	1	無			P15	圓丸方形	28	28	45	1	無		
	P 22	圓丸方形	36	34	55	1	無			P16	圓丸方形	36	32	46	3	無		
	P 23	圓丸方形	30	30	40	1	無			P17	圓丸方形	24	24	31	3	無		
	P 24	圓丸方形	60	42	70	3	無			P18	圓丸方形	26	22	38	1	無		
H 6	P 25	圓丸方形	28	28	54	1	無		SB03P 7	P19	圓丸方形	46	34	50	1	無		
	P 26	圓丸方形	32	30	37	1	無			P20	圓丸方形	36	30	54	2	無		
	P 27	圓丸方形	24	24	52	2	有			P21	圓丸方形	36	30	45	1	無		
	P 28	圓丸方形	28	28	54	1	無			P22	圓丸方形	34	28	30	1	無		
	P 29	圓丸方形	32	30	37	1	無			P23	圓丸方形	30	28	48	1	無		
	P 30	圓丸方形	24	24	52	2	有			P24	圓丸方形	18	18	28	1	無		
H 7	P 31	圓丸方形	32	32	28	1	無		>P12	P25	圓丸方形	18	18	-	1	無		
	P 32	圓丸方形	30	24	22	5	有			I 5	P 1	円 形	30	30	18	1	無	
	P 33	圓丸方形	26	22	42	4	有			P 2	楕円形	62	40	30	1	無		
	H 3	圓丸方形	30	24	22	5	有			P 3	不定形	38	34	47	1	無		
	P 34	圓丸方形	26	22	42	4	有			P 4	圓丸方形	32	30	25	3	無		
	H 4	圓丸方形	22	16	24	1	無			P 5	-	-	-	-	欠番			
H 5	P 35	圓丸方形	24	24	24	1	無		>SK04	P 6	楕円形	42	38	30	3	無		
	P 36	圓丸方形	30	28	26	1	無			P 7	楕円形	70	60	35	1	無		
	P 37	圓丸方形	28	24	37	1	無			P 8	円 形	24	24	16	1	無		
	P 38	圓丸方形	18	18	33	1	無			P 9	圓丸方形	44	44	55	4	無		
	P 39	圓丸方形	34	30	37	2	有			P10	円 形	32	32	46	2	有		
	P 40	圓丸方形	30	28	37	2	有			P11	楕円形	36	34	42	2	有		
H 6	P 41	圓丸方形	30	24	24	1	無		SB03P 7	P12	長方形	32	28	48	3	有		
	P 42	圓丸方形	24	24	24	1	無			P13	楕円形	38	34	46	2	有		
	P 43	圓丸方形	30	28	26	1	無			P14	不定形	40	36	50	1	無		
	P 44	圓丸方形	28	24	34	1	無			P15	圓丸方形	28	28	45	1	無		
	P 45	圓丸方形	30	28	34	1	無			P16	圓丸方形	36	32	46	3	無		
	P 46	圓丸方形	24	24	52	2	有			P17	圓丸方形	24	24	31	3	無		
H 7	P 47	圓丸方形	28	28	54	1	無		SB03P 8	P18	圓丸方形	26	22	38	1	無		
	P 48	圓丸方形	32	30	37	1	無			P19	圓丸方形	46	34	50	1	無		
	P 49	圓丸方形	24	24	52	2	有			P20	圓丸方形	36	30	54	2	無		
	P 50	圓丸方形	32	30	37	1	無			P21	圓丸方形	36	30	45	1	無		
	P 51	圓丸方形	60	42	70	3	無			P22	圓丸方形	34	28	30	1	無		
	P 52	圓丸方形	28	28	54	1	無			P23	圓丸方形	30	28	48	1	無		
H 8	P 53	圓丸方形	32	30	37	1	無		SB03P 9	P24	圓丸方形	18	18	28	1	無		
	P 54	圓丸方形	24	24	52	2	有			P25	圓丸方形	18	18					

表2 小穴一覧(2)

グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備考	グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備考
I 5	P26	長方形	34	30	38	2	無		I 5	F36	精円形	32	26	23	1	無	
	P27	精円形	20	18	19	1	無			P37	精円形	26	20	15	1	無	
	P28	円 形	22	22	55	1	無			P38	精円形	60	48	74	2	有	
	P29	精円形	30	22	24	1	無			P39	円 形	52	50	20	1	無	
	P30	精円形	20	16	34	1	無			P40	円 形	34	34	30	1	無	
	P31	精円形	26	20	40	1	無			P41	精円形	32	28	45	1	無	
	P32	精円形	30	24	22	2	無		J 3	P 1	長方形	22	18	51	4	有	
	P33	円 形	24	24	40	2	無			P 2	精円形	22	20	14	1	無	
	P34	精円形	34	30	38	1	無			P 3	精円形	18	16	28	1	無	
	P35	不定形	28	22	22	1	無			P 4	長方形	22	16	23	1	無	

凡例

長軸・短軸・深さ…単位はcm。遺構の重複・混乱等により計測が不可能な部分については記載しなかった。

備考…重複遺構の新旧関係等について記した。>は小穴よりも重複する遺構が古く、<は重複する遺構が新しい。

(例) >SI 0 1 …SI 0 1 がその小穴よりも古い時期のものであることを示す。

なお、掘立柱建物跡の柱穴と認められたものは、その番号を記載した。

これら的小穴からは、縄文土器片3点、土師器片18点、須恵器片2点が出土しているが、その内、2点を図示した。いずれも調査区南部の小穴から出土したものである。図21-1はH5-P19出土の縄文土器片である。条痕文を地文とし、平行沈線を垂下させているのが認められ、早期末葉に位置付けられよう。図21-2はI5-P29出土の須恵器壺の口縁部破片である。口唇部直下が抉れ、その下部に櫛描波状文が施される。

(山元)

第8節 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文土器片377点、須恵器片29点、土師器片1,050点、陶磁器片11点、土製品1点、石器類・剥片73点、石製品1点、銅製品1点、鉄滓280gが出土した。

出土した縄文土器片及び土師器・須恵器片の分布状況を見てみると、縄文土器片は調査区南部のH4・5、I3~5、J3グリッドから全体の90%が出土し、土師器・須恵器片は調査区中央部から南部にかけてのG6・7、H5~7、I4・5グリッドから全体の92%が出土している。出土層位は、縄文土器片がLIIIから主体的に出土し、土師器・須恵器片はLIIaから主体的に出土している。以下、遺構外出土遺物の内、特徴的なものを取り上げることにする。

縄文土器(図22・23、写真1-16~19)

図22-1~11・14~18は縄文時代早期中~後葉の深鉢形土器の破片である。1の外面上半には細沈線による間隔の不規則な平行沈線文が見られ、2の外面には細沈線により横方向の直線文と連弧文が描かれている。3の外面には平行する微隆起線文が見られ、内面には不明瞭ながら、条痕文が認められる。4~10は同一個体で、外面上に条痕文が認められ、11は外面上に条痕文、内面に擦痕が認められる。14~17は外面上に条痕文が認められ、18では外面上の地文は不明であるが、内面上に条痕文が認められる。なお、1は胎土に植物纖維を少量含み、2~11は薄手で胎土に植物纖維を含まず、14~18は胎土に植物纖維を多く含み、厚手のものが多い。

図22-12・13・19~26は縄文時代早期末葉~前期初頭の深鉢形土器の破片である。厚手のものが

多く、胎土に植物繊維を多く含んでいる。1・2は口縁部資料で、外面には条が斜行する撚糸文が施され、口縁部内面にも条が横走する撚糸文が施されている。また、1・3の外面にも撚糸文が認められる。1・9・2・0は波状口縁で、口縁部外面には繩圧痕文が施され、繩圧痕文は波頂部下では渦巻状となっている。2・1は口縁部付近の資料と推測され、地文は不明であるが、外面上部には2条の繩圧痕が認められる。2・2～2・4の外面には非結束の羽状繩文が施され、2・5・2・6の外面には斜繩文が施されている。2・6では綾繩文も認められる。2・3・2・4は内湾する器形で、2・3の口唇部は面取りされている。なお、2・3の口唇に沿って剥落部が認められるが、本来は隆帯が巡っていたものと推測される。

図2・3～1～1・9は繩文時代前期後半の深鉢形土器の破片及び個体土器である。1～3は同一個体で、平口縁の口唇に2個一对の三角形の突起が付く。外面には2単位の結節部を持つ原体を横方向及び縱方向に回転施文している。4は波状口縁で、端部は肥厚し、外面下部には繩文が施文されている。胎土には雲母を含んでいる。5～9の外面には繩文が施文されているが、5・6・8・9では綾繩文が認められ、8・9は底部付近の資料で、下半は無文となっている。10～1・8は同一個体で、口縁部が外反するのに対して、体部上半は内湾し、体部中央に緩い括れを持ち、体部下半は直線的に外傾する器形と推測される。口縁部は肥厚し、外面には、口縁部直下に半截竹管の凹部による2条の押引文が巡り、体部上半にも同じ押引文による斜行する文様が描かれている。また、口縁部を除いて繩文が施文され、体部上半の押引文は繩文施文後に描かれている。1・9は底部を欠失しているものの、本遺跡で唯一全体の器形を知ることができる繩文土器である。H4グリッドのLIIIよりまとまって出土した（写真1～1・6）。体部上半が内湾気味に立ち上がり、体部下半で括れる器形である。平口縁の口唇には2個一对の三角形の突起が5単位付く。外面には全面に斜繩文が施され、綾繩文も4段認められる。また、体部上半には径7mmの2個一对の補修孔が開けられている。

須恵器・土師器（図2・3・2・4、写真1～1・7）

図2・3～2・0は須恵器杯で、体部は上げ底氣味の底部から直線的に立ち上がっている。外面の体部下半は手持ちヘラケズリ調整され、底面の切り離しは回転ナデにより不明である。図2・4～8は須恵器壺の体部破片で、外面にタタキメ、内面に当具痕が確認できる。なお、整形後、外面は横方向のナデ、内面は縦方向のナデによって再調整されている。図2・3～2・1～2・3は土師器杯の底部付近の資料で、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面は、2・1では体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリされ、2・2では回転糸切り後に体部下端から底面周縁にかけて回転ヘラケズリされている。2・3では体部下端が手持ちヘラケズリされ、底面は全面にわたってナデ調整されている。

図2・4～1は非クロクロ整形の土師器鉢の口縁部付近の資料で、口縁部外面はヨコナデ、体部の内外面はヘラナデされている。同図2・3は非クロクロ整形の土師器壺の口縁部付近資料、4は口クロクロ整形の壺の口縁部付近資料である。2・3の端部は薄く仕上げられ、4の端部は断面箱形に作られている。また、2は頸部の屈曲を持たずに外反するのに対して、3・4は頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に外傾している。2・3の調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデである。なお、2の内外面には粘土積み上げ痕が確認でき

る。同図5は非クロクロ整形の土師器壺の底部付近資料で、内外面はヘラナデされている。同図9は手捏土器である。全体の形状は臼形を呈し、厚底の底部から器厚を減じながら口縁部に至っており、内部の形状は円錐形を呈している。

青 磁(図24、写真1-17)

図24-6・7は14世紀前半頃の龍泉窯系の青磁碗片で、外面には搞蓮弁文が描かれている。

土 製 品(図24)

図24-10は中央部に $1 \times 2\text{ mm}$ の楕円形の孔が開けられた偏平な土玉である。孔は焼成前に開けられている。

石器類・石製品(図24・25)

図24-11は块状耳飾りの半欠品で、折損部近くの側面に孔を開けて、垂飾品に転用している。上面は下面に比べて平坦面が狭く作られている。側面の孔は両面からそれぞれ円錐形に開けられており、外面から開けられた孔の径は4mm、内面から開けられた孔の径は3mmであり、両者の接点では径1mmを測る。同図12は有茎平基の石鎌で、両面とも全面に細かい調整が施されている。同図13は無茎凹基の石鎌で、背面には全面に細かい調整が施され、腹面では縁辺のみに細かい調整が施されている。同図14は石錐である。両面とも全面に細かい調整が施され、基部に浅い括れを持つ。断面形は菱形で、先端部の両脇は使用時に刃こぼれを起こしているものと推測される。なお、基部の一部は折損している。同図15は打製石斧である。調整剥離は片面の基部、一方の側辺、刃部のみに見られ、他方の側辺には及んでいない。しかし、調整剥離が見られない方の側辺の下半から刃部にかけての縁辺には敲打痕が認められ、刃部縁辺も刃潰れを起こしている。同図16は磨製石斧である。両面及び一方の側面は摩耗面であるが、他方の側縁には製作時の剥離痕が残存している。基部は切断面となっている。図25-1は石皿で、平滑面と凸凹な面を持つ偏平盤の平滑面を使用しており、摩耗範囲が認められる。また、被熱により部分的に赤褐色を呈している。同図2・4・6は平安時代以降の砥石である。2はにぶい橙色を呈する緻密質の風化粘板岩で、江戸時代に流通した京都産の「鳴滝砥」である。板状で、両面とも摩耗し、側縁の内3方は切断面である。4は楔形を呈し、5面の緩く内湾する摩耗面を持つ。なお、基部は折損している。6は角柱状で、3面の摩耗面を持つ。その内1面は全面が摩耗して緩く内湾し、その裏面の摩耗面には自然面が若干残存している。残る1面は破断面を利用したもので、摩耗範囲は部分的である。同図3は硯の隔壁の破片であるが、両面が剥落していることから、この破片が陸側の資料なのか、海側の資料なのかは不明である。側面は丁寧に磨かれている。同図5は凹み石で、両面にはくぼみが認められる。このくぼみは円錐形のくぼみが主軸線上に並んだものである。同図7は偏平な楕円盤を利用した敲磨器で、両面には摩耗範囲が認められ、両側縁には敲打痕が認められる。

銅 製 品(図25)

図25-8は煙管の吸口である。全体的に断面が六角形を呈しているが、ラウ側の端部は窄まって断面円形、他端は断面が楕円形を呈している。

(能登谷)

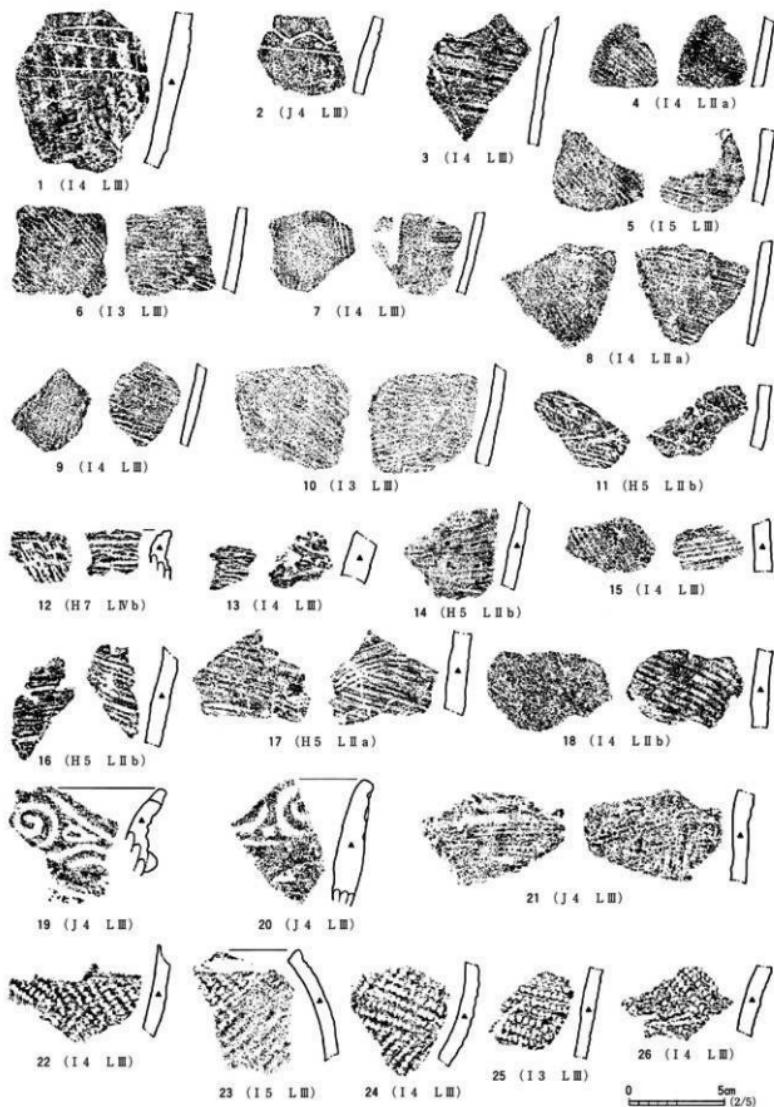


図2-2 遺構外出土遺物（1）

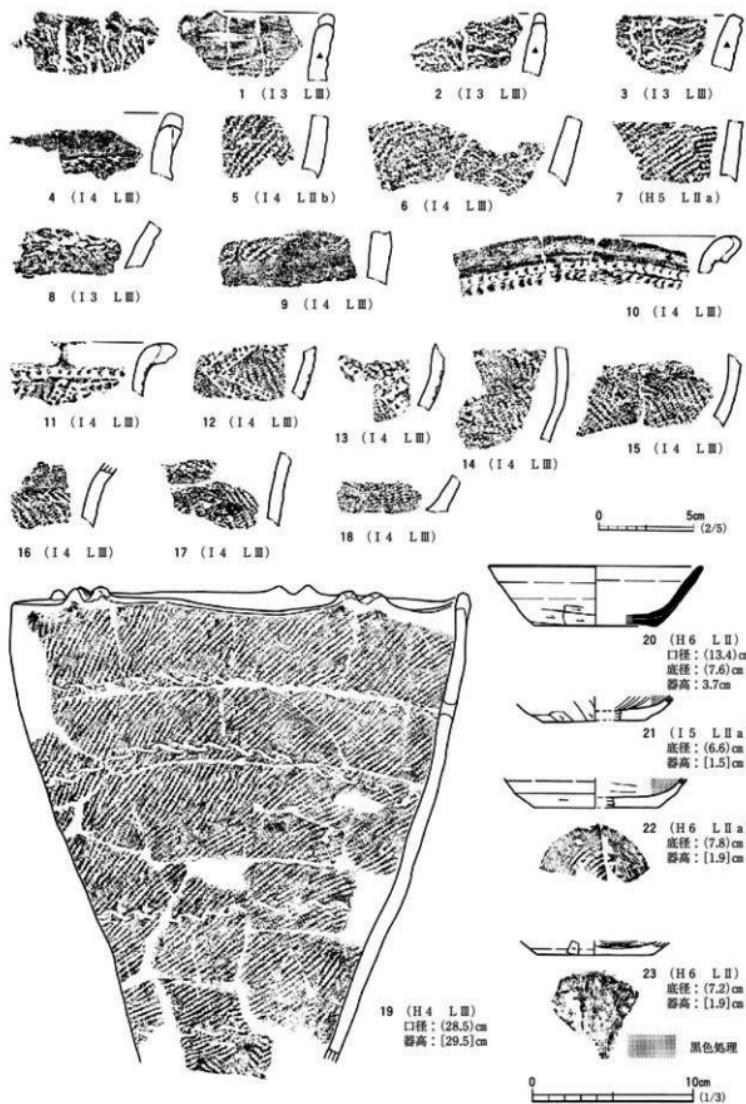


図2-3 遺構外出土遺物(2)

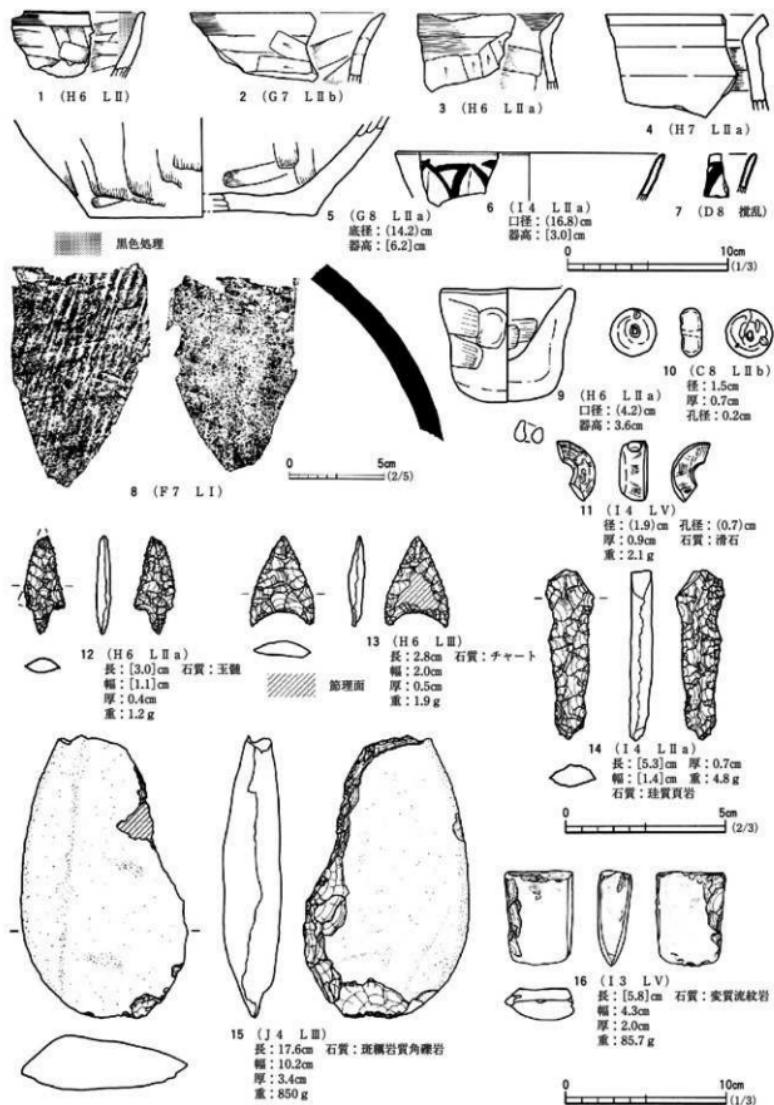


図2-4 遺構外出土遺物（3）

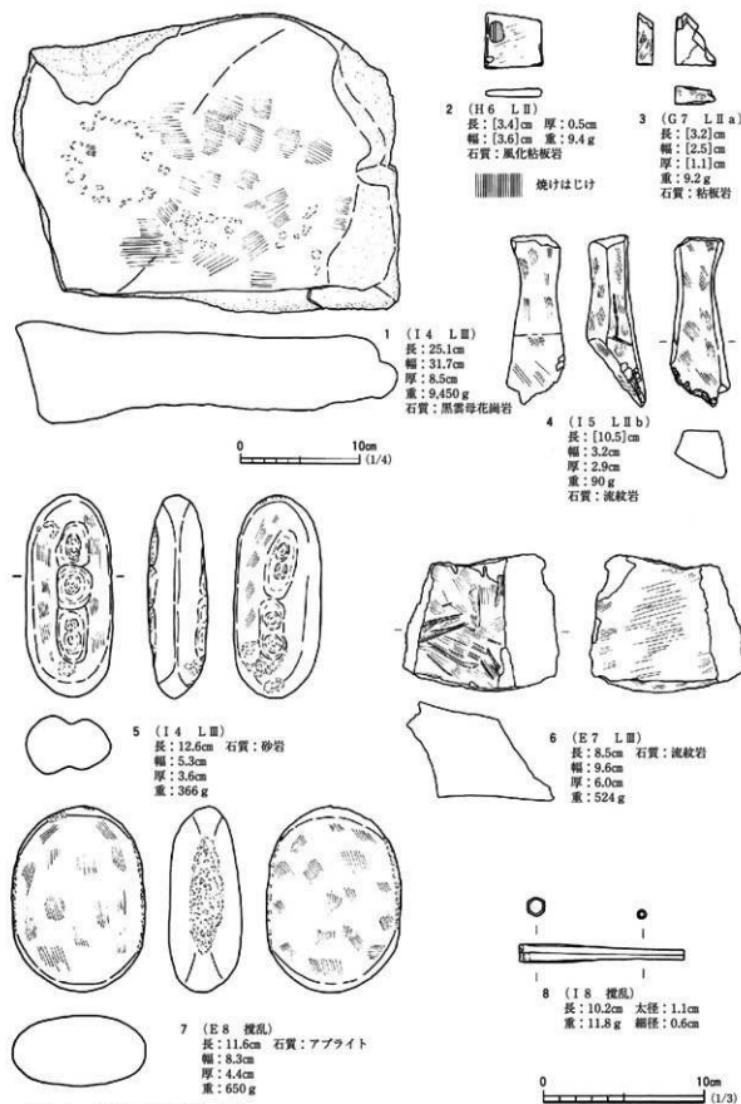


図25 遺構外出土遺物 (4)

第3章 ま　と　め

前章において詳述してきた事実報告をもとに、今回の調査成果についてまとめてみる。

本遺跡の上限は、出土遺物から縄文時代早期中葉に遡るものと推測される。図22-1は田戸下層式土器、同図2は田戸上層式土器に比定されるものと推測される。

時期が下り、縄文時代早期後葉の土器が出土している（図22-3～11・14～18）。前者（3～11）は両面に条痕文が認められ、外面に微隆起線文が見られるのが特徴である。県内では、この種の土器を野島式土器あるいはそれに併行する土器として報告される例が多いが、上記の特徴の他に、器厚が薄い、胎土に纖維を混入しないという特徴を有することから、明らかに野島式土器とは区別するべきであり、関東の野島式土器に併行する榎木1式土器ととらえるのが妥当であろう。後者（14～18）は胎土に纖維を混入し、両面に条痕文を施す厚手の土器で、茅山下層式土器に比定される。

縄文時代早前期末葉～前期初頭の土器はそれまでの時期の土器に比して多く出土している。胎土に纖維を多量含むことを特徴とし、両面に撲糸文を施すものや外面に非結束羽状縄文を施すもの、繩圧痕文の見られるものがあり、広野町上田郷VI遺跡II群土器（本間他1999）に比定される。

その後、縄文時代前期後葉まで、本遺跡では人の生活がなかったのか、遺物等の出土は認められない。縄文時代前期後葉の資料として、図23-1～19が挙げられる。この内、10～18は同一個体で、口縁が肥厚し、金魚鉢に近い器形を成すものと推測され、胴上半部には地文上に菱形モチーフの押引文が展開している。類例は、会津高田町鹿島遺跡III群2類土器（丹野他1991）、磐梯町法正尻遺跡II群1類古段階（松本他1991）にみることができ、それぞれ大木6式古段階に位置付けられている。なお、鹿島遺跡III群2類土器の中には、竹管による連続刺突文を持つ細い粘土紐が斜格子状あるいは三角文を描くものもあり、III群2類土器と同時期とされるIII群5・6類土器の中には本遺跡の図23-1～9・19のような綾縞文の土器、口縁部に5単位の突起を持つ土器を見ることができる。

縄文時代の痕跡として遺構が検出されていないが、当時の生活域を遺跡西方の丘陵上に求めるよりは、今回の調査区内、特に、後世に削平された部分（調査区西側）に求めておくこととする。

平安時代前半になるまで人の痕跡がしばらく途絶えるが、平安時代以降の資料には遺物の他に遺構も認められ、平安時代前半は本遺跡の盛期と捉えられる。SI01・02の他、SB03も当期と推測され、本遺跡出土遺物の大半を当期の土師器が占める。出土土師器の特徴から、SI01・02はほぼ同時期のものと推測されるが、2軒同時に存在していたのか、相前後するのかは不明である。しかし、SI02のカマド煙道部の芯材に使用されていた土師器甕をSI01起源とした場合、SI01はSI02の構築時には既に機能していたことになる。いずれにせよ、本遺跡において当期には住居が1軒ないしは2軒しか存在していないことは明らかであり、これに倉庫と推測されるSB03が伴うという、丘陵裾部の平坦地に営まれた小規模な集落あるいは1軒家という景観が想像される。な

お、遺構内外より出土した遺物は、近隣遺跡の調査成果や先学の研究によると、9世紀前半のもとの推定される。ここで、S101・02について近隣に類例を涉獵してみると、S101・02とも明確な主柱穴は確認されていないが、S101で壁柱穴とした南壁沿いに存在するP3・4は壁から突出した柱穴で、他の壁柱穴よりも規模が大きく、本遺跡の北東約600mに所在する柳作A遺跡1号住居跡や柳作C遺跡2号住居跡（石本他1999）の壁際の主柱穴と類似するのではないかと考えている。また、S102のカマド燃焼部は東壁から張り出すように設けられており、これもまた柳作A遺跡1号住居跡のカマドに類似している。両遺跡は、本来一つの遺跡であった可能性も指摘されており、8世紀中葉～9世紀前葉に小規模な集落を形成していることから、本遺跡を考えるに当たり看過できない遺跡である。両住居跡の年代は、柳作A遺跡1号住居跡が8世紀末葉～9世紀初頭、柳作C遺跡2号住居跡が9世紀前葉に位置付けられており、本遺跡の土器と両住居跡の土器を比較してみると、毫は大差ないものと考えられるが、S102の杯は柳作C遺跡2号住居跡の杯に近いように見て取れる。本遺跡と柳作A・C遺跡との関係は明確にできないが、菖蒲谷地区では一所に住居が密集する集落を形成したのではなく、丘陵裾部の狭い平坦地に小規模集落ないしは各戸ごとに散在的に居住していたものと推測される。

その後、中世まで人の痕跡は見られない。中世以降の痕跡として、掘立柱建物跡と青磁・石製品の出土が挙げられる。本遺跡より検出された掘立柱建物跡の内、SB03は平安時代前半に帰属することを先述したが、中世に帰属する可能性も若干残している。掘立柱建物跡はSB01・02とSB03では柱穴の規模、柱間寸法、占地に違いがあることから、それぞれ、時期が異なり、前者が近世、後者が平安時代前半ないしは中世と推測される。SB03検出のきっかけとなったのが龍泉窯系青磁片の出土であったことからも、SB03を中世と考える一つの要因となっているが、正確な時期は不明といわざるを得ない。なお、この青磁は13世紀中葉から14世紀前葉にかけて日本国内で多く流通していた鍋井弁文碗（山本他1995）であり、小野町内ではおそらく初めての出土ではなかろうか。因みに、町内ではこれに後続する時期に機能していた遺跡として、猪久保城跡や鴨ヶ館跡などが知られていることから、この青磁片の出土がこれらの遺跡に先行する時期の小野地方を探る端緒となるものと考えられる。最後に、石製品の内、図25-2に示した薄い砥石は京都鳴滝産の風化粘板岩であり、刀剣類の砥石として江戸時代に流通していたものである。また、同図3は宮城雄勝産の粘板岩製の硯で、やはり、近世の代物である。SB01・02も含めて、本遺跡における近世について言及できないが、刀剣類の砥石が本遺跡から出土したことは興味深い。

以上、今回の調査成果をもとに本遺跡について概観してきたが、今後、近隣の遺跡の調査及び類例の増加によって本遺跡の性格・位置付けが明確になるものと期待したい。

(能登谷)

参考文献

- 丹野隆明他 1991 「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告X-1』 福島県教育委員会
 松本 茂也 1991 「法正尻遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告1-1」 福島県教育委員会
 石本 弘也 1999 「柳作A遺跡」「柳作C遺跡」「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4」 福島県教育委員会
 本間 宏也 1999 「上田鷲VII遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告1-8」 福島県教育委員会
 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 有限会社真陽社

第2編 反田 B 遺跡

遺跡略号 ON—SRT・B

所 在 地 田村郡小野町大字菖蒲谷字反田・鹿島

調査期間 平成13年9月19日～11月20日

調査員 関 博人・笠井 崇吉

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

反田B遺跡は、田村郡小野町大字菖蒲谷字反田・鹿島地内に所在する。JR磐越東線小野新町駅から東約4km、国道49号線と県道矢吹小野線の交差点から北東約4kmに位置し、遺跡の北約500mには県道矢吹・小野線が通っている。

本遺跡がある小野町周辺の地形は、周囲は山で囲まれており、特に北西側には黒石山や一杯山、日陰山などの標高700~800m前後の山々がある。それらを源とする右支夏井川が町の東南部を流れる夏井川に向かって流れしており、河川の作用により小規模の河岸段丘が形成されている。また、十石山をはじめとする500~700mの丘陵部は右支夏井川の支流である黒森川などの小河川によって開析され、小野新町付近で平坦面の幅が広くなっている。遺跡が所在する菖蒲谷地区は、小野新町の西方にあたり、黒森川中流域付近の丘陵部とそれを樹枝状に開析した谷部からなる起伏に富んだ地形である。本遺跡は、黒森川から約500m南方に入り込んだ所に所在する。

今回の調査区は遺跡の西部にあたり、北側にのびる谷地から西側に入り込む小支谷の下部で、扇状に開いた斜面上に所在する。調査区中央部は西側から東に向けて傾斜しており、調査区の北側と南側には小さな谷が、それぞれ北と東から入り込んでいる。調査区の東側には傾斜も穏やかな狭小な平場が残存している。遺跡内には数10cmから1mほどの岩が多数存在し、特に、南北にある谷内

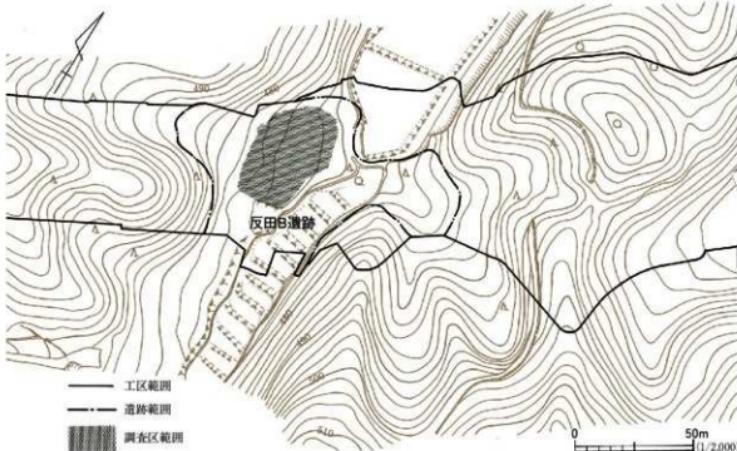


図1 反田B遺跡調査区位置図

には、2mを測る岩も多数存在する。

調査前の現況は杉を中心とした山林で、調査区東方は強湿土壌の水田跡であった。遺跡の標高は西側の斜面上部で約476m、北側の谷の底部で約470mであり、比高差は約6mを計測する。

周辺の遺跡として、平成13年度に調査を行った鹿島遺跡が東方約250mに丘陵を挟んで所在し、関場B遺跡は西方約750mに山を挟んで所在する。

(関)

第2節 調 査 経 過

反田B遺跡は、平成13年度に実施されたあぶくま南道路建設に伴う表面調査によって遺跡推定地として発見・登録された。平成13年度内の7月には試掘調査が行われ、その結果、縄文時代の遺構が存在し、縄文土器の散布地としての可能性があるとして路線内の1,300m²が保有範囲とされ、字名から「反田B遺跡」とした。その後、福島県教育委員会と財團法人福島県文化振興事業団、工事側の3者で協議がもたれ、平成13年度内に本調査を実施することに決定した。

反田B遺跡の発掘調査は平成13年9月19日より開始した。重機による表土剥ぎを調査区西端の斜面上部から始め、東側の平坦地の端までを行った。排土については、調査区南方の工区内及び調査区東方の谷部を越した工区内を置場とした。なお、器材庫・休憩所として使用するプレハブ用地は、谷を挟んだ東側に造成したが、本遺跡への進入路は幅が狭く、起伏が激しいことから、プレハブ移動のための大型車両が進入できなかった。このためプレハブの設置を諦め、仮設テントで風雨を凌ぐこととした。

10月1日から機材搬入等を始め、翌2日から作業員による遺構検出作業と土器埋設遺構精査、並びに、安全衛生対策と周辺の環境整備を施し、危険防止策を徹底するとともに、厳寒期に備えて、防寒対策も徹底した。

10月中旬には、堅穴住居跡、土坑、沢部の遺物包含層が検出され始めるとともに、土器埋設遺構を始めとする検出された各遺構について精査を開始した。10月下旬になると、遺構精査が本格的になり、堅穴住居跡と沢部の掘り込みを中心に行なった。調査区中央付近において堅穴住居跡が検出されたことを受け、遺物包含層の範囲を確認するため、調査区東方の水田部に重機で、南方については作業員によってトレンチを入れたが、遺構・遺物とともに検出されなかった。

11月上旬には調査区北部の北側谷部以外の遺構精査が終了した。

11月13日には遺跡の全容が把握できるようになったことから、調査区全景の写真を周囲の丘陵頂部から撮影した。北側谷部の遺物包含層の精査と、調査区内の下部遺構の確認、地形測量図作成などが終盤の主な作業となった。

11月19日には調査区の調査がすべて終了したことから、再度、調査区全景の写真を周囲の丘陵頂部から撮影した。20日には発掘機材、テント、トイレ等の撤去を行い、すべての作業を終了し、27日には工事側に対して引渡しを行った。

(関)

第3節 調査方法

反田B遺跡の調査面積は、1,300 m²である。調査にあたっては、本遺跡と隣接する各遺跡との位置関係を正確に把握するために、国土座標軸（公共座標軸第IX系）を基本とした。

調査は10 m方眼の測量基準線を遺跡全体に設定し実施しているが、このグリッドの起点は調査区北西外の国土座標X=141,160・Y=67,460に位置する。グリッドには、個別の番号を付記しているが、この原点となる座標から東西方向に西から東へ1・2…と付した算用数字と南北方向に北から南へA・B…と付したアルファベットを組み合わせて表示し、グリッドの北西隅の杭をA1グリッド・B2グリッド…のように呼称した。これらのグリッドは遺物の出土位置の表示と遺構の位置表示を行うために使用し、これとは別に平面図作成のための1 m方眼の測量基準線を規定している。なお、この1 m方眼を基本とした測量基準線の方向はグリッドの分割線の方向と一致しており、その原点はグリッド杭の起点と同じである。ただし、調査時には起点となるXをN（北）に、YをE（東）に読み替えて、それぞれの座標の下3桁を使用している。例えば、グリッド起点はN160・E460（X141,160・Y67,460の下3桁）と表示され、調査区内のN130・E480はX141,130・Y67,480の位置に該当する。調査区内の標高は、あぶくま高原自動車道建設事務所が設置した標高基準杭を原点として、標高移動を行い、調査範囲内に水準点を移動した。なお、調査区内は起伏が多いことからグリッド杭を設定するにあたり正確性を期し、光波測距儀を用いた。

発掘調査での表土剥ぎは、主に重機を使用し、人力によって草削り・唐鋤などを使用して遺構・遺物の検出作業を行った。その際の排土処理は、不整地運搬車・一輪車等を用いて運搬した。

調査区内の土層については、基本土層はローマ数字を用いて「L I・L II…」と表し、遺構内の土層については、「ℓ 1・ℓ 2…」と表記した。遺構内よりまとまって出土した遺物は、各個体ごとに「No 1・2…」と番号を付し表現した。

各種遺構の掘り込みにあたっては、遺構の大きさや重複関係を考慮して、土層観察帯を設定し、写真撮影及び実測を行った。竪穴住居跡などの大型遺構は基本的には4分割法を基本として調査を行ったが、遺存状態の悪いものについては2分割法で対応した。炉跡など住居内施設及び床面については、これらの構造を把握するため、断ち割りを実施した。土坑などの小型の遺構については、基本的に長軸優先の2分割法を採用した。遺物の取り上げに際には、上記の土層の表記を使用し、遺構外のものはグリッド単位で取り上げた。

写真は、調査の進捗に合わせて35mm判のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムの双方を用いて撮影したが、竪穴住居跡など大型の遺構については、6×4.5判のカメラも使用した。また、遺跡全景や各遺構の全景については、調査区が望める丘陵頂部から写真撮影を行った。

発掘調査で得られた記録・遺構写真などの資料は、当事業団の整理基準に準拠して整理を行い、報告書作成終了後、それぞれの台帳を作成し、収蔵施設に保管する予定である。 (関)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構分布(図2、写真2-1)

反田B遺跡は北側に開口する谷に面した西側緩斜面に立地する。調査区の標高は470~476m程度で、調査区の東西は比高差40~50m程の丘陵となっている。この場所は北に開口する谷から西側に伸びた小支谷の開口部にあたり、小規模な扇状地形を成している。調査区内の標高474m付近は数箇所に湧水点が有り、常時水が湧き出して、細い流れを形成し、調査区の北側では北東方向に、南側では東方向に流れていた。このため沢筋付近は常にぬかるんでおり、調査は困難を極めた。

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構1基、土坑1基、土器埋設遺構2基と遺物包含層1箇所である。竪穴住居跡は楕円形の平面形をしており、1号住居跡がやや小型である。2軒とも調査区中央付近緩斜面に位置する。竪穴状遺構は1号住居跡に近似する規模で楕円形の平面形をとり、住居跡北方の緩斜面に位置する。土坑は2号住居跡の南側に隣接して位置する小型のものである。土器埋設遺構は調査区北側の埋没谷に面して、1号土器埋設遺構は中央付近、2号土器埋設遺構が西側に位置する。遺物包含層は土器埋設遺構の北側に南西から北東方向にのびる埋没谷(北側谷部)の堆積土で4枚の層から遺物が出土した。

出土遺物は縄文土器片1,003点(早期19点、前期26点、中期255点、後期14点、晩期689点)、石器9点、土製品2点で、遺物の大半は北側谷部とC4グリッドから出土した。竪穴住居跡・竪穴状遺構・土坑からは縄文時代晩期の遺物が出土し、土器埋設遺構には縄文時代中期の土器が埋設されていた。

(笠井)

基本土層(図3、写真2-1)

本遺跡は先にも述べたごとく小支谷の開口部にあたり、遺跡内には谷頭のある西方向から大量の土砂と大小の岩がともに流れ込んでいた。土砂の大半は、北側谷部の方向へ流れているようで、ここでの堆積が調査区内で最も厚く、1~1.9mを測る。これに対し、調査区南西側のD2・E2グリッド周辺は支谷の真下に位置しながら、土砂が北側谷部及び南側の沢へ流れため、堆積土が薄く、厚い場所でも70cm程度である。遺跡のほぼ全域で基盤層の上に暗褐色を基調とした無遺物層が堆積し、その上に黒褐色を基調とした腐食土層が堆積している。北側谷部では暗褐色を基調とした土層と黒褐色を基調とした土層の間に複数の堆積層が形成されていた。調査中はこれらの土層をLⅠ~Ⅲに大別し、混入物や締まりの違いで細分の必要がある場合にはローマ字の小文字を付して細別をおこなった。また、遺跡の基盤層はLⅣ・Vとした。以下、各土層の説明を行う。

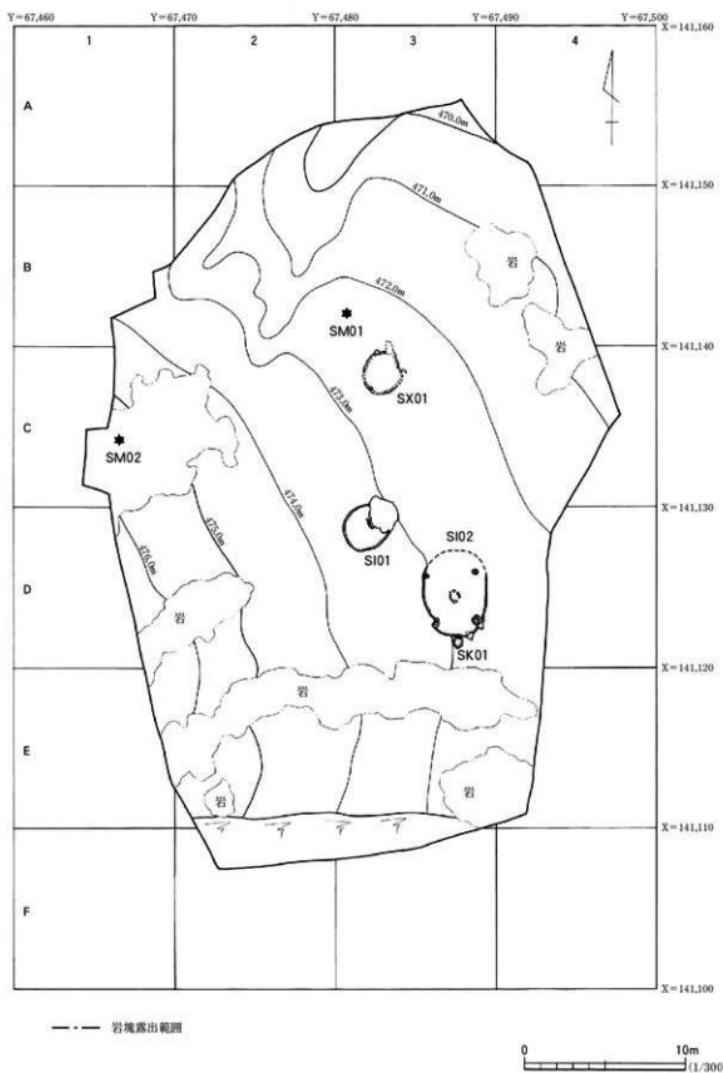


図2 遺構配置図

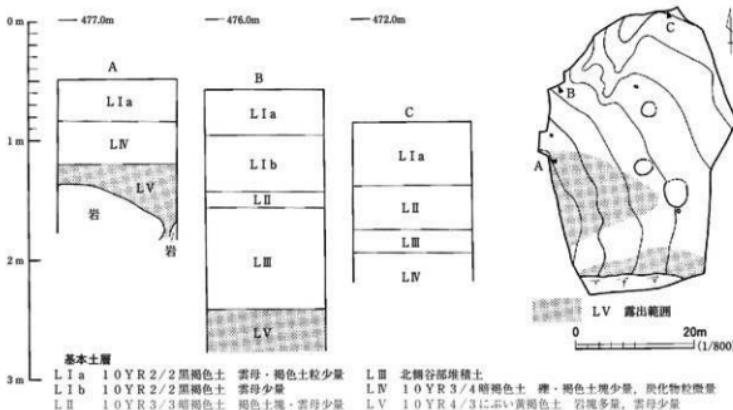


図3 基本土層

L I a：表土である。縮まりのあまり無い腐食土層で、黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒及び金色の雲母を少量含んでいる。L I bとの色調の差はほとんど無く、縮まりの違いにより分層した。調査区の全域に堆積していた。

L I b：L I aと酷似する土層である。縮まりの有る腐食土層で、黒褐色土を基調とし、金色の雲母を少量含む。L I a同様に調査区のほぼ全域に堆積していたが、調査区北東側のA 2～4グリッド及び調査区南西側のD 2グリッド付近では堆積が見られなかった。北側谷部以外での遺構外出土遺物はほとんどこの層から出土している。

L II：暗褐色土を基調とする層である。縮まりはやや無く、L Vの崩れたものと考えられる褐色土塊を少量含むことから再堆積層と考えられる。C 1～4グリッド以北を中心堆積していた。数は少ないが縄文時代晩期の遺物が出土している。

L III：北側谷部に堆積した土層である。色調や混入物の違いでa～gまで7層に細分することができた。縄文時代中期及び晩期の遺物が多く出土している。詳細については、第2章第6節の「遺物包含層」の項において説明しているので、本節では割愛する。

L IV：1・2号住居跡等の縄文時代晩期の遺構がこの層の上面から掘り込まれていることから、少なくとも晩期の時点で遺跡の基盤となっていた層である。暗褐色土を基調とした無遺物層で黒雲母花崗岩の礫及び褐色土塊を少量含んでいる。図3のL V露出範囲とした部分以外に堆積していた。

L V：遺跡の基盤層で、黒雲母花崗岩の岩塊を多く含んでいる。露出した岩塊の範囲は図2に一点鎖線で示した。なお、北側谷部にも多く岩塊が露出した部分があるが、図が煩雑になることから、図2では省略し、図13でより細かく示した。

(笠井)

第2節 壇穴住居跡

反田B遺跡では調査区の中央付近で2軒の壇穴住居跡を検出した。2軒の住居跡は大きく捉えると北側に開口する大きな谷に面した東方向へ下る緩斜面に立地しており、緩斜面の西側は開析された支谷となっている。より細かく見ると、この緩斜面は背後の支谷から排出された土砂により扇状に形成されたもので、住居跡はその扇状地形の中央付近に立地し、比較的平坦で支谷からの流水の影響を受け難い場所を選地している。また、周囲には直径1~2m程もある花崗岩の岩塊が露出しており、住居跡はこの岩塊を避けた構築されたようである。住居跡と谷底の水田面は4~6mの比高差があった。以下、各住居跡の説明を行う。

1号住居跡 S I O I

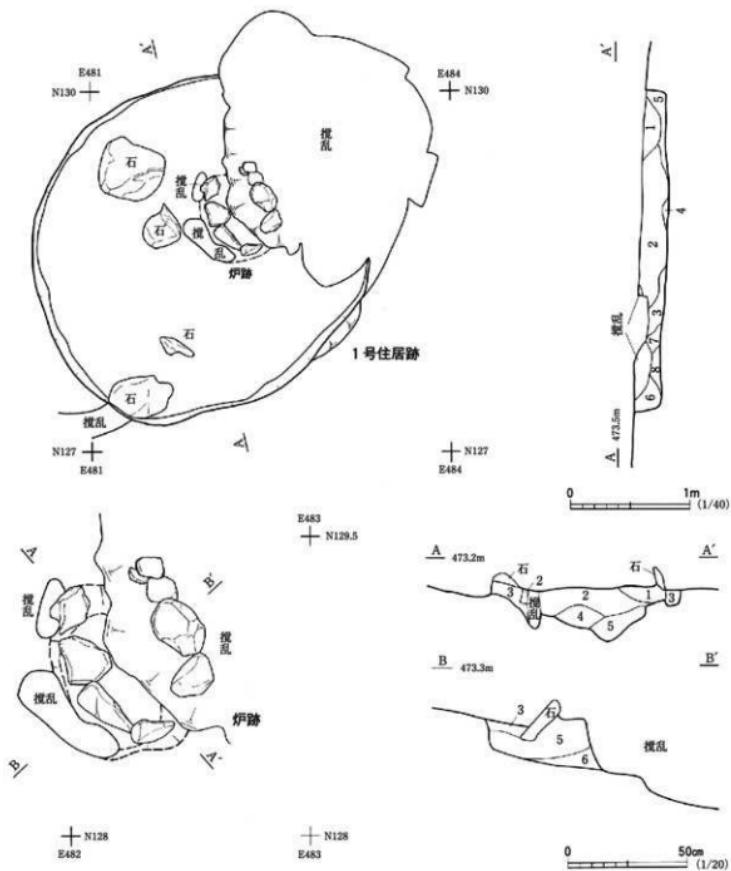
遺構 (図4, 写真2-2)

本住居跡は調査区中央部のD 3グリッド北西隅付近に位置している。遺構は東方向に下る緩斜面の傾斜の緩くなる標高473~473.5m付近に立地する。遺構検出面はL IV上面であり、円形の黒色土範囲として確認した。重複する遺構は無かったが、本遺構の南東3mにS I O 2、北7mにS X 0 1が所在しており、これらの遺構は出土遺物から本遺構とほぼ同時代の所産である可能性が高い。

遺構内堆積土は8層に分層した。 ℓ 1は炭化物粒を含み、 ℓ 2~8はLVが崩れたものと考えられる褐色土塊・粒やLVに含まれる黒雲母花崗岩の風化した白色砂粒・雲母等を含んでいる。その堆積状況は、三角堆積やレンズ状の自然堆積を示していないことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

本住居跡の平面形は、北東側が搅乱により大きく壊されているため断定できないが、遺存する部分で判断すると、北東~南西方向に若干長い楕円形を呈すると考えられる。遺構の軸は明瞭ではないが、長軸方向をとると真北から東へおよそ5°傾いている。現状で確認できた規模は、長軸が遺存値で2.5m、短軸が2.7m、検出面からの深さ18~22cmを測る。周壁はほぼ垂直に立ち上がりておらず、床面は平坦であるが、若干北東方向に下っている。また、床面はLVを掘り込んで作られ、踏み締まり等は確認できず、南西側及び北西側には花崗岩が露出している箇所もあった。

住居内の施設としては、床面の中央や北東側に炉跡を確認した。炉跡は石囲炉であるが、その7割程度が住居跡北東側の搅乱のために壊されており、遺存状態は極めて悪い。炉跡の平面形及び規模は遺存状態が悪いため明確ではないが、残存箇所から推定すると、直径70cm程度の円形を呈していたものと考えられる。炉跡の燃焼面は確認できなかったが、炉石の露出部分は被熱しており、炉跡が使用されていたことは明らかである。炉の使用頻度が少なかったか、燃焼面を削り取ってしまったかのどちらかであろう。炉石は地山に含まれる黒雲母花崗岩の礫を使用していた。礫の大きさは10~25cm大のもので、厚さ5~7cm程の薄いものが多い。概ね広い面を炉の内側に向けて設置



1号住居跡堆積土

- 1 10 YR 2 / 1 黑色土 暗褐色土壤多量。雲母・白色砂粒・炭化物粒少量
- 2 10 YR 2 / 1 黑色土 雲母・黑褐色土壤多量。炭化物粒少量。洗土粒微量
- 3 10 YR 2 / 1 黑色土 黑褐色土壤。白色砂粒微量。雲母少量
- 4 10 YR 3 / 4 暗褐色土 黑褐色土壤多量。雲母少量。白色砂粒微量
- 5 10 YR 2 / 2 黑褐色土 雲母少量
- 6 10 YR 3 / 4 暗褐色土 黑褐色土壤多量。雲母・砂粒少量。炭化物粒微量
- 7 10 YR 2 / 3 黑褐色土 口一ム粒・黑色土粒多量。褐色土壤・雲母少量
- 8 10 YR 3 / 4 暗褐色土 黑色土壤。褐色土壤・雲母少量。炭化物粒微量

1号住居跡炉形堆積土

- 1 10 YR 2 / 2 黑褐色土 褐色土塊多量。雲母少量
- 2 10 YR 2 / 1 黑色土 褐色土塊多量。雲母量。炭化物粒微量
- 3 25 YR 2 / 1 黑色土 雲母多量
- 4 10 YR 2 / 3 黑褐色土 褐色粒多量。雲母・炭化物粒少量
- 5 10 YR 3 / 2 黑褐色土 褐色粒多量。雲母少量

図4 1号住居跡

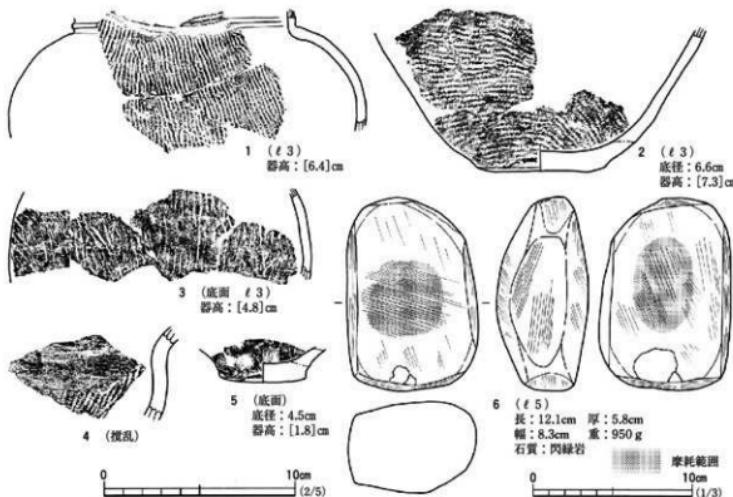


図5 1号住居跡出土遺物

されており、機能時の位置関係を保つものが炉の南西側で4個確認できた。また、北東側は搅乱により壊されているが、搅乱の中に1列に並んだ5個の被熱した礫が確認された。これらの礫は炉跡北東側の炉石である可能性が高く、機能時の状態を止めていないが、その並び方から個々の相対的な位置関係を保っているものと考えられることから、参考までに図示しておいた。炉跡の掘形は遺存長80cm、床面からの深さ22cmを測り、鉢鉢状を呈していた。掘形内堆積土は6層に分層できた。各層は褐色土塊・雲母・炭化物粒等を含んでいるが、焼土を含むものや被熱を受けたものが認められず、最上層の①が炉石を支えている。なお、炉跡以外に柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物(図5)

本遺構からは縄文土器片35点と石器1点が出土した。③及び床面から出土したものが多い。本遺構を壊している搅乱から出土したものも住居跡出土のものと同じ時期の所産であったため、本遺構出土遺物として数えた。この内、遺存状況の良好なものや特徴的なものを図5に示したが、掲載しなかった土器片もすべて縄文晩期後半の所産である。また、床面出土の資料(図8-1左端の破片)が、S102出土のものと接合したため、この資料はS102出土遺物で掲載した。

図5-1は壺の頭部から胴上半部である。球状の胴部には垂直に立ち上がる頸部が付く器形をしており、頸部には沈線が少なくとも2条引かれている。胴部には燃系文が施され、内面は丁寧になでられている。同図2は深鉢の底部から胴下半部で、底部から内湾しつつ開く器形をしている。外面全体に単節繩文を施しており、内面は丁寧になでられている。底面は同心円状になでられ、縁辺は幅1cm程度に面取りされている。同図3は深鉢の胴部中位付近であろう。内湾しており、外面

には撫糸文が施されている。内面は横位のヘラナデが施されている。外面には煤が付着していた。同図4は深鉢の頭部付近である。弱く括れて口縁部は外反するようである。頭部はヨコナデされており、無文である。胴上部には単節縄文が施されており、内面は丁寧になでられている。同図5は鉢の底部であろう。底面は平坦ではなく、若干膨らみ、底部から胴下部にかけて強く外反して開いている。外面は丁寧なミガキが施され、内面はなでられている。

同図6は閃綠岩製の磨石である。全面に擦痕が認められ、各辺には明確な棱が形成されている。特に、広い面の中央付近は著しく摩滅している。

まとめ

本遺構は推定長軸3m、短軸2.7m程度の楕円形の平面形を呈すると考えられる住居跡である。柱跡は検出されず、石囲炉が床面中央やや北東側で検出された。この炉跡は炉石に被熱痕跡が認められたものの、燃焼面が形成されていないことから短期間使用されただけか、燃焼面を故意に取り除いたかのどちらかであろう。床面が踏み締められていないことから、住居跡の機能時間は短いものであつたことが想定される。また、本遺構の床面で出土した資料と、本遺構の南東3mに位置するS I 0 2出土の資料が接合したことから、両住居跡は近い時期の所産であると思われる。本遺構の所属時期は、出土遺物の特徴から縄文時代晩期後半の大洞C 2期式であろう。

(笠井)

2号住居跡 S I 0 2

遺構(図6~8、写真2~3)

本住居跡は調査区中央部のD 3グリッド西側に位置している。遺構は東方向に下る緩斜面の傾斜の緩くなる標高472.5~473m付近に立地する。遺構検出面はL IV上面であるが、検出の段階で床面や炉石の一部が露出していた。重複する遺構は無かったが、本遺構の北西3mにS I 0 1が所在し、さらに11mにS X 0 1が所在しており、南側にはS K 0 1が隣接している。これらの遺構は出土遺物から本遺構とはほぼ同時代の所産である可能性が高い。遺構は北側から東側にかけて流出しており、堆積土も薄く遺存状況はあまり良好ではない。

遺構内堆積土は13層に分層した。ℓ 1~13の混入物は、L Vの崩れたものと考えられる褐色土粒やL Vに含まれる黒雲母花崗岩の風化した白色砂粒・雲母等を主体として各層で均一に含まれ、焼土粒を含まないが、本遺構の上面が削平を受けて堆積土が薄いため、自然堆積か人為堆積かの断定はできない。ℓ 1 4は遺構の南側でのみ検出された掘形の埋土で、褐色土塊・焼土粒・炭化物粒を含むとともに、縄文時代中期・晩期の遺物が混入していた。

本住居跡の平面形は、北側が流出しているため断定できないが、遺存する部分から判断すると、南北方向に長い楕円形を呈すると考えられる。遺構の長軸方位は東西に並ぶ主柱穴P 1・2の中点とP 3・4の中点を結んだ線で測ると、真北から7°西に傾いている。現状で確認できた規模は、長軸である南北長が遺存値で4.1m(推定で4.8~5m)、東西長が3.96m、検出面から床面までの深さは最大で12cmを測る。周壁は、比較的遺存状態の良い西壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。床

面はほぼ平坦であるが、炉跡を挟んで東西と南東側で地山に含まれる花崗岩が露出している箇所がある。また、炉跡より北側はLIVを掘り込んだだけの床面であるが、南側には床面からの深さ15~30cm程度の掘形があり、黒褐色土を充填して床面としていた。なお、遺構の南北で踏み締まりは確認できなかった。

住居内の施設としては、石囲炉及び主柱穴を含む9基の小穴を確認した。石囲炉は住居跡のほぼ中央に位置している。遺構検出の段階で炉石が露出しており、その時点で炉石のいくつかは失われていた。平面形は、遺存する炉石と炉石掘形の配置から北西-南東方向に長い卵形と推測され、炉石の外側で測ると、長軸7.5cm、短軸6.4cmを測り、燃焼面は長短軸ともに5.0cmを測る。炉石はLVに含まれる黒雲母花崗岩の礫を使用しており、炉の内側を向いて露出した部分が被熱しており、脆くなっていた。礫の大きさは10~15cm大のものが主体であるが、南側のものは長さ3.5cmを測る大きなもので、概ね広い面を炉の内側に向けて設置されていた。炉跡堆積土は3層に分かれ、ℓ1は炉石抜き取り後の窪みに堆積した土で、ℓ2・3は掘形埋土である。ℓ2は炉石を据えるための埋土で、焼土粒・炭化物粒を含んでいない。ℓ3は褐色土塊を多量に含んでおり、上面は南側が被熱して赤化していた。

P1~4は主柱穴と考えられるもので、P1は西壁沿いの北側、P2は東壁沿いの北側、P3は東壁沿いの南側、P4は西壁の南側に位置している。各柱穴間の距離は掘形の芯々で測ると、P1~2間は3.1m、P2~3間は3.2m、P3~4間は2.6m、P4~1間は3mを測る。堆積土はどの柱穴も暗褐色・黒褐色土を基調としており、間層にLVが崩れたと考えられる褐色土やにぶい黄褐色土が入り込んでいた。柱痕を明確に残すものは無く、いずれの柱穴でも乱れた堆積状況を示すから、柱が抜かれた可能性も考えられよう。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、規模は北側のP1・2が3.0~3.2cm、南側のP3・4が4.0~5.8cmを測り、P3が最も平面規模が大きい。床面からの深さはP1・3・4が5.4~6.3cmと深く、P2は他の柱穴と比較すると3.7cmと浅い。いずれの小穴もLIVを掘り抜いてLVに達している。P5~9は機能不明の小穴で、分布は炉跡よりも南に集中している。堆積土はどの小穴でも単層で混入物の状態も均一であることから、自然埋没したものと考えられる。いずれの小穴も梢円形か円形を呈しており、平面規模はP5・6・9が33~34cm、P7・8がやや小型で2.2~2.4cmを測る。床面からの深さはいずれも浅く6~13cmである。

遺物(図8、写真2~8)

本遺構からは縄文土器片40点と土製品1点が出土した。縄文土器は36点が晩期の所産で、4点が中期の所産であった。本遺構は炉跡の北東側に東西1.4m、南北9.4cmの大きな擾乱があり、ここから晩期の土器片4点と土製品1点が出土したことから、これらの遺物も一応、本遺構出土の資料として扱うものとする。また、掘形埋土のℓ1・4や床面の小穴出土遺物も本遺構機能時の所産ではないと考えられるが、ここで取り上げておくことにする。図8に掲載したものは遺存状況の良好なものや、特徴的なものであるが、図示しなかったものはすべて縄文時代晩期後半の所産である。

図8-1~9は縄文時代晩期の土器である。1は精製鉢の口縁部から胴上部にかけての破片で、

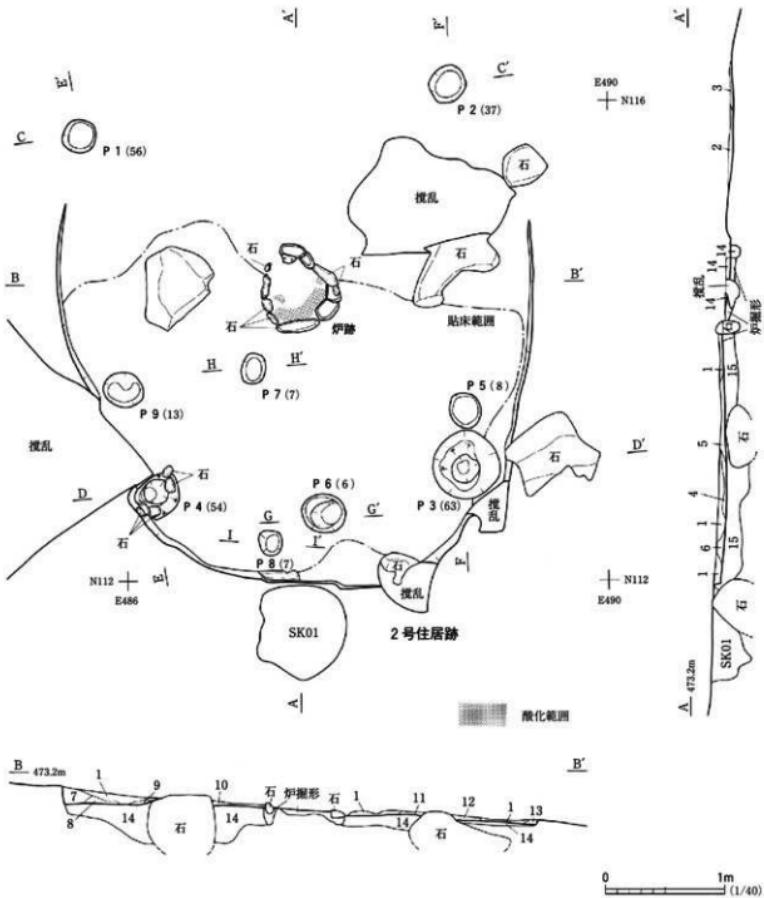
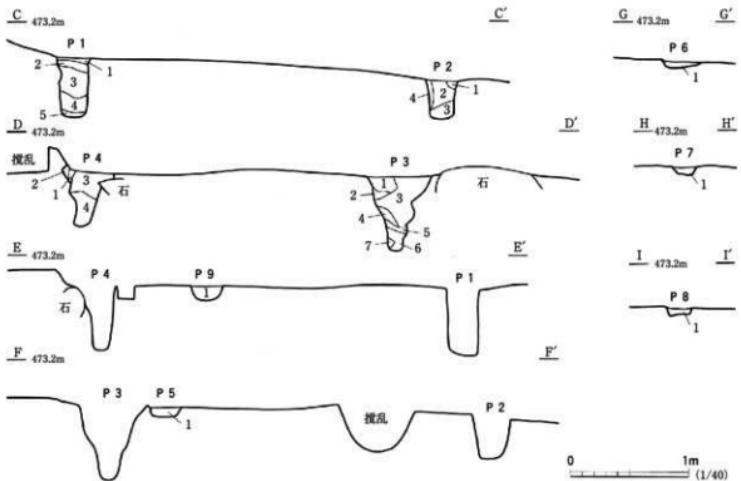


図6 2号住居跡(1)

- | | | | |
|--------------------|-----------------------------|---------------------|-------------------------|
| 2号住居地堆積土 | | | |
| 1 10 YR 2 / 2 黑褐色土 | 褐色砂粒多量。雪母。白色砂粒少量。
炭化物粒微量 | 7 10 YR 2 / 3 黑褐色土 | 褐色土壤多量。白色砂粒少量。炭化物粒微量 |
| 2 10 YR 2 / 3 黑褐色土 | 雪母多量。白色砂粒。褐色土粒少量。
炭化物粒微量 | 8 10 YR 3 / 3 暗褐色土 | 褐色土粒。黑色土粒多量。白色砂粒。雪母少量 |
| 3 10 YR 3 / 3 暗褐色土 | 褐色土粒多量。雪母。白色砂粒。炭化物粒微量 | 9 10 YR 2 / 3 黑褐色土 | 褐色土壤多量。白色砂粒。雪母少量。炭化物粒微量 |
| 4 10 YR 3 / 3 暗褐色土 | 雪母多量 | 10 10 YR 3 / 1 黑褐色土 | 褐色土壤。炭化物粒多量。白色砂粒少量 |
| 5 10 YR 2 / 3 暗褐色土 | 白色砂粒。雪母。黑色土粒少量 | 11 10 YR 3 / 3 暗褐色土 | 褐色土粒。砂粒多量 |
| 6 10 YR 2 / 3 黑褐色土 | 白色砂粒。雪母少量 | 12 10 YR 3 / 4 暗褐色土 | 白色砂粒。雪母少量 |
| | | 13 10 YR 3 / 2 黑褐色土 | 褐色土粒多量。炭化物粒。白色砂粒少量 |
| | | 14 10 YR 3 / 2 黑褐色土 | |



- P 1 堆積土**
- 1 10 YR 4/2 黒褐色土 炭化物粒・白色砂粒・褐色土粒微量
 - 2 10 YR 3/4 暗褐色土 開色土塊・褐色土粒多量。白色砂粒・炭化物粒微量
- P 4 堆積土**
- 1 10 YR 4/3 にい黄褐色土 褐色土塊多量、白色砂粒微量
 - 2 10 YR 4/6 黒褐色土 開色土塊・炭化物粒・白色砂粒・褐色土粒微量
 - 3 10 YR 3/3 暗褐色土 開色土塊・炭化物粒・白色砂粒・褐色土粒微量
 - 4 10 YR 2/3 黒褐色土 開色土塊多量、炭化物粒・白色砂粒微量
- P 2 堆積土**
- 1 10 YR 4/4 黒褐色土 白色砂微量
 - 2 10 YR 3/2 黒褐色土 白色砂微量
 - 3 10 YR 4/2 黄褐色土 褐色土粒多量
 - 4 10 YR 4/3 にい黄褐色土 褐色土粒多量、白色砂微量
- P 3 堆積土**
- 1 10 YR 3/3 暗褐色土 炭化物粒・白色砂粒・褐色土粒微量
 - 2 10 YR 3/4 暗褐色土 黑褐色土塊少量、白色砂粒・炭化物粒微量
 - 3 10 YR 2/3 黒褐色土 細褐色土塊少量、炭化物粒・白色砂粒・褐色土粒微量
- P 5 堆積土**
- 1 10 YR 4/3 にい黄褐色土 開色土塊多量
 - 2 10 YR 3/4 暗褐色土 黑褐色土粒・白色砂粒多量
 - 3 10 YR 3/3 暗褐色土 白色砂粒微量
 - 4 10 YR 4/3 にい黄褐色土 開色土塊多量
- P 6 堆積土**
- 1 10 YR 2/3 黒褐色土 褐色土塊多量、白色砂粒微量
- P 7 堆積土**
- 1 10 YR 2/3 黒褐色土 開色土塊多量、炭化物粒・白色砂粒微量
- P 8 堆積土**
- 1 10 YR 2/3 黒褐色土
- P 9 堆積土**
- 1 10 YR 2/2 黒褐色土 炭化物粒・白色砂粒・褐色土粒微量

図7 2号住居跡(2)

本遺構のℓ3及びP4ℓ1から出土した口縁部片とS101床面出土の胴部片が接合し、また、本遺構が所在するD3グリッド出土遺物の中に、接合こそしないものの明らかに同一個体と判断できる胴部片があったため、これらを組合せて復元的に作図した。器形は底部方向から内清しつつ開いており、胴部文様帯と口縁部文様帯の境目で内屈し、口縁部が水平に突出して明瞭な段を形成している。口縁部には形突起を有しており、縁辺には粘土帶を貼り付けて縁取っている。口縁部文様帯は横になられており、下端には刺突が施されている。胴部文様帯は上下を沈線で区画し、区画内を沈線による雲形文で埋めている。胴部文様帯の上端で、波状口縁の波頂部直下には瘤状突起も付さ

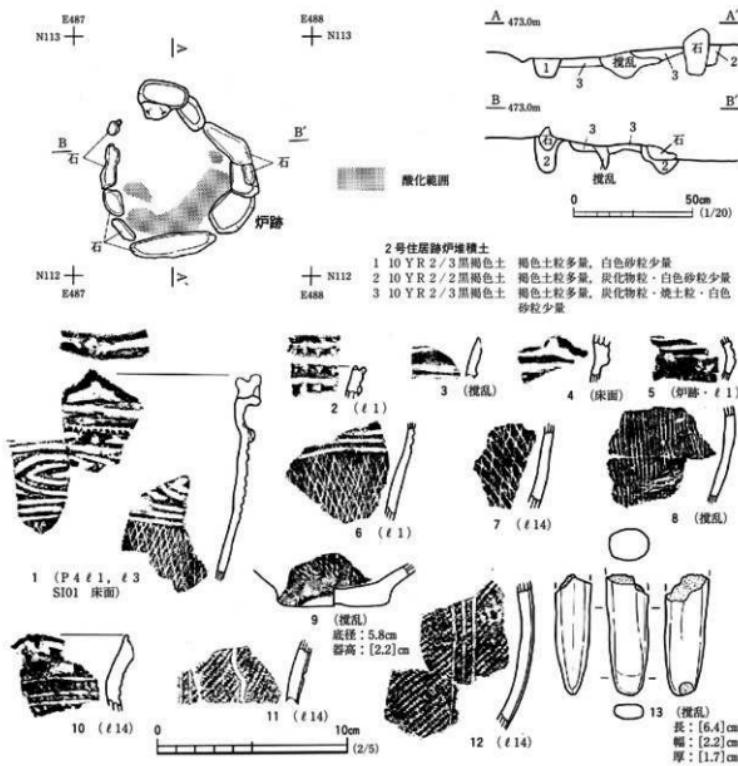


図8 2号住居跡、出土遺物

れている。文様帶以下は網目状撚糸文が施されている。2は口縁部片で口唇部が右手の人差し指と親指により摘み出されるとみられ、その際に捻りを加えているため、親指の爪が連続した刻み目を形成している。口唇部直下には沈線が施され、さらにその下には沈線に沿って棒状工具による斜め方向からの刺突が施されている。3は1に似た器形の口縁部文様帶付近と考えられるが、文様帶下端には刺突が無く、胴部との境目は断面三角形の摘み出した隆帶で区画している。4は頂部突起を欠くが、波状口縁の波頂部付近である。1と同一個体の可能性がある。5は精製鉢の胴部片で、口縁部が内湾する器形と考えられる。屈曲部より上が文様帶にあたり、沈線を少なくとも3条以上横位に施している。6・7は網目状撚糸文を施した胴部片で、6は上部に胴部文様帶の下部区画と考えられる3条の沈線が横位に施されている。1と同一個体である可能性が高い。8は撚糸文を施した胴部片で内湾している。9は底部片で、底面は若干膨らむ。底部から胴下部にかけては強く外

反して開いている。外面には撲糸文が施されている。

同図10～12は縄文時代中期の土器で、すべて掘形埋土から出土したものである。10は口縁部片で、波状を呈し外反して開く器形である。口唇部は欠けているため定かではないが、沈線で渦巻文様が描かれている。口縁下には浅い沈線が横位に3条引かれている。地文は施されているようだが、摩滅が顕著なためその原体は不明である。11・12は胴部片である。単節縄文の地文に垂下する複数の沈線を施している。11には垂下する波状文も認められる。これらの土器はその特徴から中期後半の大木8b式から9式にかけての所産と考えられる。

同図13は床面の搅乱から出土した棒状の土製品である。匙状を呈すると考えられるが柄の部分のみが遺存している。外面は丁寧になでられている。

まとめ

本遺構は推定で長軸約5m、短軸4m程度の楕円形を呈すると考えられる住居跡である。主柱穴が4隅にはば方形に配置されており、床面の中央には石圓炉が検出された。炉跡の燃焼面は一部が被熱していたが、顕著ではなく使用期間は短いものであったことが推察できる。また、床面も明瞭な踏み締まりが確認できることから、SI01同様、住居跡自体の機能期間も短いものであったのだろう。なお、本遺構から出土した資料と、本遺構の北西3mに位置するSI01出土の資料が接合したことから、両住居跡は近い時期の所産であることは確かであろう。本遺構の所属時期は出土遺物の特徴から縄文時代晩期後半の大洞C2式期と考えられる。

(笠井)

第3節 壁穴状遺構

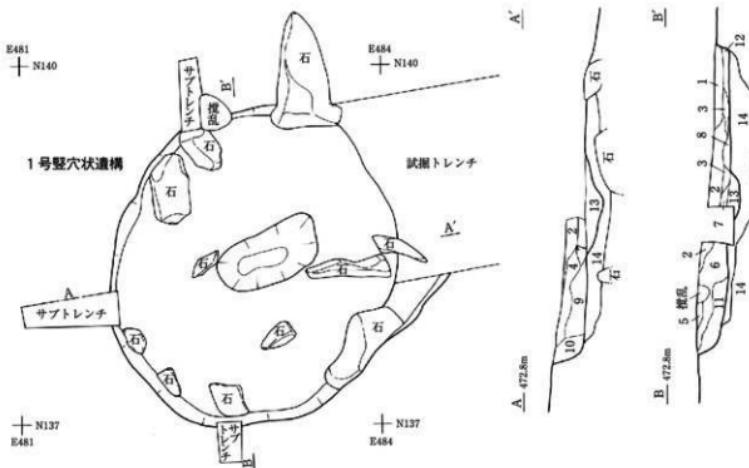
反田B遺跡では2軒の住居跡の北側に平面円形を呈した掘り込みを1基検出した。この掘り込みは平成13年度の試掘調査で焼土遺構として確認されたものである。形態・規模とともにSI01に近似することから、壁穴住居跡の可能性も考えられるが、住居跡と判断する材料に乏しいことから機能不明の壁穴状遺構として報告する。略号はSXを用いることとする。

1号壁穴状遺構 SX01

遺構(図9、写真2-4)

本遺構は調査区中央部や北側のC3グリッド北西隅に位置している。遺構は北東方向に下る緩斜面の傾斜の緩くなる標高472.5m付近に立地し、そこは扇状地形の北端にあたり、遺構の北西側には埋没谷が入っている。遺構検出面はLIV上面であるが、LIVと色調が近似することからその検出は困難であった。ただし、試掘時のトレンチで面的な焼土の範囲が確認されていたため、より精密な検出を行い、炭化物の混入状況と若干の色調のくすみから遺構の範囲を認識した。重複する遺構は無いが、本遺構の南7mにSI01、南11mにSI02、北西4mにはSM01が所在する。

遺構内堆積土は13層に分層した。①～②は褐色土塊・褐色土粒・黒褐色塊・雲母等を含んでい



1号竖穴状遺構堆積土

- | | | |
|----------------------|----------------------|---|
| 1 10 YR 3 / 3暗褐色土 | 褐色土塊・褐色土粒・雲母多量 | 8 10 YR 4 / 3にぶい黃褐色土 黑褐色土粒少量・雲母微量 |
| 2 10 YR 2 / 3黒褐色土 | 褐色土塊・褐色土粒・雲母少量 | 9 10 YR 3 / 3暗褐色土 褐色土塊・炭化物粒少量・雲母微量 |
| 3 2.5Y 3 / 3暗オリーブ褐色土 | 褐色土塊・黑褐色土壤少量・雲母微量 | 10 10 YR 4 / 3にぶい黃褐色土 暗褐色土塊・炭化物粒少量・雲母微量 |
| 4 10 YR 3 / 3暗褐色土 | 褐色土塊・雲母・炭化物粒少量・燒土粒微量 | 11 10 YR 4 / 2灰黃褐色土 褐色土粒・雲母少量 |
| 5 10 YR 4 / 2灰黃褐色土 | 褐色土塊・褐色土粒多量・炭化物粒微量 | 12 10 YR 4 / 3にぶい黃褐色土 雲母微量 |
| 6 10 YR 4 / 3にぶい黃褐色土 | 黑褐色土壤多量・炭化物粒微量 | 13 7.5 YR 4 / 3褐色土 燒土粒・黃褐色土粒多量・燒土塊・炭化物粒少量 |
| 7 10 YR 4 / 3にぶい黃褐色土 | 黑褐色土粒少量・炭化物粒・雲母微量 | 14 10 YR 3 / 3暗褐色土炭化物粒・雲母少量・褐色土粒微量 |

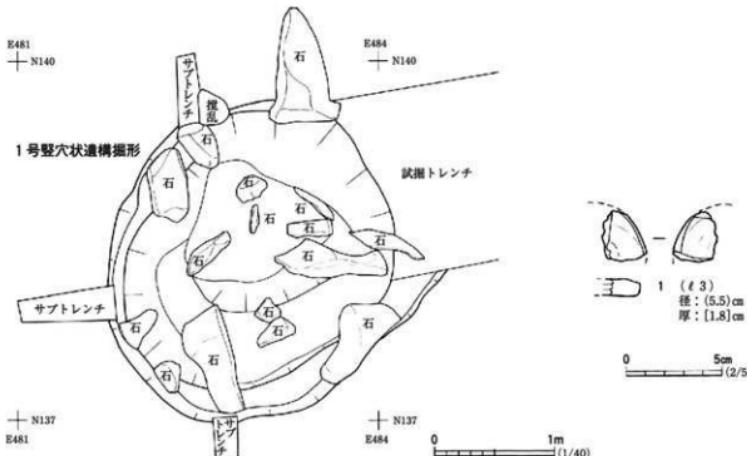


図9 1号竖穴状遺構、出土遺物

る。堆積状況から人為的な埋め戻しと考えられる。 $\ell 13$ は試掘時に焼土遺構として認識されたもので平面的には遺構のはば中央に位置する。焼土の観察からこの場所で火が焚かれて被熱したわけではなく、多量の焼土粒や焼土塊を褐色土等とともに廃棄したものであることが判明した。 $\ell 14$ は上面が平坦であることから、掘形への充填土であると考えられる。本遺構が住居跡であれば本層の上面が床面ということになろう。

本遺構の平面形は、北東側が試掘のトレンチで壊されているため断定できないが、遺存する部分から判断すると北東—南西方向に長い楕円形を呈すると考えられる。遺構の軸は長軸でとると、真北から東へおよそ 40° 傾いている。現状で確認できた規模は短軸が 2.8 m 、長軸が遺存値で 2.7 m 、検出面からの深さは $\ell 14$ の上面まで $10\sim23\text{ cm}$ を測る。周壁は北東側が失われているが、遺存する部分では西側で 70° 、北側で 75° 、南側で 63° の比較的急角度で立ち上がっている。南側については上部が崩れていることから角度はもっと急だった可能性がある。また、南東側では壁の位置に長さ 8 cm の花崗岩が露出しており、これを壁体として利用していた可能性がある。底面は $\ell 14$ 上面が平坦であることから、この面を底面として扱うこととする。掘形に暗褐色土を充填して構築されている。踏み締まりは確認できず、各所に長さ $20\sim80\text{ cm}$ 程度の花崗岩が露出している。底面上の施設としては $\ell 13$ が堆積していた北東—南西方向に長い楕円形の掘り込みが有るだけである。その規模は長軸 8 cm 、短軸 4 cm 、底面からの深さ 12 cm を測る。掘形は擂鉢状を呈しており、遺構の中央部よりやや北側が最も深い。 $\ell 14$ の上面からの深さは $5\sim20\text{ cm}$ を測る。

遺 物(図9)

本遺構からは縄文土器片2点と土製品1点が出土した。土器2点は風化が顕著で時期の判断は困難であることから、土製品のみを図示した。

図9-1は円盤状の土製品の破片と考えられるもので、 $\ell 13$ から出土した。推定径 $4\sim5\text{ cm}$ 程度で、表面は丁寧になでられている。胎土の特徴から縄文時代晩期の所産と考えられる。

ま と め

本遺構は長軸 2.8 m 、短軸 2.4 m 程度で、楕円形を呈すると考えられる竪穴状遺構である。平坦な底面や掘形を有すること、規模・形態がS I 0 1に近いことから、住居跡である可能性が高いと思われるが、炉跡や柱穴を有しないことや床面の踏み締まりが認められないこと等の理由から、住居跡と断定することができなかった。本遺構の所属時期は出土遺物が極めて少なく、その遺存状態も悪いことから断定できないが、土製品の胎土や周辺遺構との関係を考え合わせると、縄文時代晩期後半頃の所産と位置付けたい。

(笠井)

第4節 土 坑

反田B遺跡で確認された土坑は1基だけである。調査区の中央やや南側で、S I 0 2の南側に隣接して構築されていた。

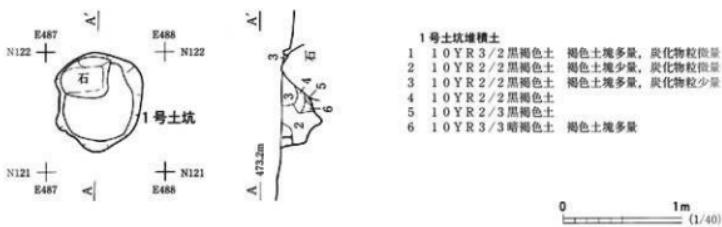


図10 1号土坑

1号土坑 SK01 (図10, 写真2-4)

本土坑は調査区中央や南側のD3グリッドに位置する。地形的には東方向へ下る緩斜面の傾斜の緩くなる標高473m付近に立地している。遺構検出面はLIV上面で、黒褐色の円形の範囲が確認できた。重複する遺構はないが、北側にすぐ隣接してSI02がある。

遺構内堆積土は6層に分層できた。黒褐色土を基調としており、褐色土塊や炭化物粒を含むが、人為的に埋めたものと考えられる。

本遺跡の平面形は不整な円形を呈している。規模は南北78cm、東西68cm、検出面からの深さは25cmを測る。周壁は南側および西側では75°程の急角度で立ち上がるが、北側及び東側では45~50°の緩い角度で立ち上がっている。また、北東の壁は地山の花崗岩をそのまま使用していた。底面はボル状に湾曲していた。

本遺構からは遺物が出土していないため、所属時期は不明であるが、SI02の長軸線上に乗っていることから、SI02の付属施設である可能性も考えられる。

(関)

第5節 土器埋設遺構

今回の調査では、土器埋設遺構が2基検出された。調査区北側と西端にあたる北東向き緩斜面にそれぞれ単独で存在する。土器はいずれも縄文時代中期末葉に位置付けられる。

1号土器埋設遺構 SM01 (図11, 写真2-5・8)

本遺構は調査区北側の中央、B3グリッド南西隅に位置する。地形的には北東に下る緩斜面の標高472.5m付近に立地し、北側谷に面している。遺構検出面はLIV上面で、黒褐色土の円形の範囲が確認できるとともに、埋設土器の割れ口が露出していた。重複する遺構は無く、南西1.6mに同時期のSM02が位置する。上面が削平を受けているため、土器の上部が失われている。

掘形は長径50cm、短径34cm、深さ54cmを測る長椭円形を呈し、南北側では土器の幅とほぼ同じであるが、南東側と北西側ではやや広めに掘り込まれている。堆積土は2層(7・8)に分層でき、

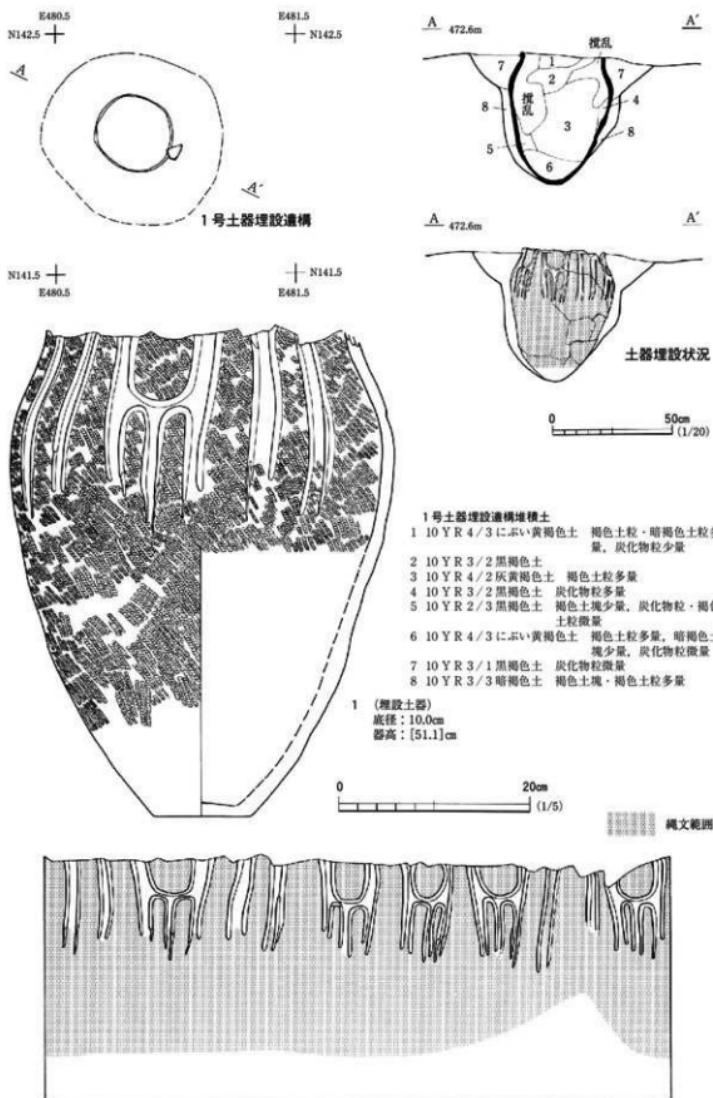


図11 1号土器埋設遺構、出土遺物

堆積状況と混入物の状態から土器を安定させるための埋土であると考えられる。

土器は正立の状態で埋設されていた。土器内の堆積土は6層（ $\ell 1 \sim 6$ ）に分けられ、黄褐色系の土が柱痕のような堆積を示すが、本根による搅乱も顕著に見られ、これらが人為的なものか自然的な堆積か判断できなかった。

図11-1は埋設されていた土器で、口縁部を欠く深鉢である。比較的小さく平坦な底部から内湾しつつ立ち上がり、胴上位で最大径となり、口縁部に向かって内傾するが、資料の上端で外反に転じることから、口縁部は直立するか、弱く開くものと推察できる器形を呈する。高さ50cm以上、最大径40cmを測る大型品である。文様は沈線によって描かれ、下部が開放する小さな懸垂区画文2つと、その上の梢円文、さらにそれらを囲う大きな懸垂区画文をモチーフの単位としていると考えられる。胴部上半の器面周囲にこのモチーフの単位が5箇所描かれている。また、モチーフの割り付け上、隙間が空いた部分には、大きな懸垂区画文のみが描かれている。胴部上半では単節繩文を施した繩文部と無文部を対置させ、胴部下半では底部付近を除く全面に単節繩文を施している。本資料は文様の特徴から繩文時代中期後葉の大木9式土器の新段階に位置付けられよう。（笠井・国井）

2号土器埋設遺構 SM02（図12、写真2-6・8）

本遺構は調査区西端の中央、C1グリッドに位置する。地形的には北東方向に下る緩斜面で、北側谷部に面した、標高4.75m付近に位置する。本遺構の周囲は地山の花崗岩が露出しており、岩塊を避けるように作られていた。遺構検出面はLIV上面で、黒褐色土の円形の範囲が確認できるとともに、埋設された土器の割れ口が露出していた。重複する遺構は無く、北東1.6mに同時期のSM01が位置する。上面が削平を受けているため、土器の上部が失われている。埋設されていた土器は上下の2個体で、下部の土器2が斜位に置かれ、その上から胴部を輪切りにした土器1が正立の状態で出土した。

掘形は長径4.9cm、短径3.8cm、深さ2.2cmを測る不整梢円形を呈する。遺構内堆積土は7層に分かれ、土器の外側に入る $\ell 6 \cdot 7$ はLIV塊を多量に含む人為堆積土と判断され、土器の中には $\ell 6$ と同質な土が入るが、この土は人為的なものか自然的な堆積か判断できなかった。

図12-1（土器1）は、深鉢の胴部中央部のみが遺存するものである。胴が膨らみ、頭部で弱く括れて口縁部が開くと推察できる器形を呈する。地文は繩文で、縱位回転を基調とする単節繩文が施されている。地文上には3条1単位の沈線で、懸垂区画文を描いている。区画外は無文である。同図2（土器2）は口縁部と底部を欠く深鉢である。底部から直線的に立ち上がり、胴上部に最大径を持ち、口縁部方向へ内傾する器形を呈する。胴部には隆線による渦巻文が描かれている。隆線は、土器の器面上に粘土を貼付けていたため、この部分での剥落が著しい。隆線貼付後、単節繩文を施し、隆線の両脇をなでている。頭部は無文であるが、一部に縱位の隆線とそれに沿うと推測される沈線が認められる。

これら遺物は、その文様の特徴から繩文時代中期後葉の大木9式土器と考えられる。（笠井・国井）

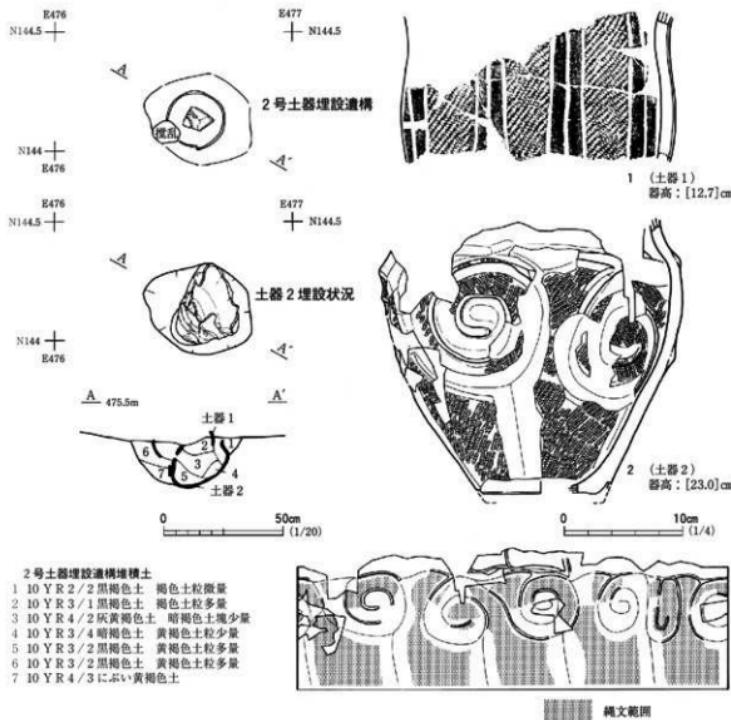


図1-2 2号土器埋設遺構、出土遺物

第6節 遺物包含層

本遺跡では調査区の北側、A2・3、B1~3グリッドにかけて埋没谷（図1-3、写真2~7）が存在し、これを北側谷部と呼称することにする。検出面はLIV及びLVで、埋没谷は調査区内では南西から北東方向へ延びる西部の沢と、南から北に延びる東部の沢からなり、「イ」字形の平面形を呈している。西部の沢は本遺跡の西側の丘陵を開析した支谷に端を発し、本遺跡の東側に所在する南北方向の主谷と合流しているようである。調査区内での規模は、長さ約20m、幅約4~5m、検出面からの深さ70~90cmを測り、断面形は浅い「U」字形を呈している。東部の沢はB2グリッドの南端中央付近の旧湧水点に端を発し、北側へ下ってA2グリッドの南東隅付近で西部の沢と合流している。規模は、長さ約16.5m、幅2.5~3m、検出面からの深さ90~120cmを測り、断面形は

底のやや平坦な「V」字形を呈し、西部の沢より急峻である。また、東部の沢は長さ1~4m程度の地山の花崗岩塊が露出し、西部の沢とは著しく異なる景観を呈している。

この埋没谷の堆積土はL III a~gの7層に分層できた。この内、L III a・b・e・f・gの5層が遺物を包含していた。ただし、L III fを除くとまとまった量の遺物が出土する層は認められない。このため5層すべてを遺物包含層とするには問題が多いものと思われるが、層位ごとに特徴的な遺物の出土状況を示すものもあることから、本節ではこれらの層を遺物包含層として扱う。また、L III c・dは無遺物層であるが、第1節で説明していないため、本節で説明することとする。

包含層の範囲と堆積状況(図13・14、写真2-7)

L III aは黒色土を基調とした腐食土層である。この層が堆積した時点では北側谷部のほとんどは埋没していたと考えられ、東西の沢の谷筋と関係なく両方の沢にまたがるように堆積している。堆積の厚さは30~40cm程度であるが、最も厚いA2グリッドの南東隅付近で約80cmを測る。L III aは堆積状況から調査区西側の支谷より流れ込んだものと考えられ、出土遺物の特徴から、少なくとも縄文時代晚期後葉以降の堆積と考えられる。

L III bは黒褐色土を基調とした土層で、西部の沢に沿うように広がり、厚さは最大で30cm程度である。本層が堆積した時点では、本谷は埋没しきっていなかったものと思われる。遺物は縄文時代前期の土器片1点、晩期の土器片20点が出土したが、図示するにはいたらなかった。出土遺物の特徴から、縄文時代晚期後半以降の堆積と考えられる。

L III cは黒褐色土を基調とした粘質土層で、L III bとほぼ重なる区域に堆積し、厚さは最大で30cm程度である。遺物は出土せず、堆積時期は不明である。

L III dは褐灰色土を基調としたシルト質土層で、西部の沢に堆積し、厚さは20~30cmである。地下水の影響か一部酸化して赤くなっている。なお、遺物は出土せず、堆積時期は不明である。

L III eは黒色土を基調とした粘質土層で、西部の沢に沿って堆積しており、厚さは南西側では20~30cm、北東側の最も深い部分で70cmを測る。L III eは北側谷部の西部の沢では最下層に堆積する土層である。L III fやL III gと重複していないことから、これらの層との新旧関係は不明であるが、出土遺物がすべて縄文時代早期の所産であることから、それらの層より古い時期の堆積である可能性が高い。

L III fは黒褐色土を基調とした土層で、北側谷部の東部の沢にのみ堆積しており、西部の沢には堆積していない。このことから、本層の堆積時点で西部の沢はほぼ埋没していたことが推定できる。厚さは30~90cm程度である。L III fからは比較的まとまった点数の縄文時代晩期の土器片が出土していることから、堆積途中に土器等の廃棄の場になっていた可能性が考えられる。L III fの堆積時期は縄文時代晩期後半からそれほど下らない時期であろう。

L III gは黒褐色土を基調とした粘質土層で、東部の沢の底面に沿って堆積している。厚さは最も厚い部分で30cm程度である。L III gは北側谷部東部の沢に最初に堆積した土層であり、底面に露出し

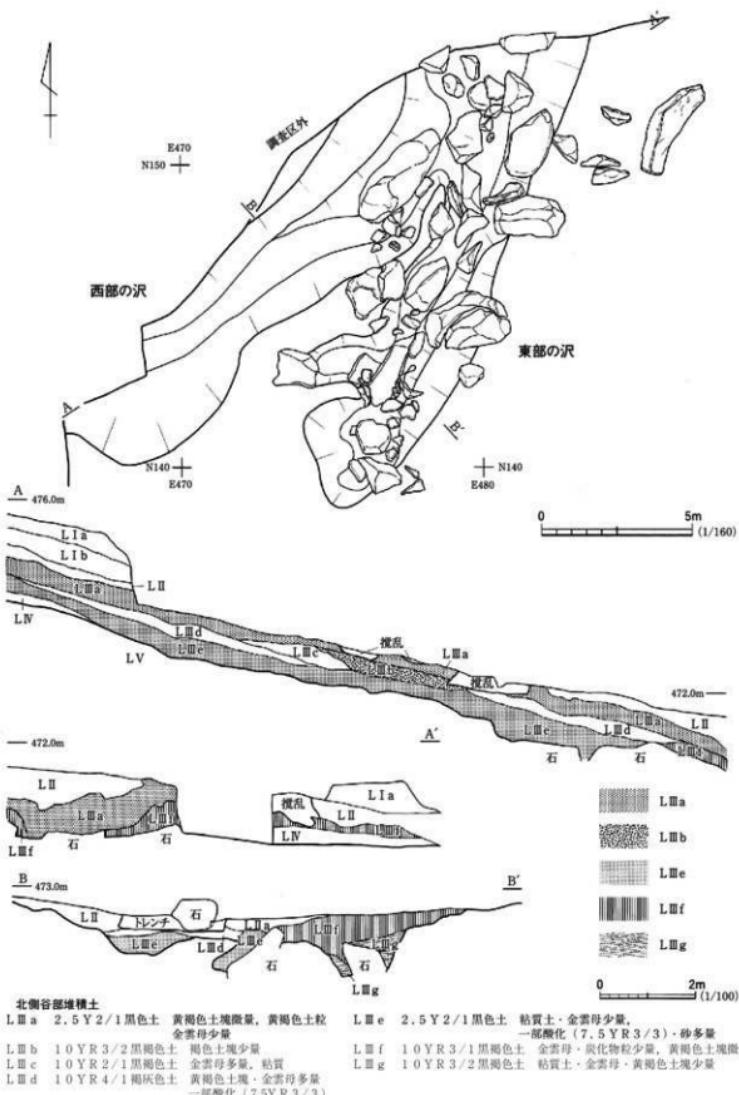


図13 北側谷部遺物包含層

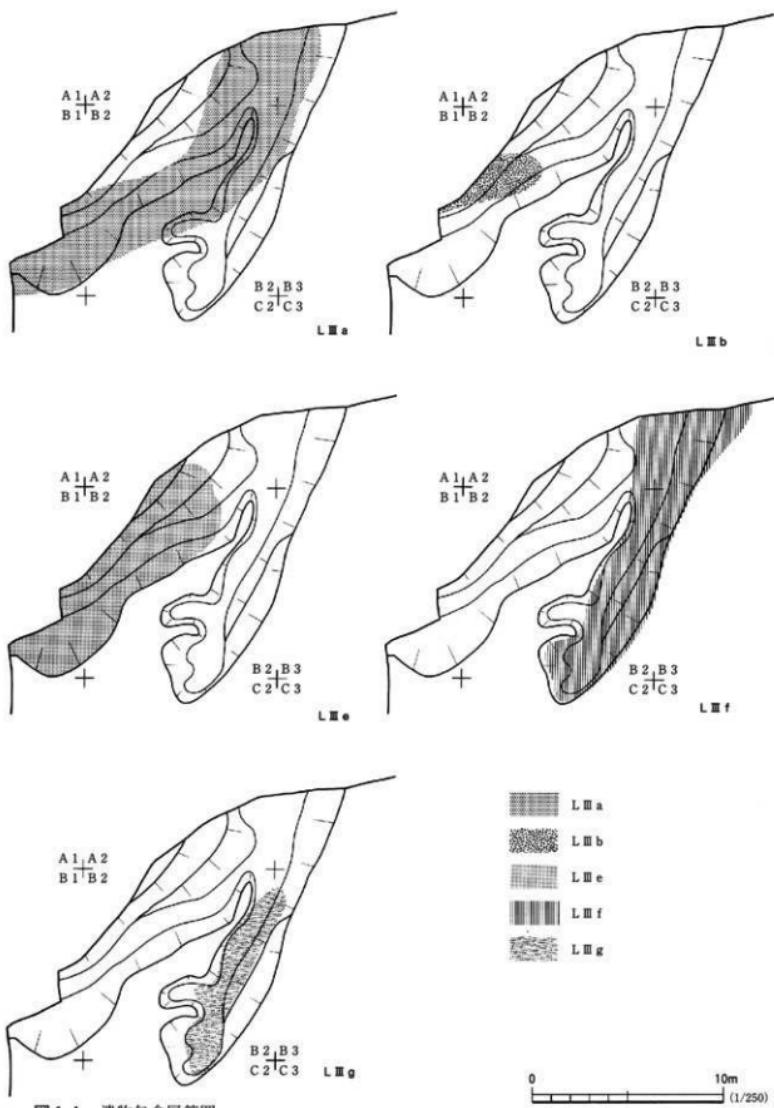


図14 遺物包含層範囲

た花崗岩の岩塊の隙間にも入り込んでいた。出土遺物はわずか6点であるが、すべて縄文時代中期後葉の所産であり、L III gの堆積時期は縄文時代中期後葉以後で、晚期後半よりも前であると/orこと/ができるよう。

(笠井)

遺 物

L III a 出土遺物 (図1-5)

L III aからは縄文時代早期7点、中期42点、晚期43点の土器片と石器1点が出土した。遺物は早期・中期・晚期の遺物が混ざり合った状態で、B 2 グリッドの東側とB 3 グリッドの西側に集中して出土した。この部分が屈曲の外辺にあたることから、上位から流れてきた遺物がこの部分に溜まつたものと推定される。

図1-5-1~4は縄文時代晚期の土器片である。1~3は口縁部で、1は精製の鉢、2・3は粗製の深鉢であろう。1は胴部が内湾気味に直立し、口縁部が弱く開く器形で、口縁端部は、小規模な波状を呈し、波状の単位は確認できるだけで3単位である。文様帶は沈線区画した横位縄文帶の下にヘラ状工具で三叉文と入組文を描いている。大洞B式と考えられる。2・3はやや内傾する器形で、2の端部は面取りされている。内面はともにナデ、外面は2が撲糸文、3が条痕文である。4は半精製の鉢の胴部片であろう。算盤珠状の形状を呈し、外面上部には擦痕と縄文、下部には条痕文を施した後に縄文を部分的に施している。上部に幅4~5mm程の浅い沈線が横位に走っている。

同図5は縄文時代早期中葉の深鉢の底部である。乳房状の尖底を呈し、表面が滑らかで、胎土に雲母を少量含み、明るい褐色の色調であることから、常世式土器と考えられる。

同図6は中期後葉の大木9式土器の深鉢である。キャリバー形土器の口縁部片で端部に突起を持ち、口縁部文様帶は隆凹線で梢円状や渦巻き状のモチーフを作出している。モチーフ内には単節縄文を充填している。

同図7は黒雲母花崗岩製の磨石である。偏平な格円碟を使用し、すべての面に擦痕が認められ、表裏の広い面の中央に敲打痕をもつ。

L III e 出土遺物 (図1-5, 写真2-8)

L III e出土の遺物は縄文時代早期の土器片9点だけ、B 2 グリッド西側に集中していた。

図1-5-8・9ともに胎土に纖維を含み、地文に貝殻条痕文が施された深鉢である。8は口縁部から胴部にかけての資料で、口径16cm程度の小型品である。胴部が底部方向から弱く内湾気味に開き、口縁部が外反する器形を呈する。口縁端部は面取りされず、ヘラ状工具により刻み目が施されている。口縁部文様帶は区画されず、ヘラ描き沈線を縦位に連続して施した後、同様の沈線を斜位に連続して施している。地文の貝殻条痕文は外面が横位に、内面が口縁部付近で横位に、胴部は縦位に施されている。9は胴部片で、破片の上部が外反しかけていることから、すぐ上が口縁部であったものと考えられる。破片の中位には2条の刺突列が施されている。地文である貝殻条痕文は外面では横位に施された後、刺突列より上部に限り縦位に施され、モチーフ化している。内面は縦位から

斜位に施されている。これらの土器はその特徴から、縄文時代早期後葉の条痕文土器群の後半に位置付けることができよう。

L III f 出土遺物 (図16, 写真2-8)

L III f からは縄文時代中期17点、後期3点、晩期348点の土器片と石器4点が出土した。遺物は各時期の遺物が混ざり合った状態で出土したが、そのほとんどが晩期のもので、出土位置は堆積土範囲の南側に集中していた。L III f が堆積している北側谷部の南側には縄文時代晩期の住居跡2軒が検出されていることから、L III f 出土の遺物はこの住居跡に居住していた人々によって廃棄された可能性が考えられる。

図16-1~3・6は縄文時代中期後葉の所産と考えられるものである。1・2は口縁部片である。1は波状口縁の頂部で、横位に凹線が施されている、2はやや内湾する形状のもので、外面に単節縄文が施されている。3は頸部片で隆堤及び四線により渦巻及び稍円形のモチーフが描かれ、モチーフ内には単節縄文が充填されている。6は深鉢の胴部片で、地文である単節縄文の上に波状文を描いている。

同図4・5・7~24は縄文時代晩期の所産である。4・5は大洞A式の壺の胴部片で、同一個体の可能性が高い。内湾する器形で、最大径の部分に横位の沈線が2条引きかれている。4ではこの沈線上に瘤状突起が貼り付けられ、そこへ上方から2条の沈線が垂下するとともに、垂下する沈線は横位沈線と交わる部分で幅広い凹線となり直角に交わっている。5には瘤状突起は認められないが、凹線化した沈線が垂下して横位の沈線と直角に交わっている。7は大洞B式の精製深鉢で、4片からなり接合しなかつたが、同一箇所から出土しており、胎土・色調・厚み等から同一個体と判断できることから、図上復元したものである。器形は内湾しつつ弱く聞く胴部をもち、頸部で一時内傾するが強く屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部には刻みが施されている。胴部上半は文様帶となっており、ここには沈線で入組三叉文が描かれている。さらに、この文様帶の直下には細かいLR単節縄文が施され、さらに、その下は無文となっている。器面は内外面ともに丁寧に磨かれていた。8~11は口縁部片である。8は大洞C2式の壺と考えられるもので、頸部がほぼ垂直に立ち上がり、内外面に明瞭な段をもって屈曲し、口縁部が外傾する器形を呈する。口端部には肥厚する三角形の突起が認められる。9~11は深鉢・鉢であろう。9は外傾し、外面に2本の沈線が横位に巡る。10~11は内傾するもので、口縁外面に粘土帯を貼り付けて、折返し口縁を形成している。端部は薄く作られている。地文は10が撲糸文、11が条痕文で施文具が異なるが、口縁部が横位、胴部が竪位の線を意識して施しているようで、見かけ上はよく似ている。12~19は胴部片である。12・13・18は精製土器と考えられるもので、12は壺、13は鉢か台付鉢であろう。12は沈線のみで文様が描かれており、大洞C2~A式と考えられる。13は7条の横位沈線が認められる。大洞A式であろう。18は沈線と磨消縄文により文様帶を構成するもので大洞A式と考えられる。14~17・19は半精製あるいは粗製土器と考えられるもので、14・15は壺か鉢、16・17は鉢か深鉢、19は深鉢であろう。14・17は地文に細かい単節縄文を施しており、破片の上端には2条の横走する沈線が描かれている。

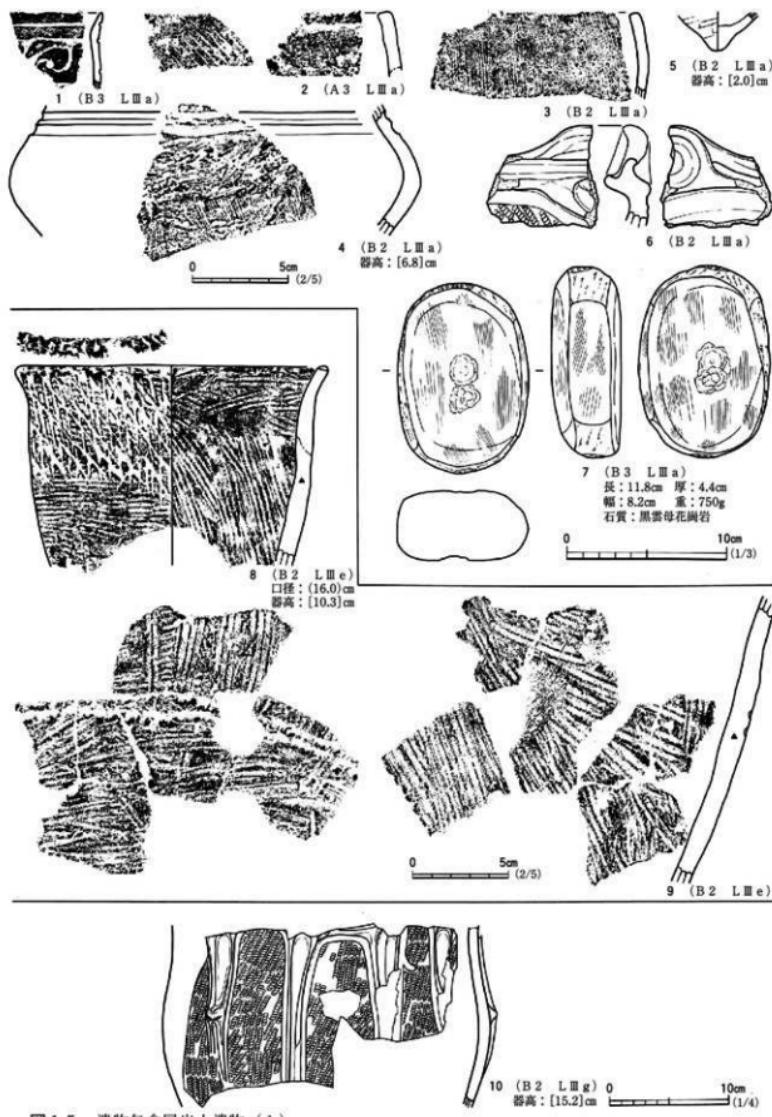


図15 遺物包含層出土遺物（1）

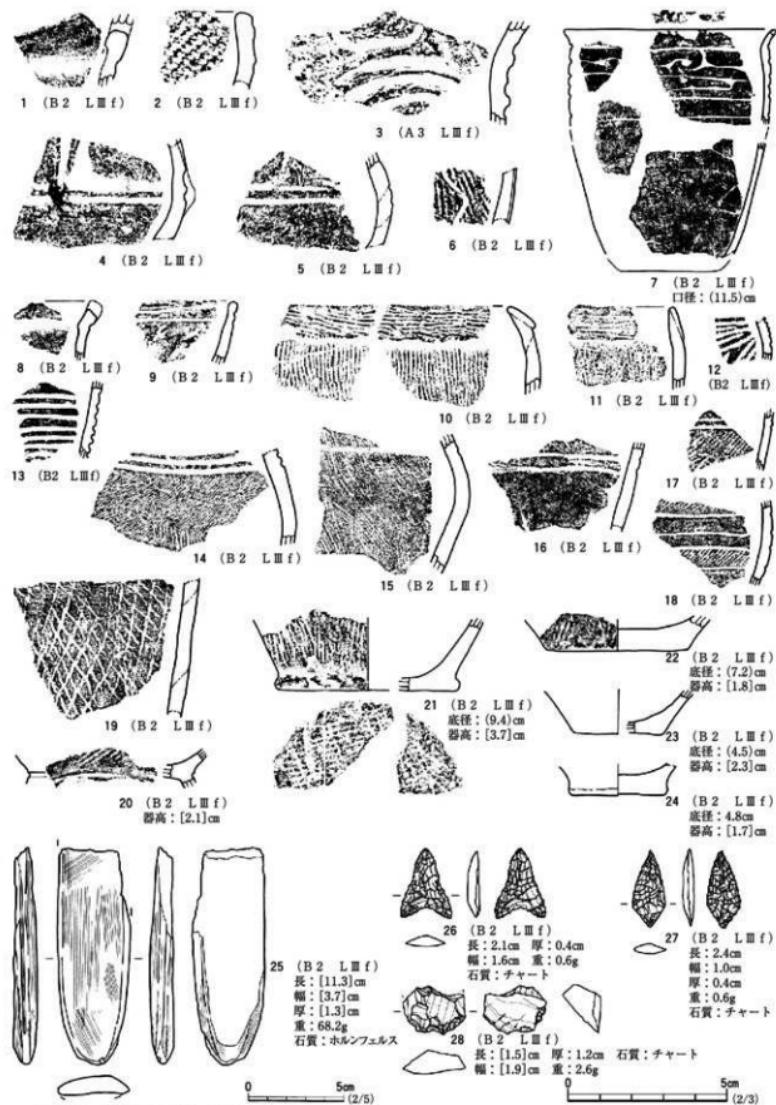


図16 遺物包含層出土遺物（2）

14では上の沈線が右端で上方に分岐しており、さらに上位で意匠文を構成していた可能性も考えられる。15は条痕、16にはミガキが施されており、15は1条、16は2条の横位沈線を雜に引いている。19には網目状撲糸文が施されている。20は台付鉢の鉢部と台部の接合部である。外面の屈曲部に沈線が施され、風化顯著で施文原体の種類は不明であるが、体部側には縄文が施文されている。21～24は底部である。21は外面に縦条体条痕が施されたもので、底面には網代痕と木葉痕の両方が認められる。網代痕が最初につき、その後木葉痕がついたようである。外面下端が外方に突起している。22は撲糸文が外面に施されているが、風化が顯著である。23・24は小型のもので、両資料とも無文である。外面は丁寧になでられていた。

同図25～28は石器である。25は石剣と考えられるもので、ホルンフェルスの細長い自然礫を素材としている。一端が折れており、一方の面は広く剥離している。また、側面には沈線が認められる。剥離面以外には擦痕が顯著に残っている。26・27はチャート製の石鏃で、26は凹基鏃、27は尖基鏃である。両資料ともに細かく調整剥離が施されている。形状から縄文時代晩期の所産とみられる。28はチャート製の石鏃未製品で、節理により先端部を欠損している。

L III g 出土遺物（図15）

L III g から出土した遺物は縄文時代中期後葉の大木9式と考えられる土器片6点のみであるが、これらの遺物はすべて北側谷部東部の沢の東側肩近くから出土した。

図15-10は大木9式の深鉢の胴部付近である。胴部最大径を破片の中程にもち、胴が膨らむ器形をしている。沈線と低い隆帯とにより、縱長の梢円か弧状のモチーフを作出し、モチーフ内には単節縄文を充填している。また、モチーフ間の隆帯で区切られた縦に細い空間には瘤状の突起を貼り付けている部分もある。

(笠井)

第7節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外出土遺物は縄文時代早期3点、前期25点、中期183点、後期111点、晩期205点の土器片と3点の石器である。遺物は調査区の東側に偏って出土する傾向があり、特に、地形上傾斜の緩いC3・4、D3・4グリッドに遺構外出土遺物の5.6%が集中し、グリッド設定前の表土採集資料も含めるとこの比率はさらに上がると考えられる。これは地形が東側に下っており、斜面上位から遺物が流れてきたことに起因すると考えられる。時期別の遺物の出土状況にも偏りが認められる。比較的まとまった点数がある縄文時代中期と晩期を例にとると、中期の遺物に関しては先述した遺構外出土遺物が集中するC3・4、D3・4グリッドにその9.0%が集中しており、その他の部分ではまとまった出土が認められなかった。これに対し、晩期の土器は調査区東側のC・D4グリッドで多く出土する傾向は認められるが、調査区北側のB2・3グリッド、南側のE3・4グリッドでもある程度まとまった点数が出土している。この分布状況をみると、当該期の住居跡を中心に遺物がその周辺に廃棄されたかのようである。早期・前期・後期の遺物については出土点数が極めて少

ないことから分布の偏りとするには問題があると思うが、参考までに述べると、早期は調査区北西側のB・C 4 グリッド、前期は遺物が集中する C 4, D 3・4 グリッド、後期が調査区南側の E 3 グリッドで出土している。なお、試掘時に出土した資料の中で特徴的な資料3点（図17-7・8・18）もあわせて掲載した。試掘時のトレンチの位置は 1 2 トレンチ（以下 T と記す）が調査区外 A 2 グリッドの北側、1 6 T が D 4 グリッド、1 9 T が D 2・3 グリッドに位置している。以下、形状と特徴を判別できるものを図17～19に示し、土器については時期ごとに説明を行う。

縄文時代早期の土器（図17）

図17-1は口縁部片で、弱い波状を成すものと思われる。端部は面取りされ、鋭利な工具で斜めに刻み目を加えている。外面に2条一単位の貝殻腹縁圧痕を重ねて、「V」字状のモチーフを描いている。2・3は胴部片である。2には幅4mm程の太い沈線が斜位に施され、3には半截竹管状の工具で横位に刺突列を形成している。また、刺突列の下部に接してヘラ状工具による鋸歯状の沈線が認められる。2が早期中葉の田戸下層式、3が常世式に比定され、1は田戸上層式であろうか。

縄文時代前期の土器（図17）

図17-4は口縁部片である。頂部の丸い波状口縁で、外面には4条一単位の櫛状工具により波状の沈線を横位に3段描いている。同図5は胴部片で、3条一単位の横位の沈線が施されている。両資料ともに胎土に纖維を含んでいる。両資料は前期中葉の大木2a式に比定されよう。

縄文時代中期の土器（図17・18）

図17-6・7は装飾突起である。6は波状口縁の波頂部に付けられた渦巻き状の突起で、7は口縁部に付けられた環状の突起である。6・7ともに大木8b式の範疇でとらえられ、7が若干古い様相を残している。

図17-8～15、図18-10は深鉢・鉢の口縁部片である。図17-8は内湾する波状口縁で、地文に単節縄文を施した後、隆帯とその両脇の沈線により梢円形や渦巻き状のモチーフを口縁部の曲線に合わせて描いている。隆帯は剥落している部分が多い。同図9・12～15はキャリバー形土器と考えられるもので、内湾する器形である。9は隆帯と沈線で口縁部文様帶を区画し、文様帶内には隆帯でクランクもしくは弧状のモチーフを作出し、隆帯に沿って縄圧痕文を施している。また、文様帶の下部には瘤状突起が付けられ、文様帶の上部からこの突起に垂下させて3本の粘土紐を貼付している。12は沈線と充填縄文で弧状のモチーフを描いており、13・14は隆帯と凹線で梢円状あるいは渦巻状のモチーフを描き、梢円部分には単節縄文を施している。15は比較的大きめの口縁部破片で、端部は面取りされており、口縁部文様帶は太い隆帯により上下を区画し、単節縄文を充填している。口縁部文様帶には渦巻状の貼付文があったと思われるが、剥落している。また、頭部文様帶は無文である。同図10・11は内湾せず、開く器形である。両資料とも波状口縁を呈し、10は無文、11は隆帯と沈線で文様を描いている。図18-10は口縁部が内傾するものである。口縁端部に2条の沈線を巡らしている。外面には単節縄文が施されている。土器の特徴から、図17-8・9・15、図18-10が大木8b式、図17-10～14は大木9式に位置付けられよう。

図17-16～19、図18-1～7は深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。図17-16は口縁部近くであろうか。外反して開くが、上部で内側に屈曲している。半截竹管状工具により破片の上部と下部に横位の平行沈線が描かれている。上部の沈線は口縁部文様帶の下端区画にあたると考えられ、わずかながら上方へ延びる粘土帯が認められる。横位の沈線間には地文の単節繩文と波状の沈線が施されている。同図17は内湾する器形で、外面に綫長の刺突が施されている。同図18は単節繩文を地文とし、3条の垂下する直線的な沈線と1条の波状の垂下する沈線を描いている。同図19は単節繩文を地文として施した後、隆帯と凹線による懸垂区画文を描いている。隆帯は上部には梢円形のモチーフが認められる。図18-1・2は地文の単節繩文を施文した後、凹線により懸垂区画文を描き、凹線間の縦に細長い部分は無文である。同図3～6は沈線で梢円形のモチーフを描いているもので、4・5にはモチーフ内に単節繩文を充填している。同図7は単節繩文が施されただけのものである。土器の特徴から、図17-16～19は大木8b式、図18-1～7は大木9式に位置付けられる。

図18-8・9は深鉢の底部である。ともに2～3本の沈線が垂下しており、大木9式土器に位置付けられる。

縄文時代晩期の土器（図18、写真2-8）

図18-11は半精製の鉢である。算盤珠状の胴部から頸部で一度括れ、内湾しつつ開く大きめの口縁部をもつ器形である。口縁部は無文で、口縁部下には3条の沈線が横位に施されているが、一番上の沈線は途切れ、そこに二番目の沈線が入り込んで「π」字状になっている。頸部文様帶下には単節繩文が施されている。大洞A式の所産と考えられる。

同図12～16は口縁部である。12・13は半精製・精製の鉢か台付鉢と推定されるものである。12は内湾気味に開く器形で、端部は内削ぎ状であり、先端に刻み目が施されている。外面には3条の横位沈線が施され、胴部には単節繩文が施されている。13は直線的に開くもので、端部に半円形の突起がついている。外面には単節繩文が施され、沈線で三叉文が描かれている。14～16は粗製の深鉢であろう。14・15は直線的に外傾し、16は内湾して内傾する。14の外面には網目状撚糸文が施されており、口縁直下は施文の方向を変えている。15は外面に条痕が施され、口縁端部には指頭圧痕が上位から施されている。16は口縁部外面に粘土帯を貼り、折り返し口縁を形成している。粘土帯上には横位に撚糸文を施している。胴部は摩滅して地文不明である。土器の特徴から、多くは大洞C2～A式の時期の所産と考えられるが、13はそれ以前の大洞B式に位置付けられよう。

同図17～23は頸部から胴部かけての破片である。17は壺か括れの強い深鉢の頸部と考えられ、頸部で「く」の字に屈曲して口縁部は開いている。屈曲部のやや下には断面三角形の小さな隆帯が貼り付けである。地文は施されず、外面ともになだらかである。18～20は胴部片で、18は横位の沈線が3本施され、沈線下に網目状撚糸文が施されている。19は単節繩文を施文した後、2～3本の横位と斜位の沈線を施している。20は単節繩文を施したもので、破片中央付近には結節文が認められる。21～23は櫛状の工具で、横位ないしは縦位の集合沈線を描いているものである。これらの土

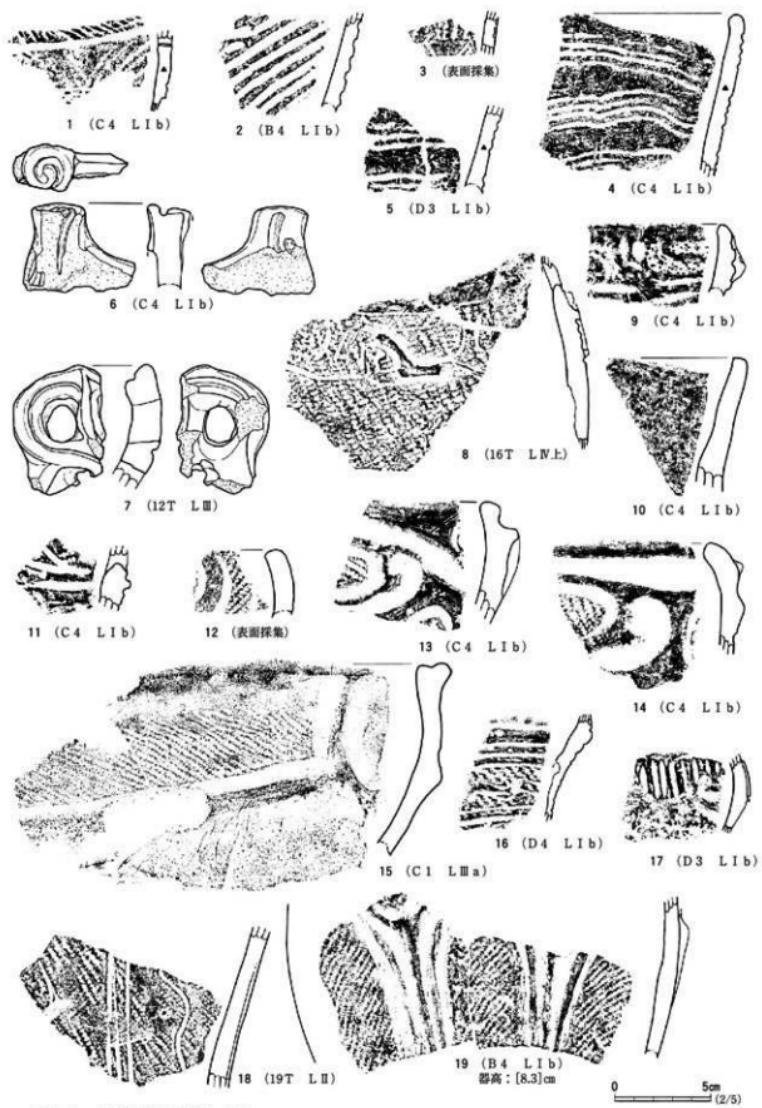


図17 遺構外出土遺物（1）

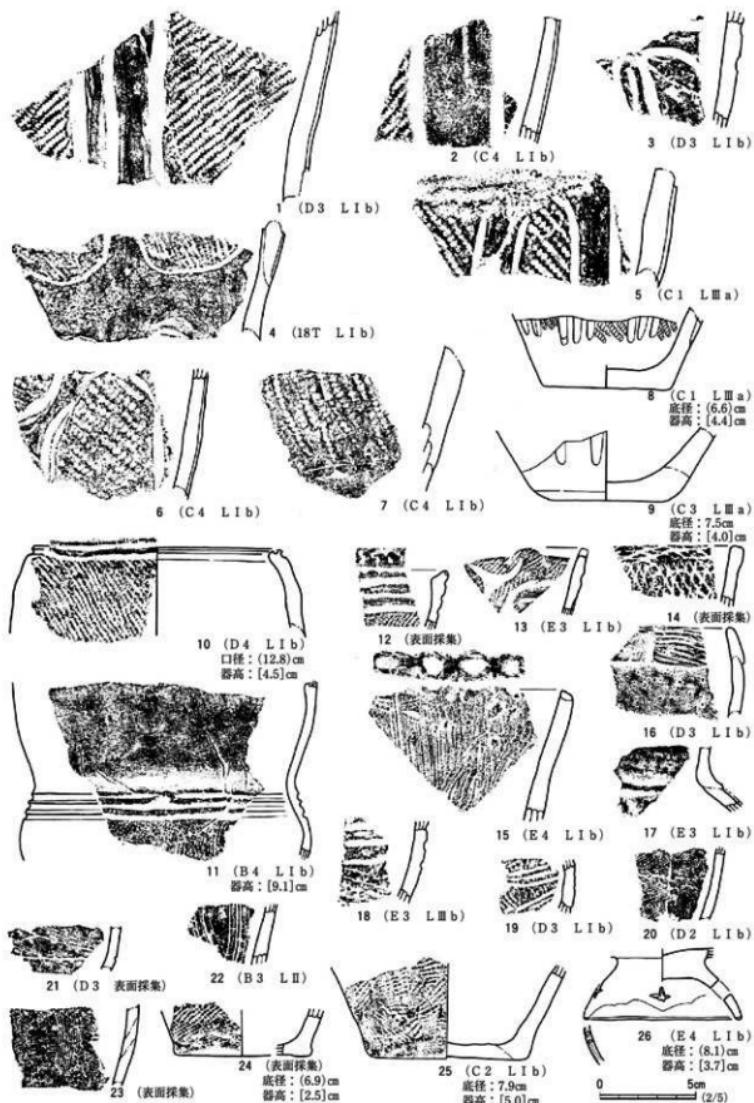


図18 遺構出土遺物（2）

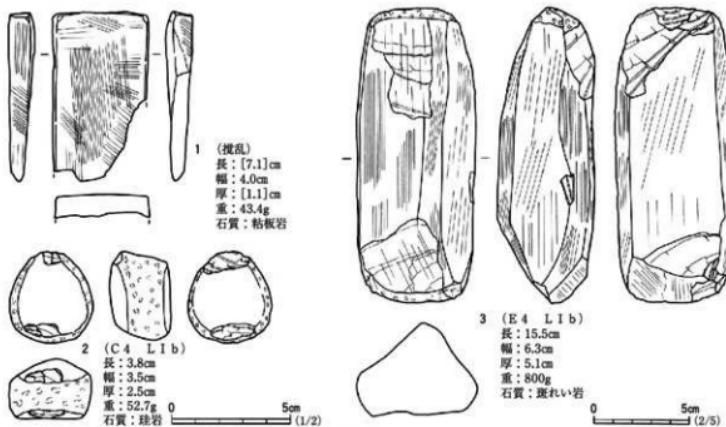


図19 遺構外出土遺物（3）

器はその特徴から大洞C 2～A式の時期の所産と考えられる。

同図24・25は深鉢の底部片である。両資料ともに外面に単節縄文が施されている。

同図26は内湾気味に立ち上がる台付鉢の台部である。外面は丁寧になでられており、端部には2個一对の刻み目が認められる。また、推定4箇所に十字形の透かし孔が開けられている。大洞C 2～A式の時期の所産と考えられる。

石 器（図19）

図19－1～3は石器である。1は粘板岩製の砥石と考えられる。本遺跡では唯一の近世以降の所産であろう。2は珪石の敲石で、広い側の両面に滑らかな自然面を残すが、側縁全体に敲打痕が認められる。敲打時の衝撃で縁辺際の一部が剥離している。3は斑れい岩製で多面体の磨石である。棒状の礫を使用し、両端に敲打痕が認められる。敲打時の衝撃で両端の縁には剥離面が認められる。磨耗痕はほぼ全面に認められ、剥離面の上にも及んでいる。

（笠 井）

第3章 まとめ

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡2軒、堅穴状遺構1基、土坑1基、土器埋設遺構2基である。堅穴住居跡・堅穴状遺構は縄文時代晚期、土器埋設遺構は縄文時代中期の所産である。また、調査区北側には縄文時代早期から晩期にかけての遺物包含層が形成された埋没谷が所在し、ここから多くの土器片が出土した。遺物は縄文土器・石器・土製品で、縄文土器は早・前・中・晩期の土器が認められ、中期と晩期の資料が主体をなしている。

本遺跡において、縄文時代早・前期の遺構は検出されておらず、土器だけが出土している。出土点数も遺構が検出された中・晩期と比較すると、極端に少ない。縄文時代早・前期の土器片は北側谷部の遺物包含層及び遺構外から出土した。遺物は大きく早期中葉・末葉、前期中葉に分けられ、早期中葉のものには田戸下層・田戸上層・常世式土器とみられる資料が、早期末葉のものは茅山上層式土器に併行すると考えられる資料が、前期中葉のものは大木2a式土器が認められた。早期末葉の遺物を除く土器片の多くは、遺構外及び遺物包含層の最上層であるLIII aから出土し、調査区の西側に位置する支谷の上部から土砂とともに流入したものと思われる。

縄文時代中期は本遺跡に遺構が形成された時期であり、土器埋設遺構と遺物包含層及び遺構外から多数の大木8b～9式土器が検出された。土器埋設遺構は北側谷部に面して2基検出された。両遺構間は1.6mの距離があり、ともに住居跡に伴わず、単独で存在している。東側の1号土器埋設遺構は高さ50cmを超える大型の深鉢が正立した状態で設置され、2号土器埋設遺構は2個体分の土器が上下に埋設されていた。これらの埋設土器は文様の特徴から大木9式土器に位置付けられる。

大木9式期の土器埋設遺構は、後続する大木10式期のものと比較すると、県内でも検出例が少なく、飯館村上ノ台A遺跡（山内他1990）、橋葉町鍛冶屋遺跡（能登谷他2001）等で検出された数基が知られるのみである。上ノ台A遺跡では4基の土器埋設遺構が互いに8～15m程の距離をおいて位置し、1基を除いて同時期の住居跡に囲まれるような位置関係にあり、土器埋設遺構が居住域の中に存在したことが窺われる。土器の埋設形態は3基が正立し、1基が横臥していた。鍛冶屋遺跡例は周囲に同時期の住居跡が検出されず、谷に面した立地条件等が本遺跡例と近似するが、土器の埋設形態は横臥で本遺跡例と異なる。これらの例から、本遺跡の土器埋設遺構を見てみると、埋設形態に関しては上ノ台A遺跡例が近く、集落との関係から考えると、鍛冶屋遺跡例が近いといえる。ただし、遺物包含層及び遺構外から比較的まとまった量の当概期の土器片が出土していることを考えると、近辺に集落が存在した可能性は高いといえよう。なお、1号土器埋設遺構出土土器内の堆積土について、水洗いを実施したが、骨片等は検出されず、直接その性格を知ることはできなかった。

縄文時代晩期は本遺跡の調査区内において集落が営まれた時期である。遺構は堅穴住居跡2軒、

堅穴状遺構1基が検出され、遺物包含層及び遺構外から大洞C2式土器を中心にB式及びA式土器が出土した。また、磨石や石剣等の石器も当概期の所産と考えられる。遺構は、調査区西側の支谷から排出した土砂により形成された東方に下る扇状地上に立地し、東方には水田に利用された谷底低地が南北方向に延びている。住居跡はともに楕円形を基調とした平面形をしており、床面の中央付近には石囲炉が設置されていた。規模は、1号住居跡が長径3m程、2号住居跡が長径5m程を測る。規模の違いに起因するのか、小型の1号住居跡は柱穴を持たないのに対し、2号住居跡は4箇所に柱穴を持っていた。出土遺物は大洞C2式土器に比定され、遺構間で出土土器が接合することから、両住居跡はほぼ同時期の所産と考えられる。住居跡の北東に位置する1号堅穴状遺構は、長軸2.8m程の楕円形をした掘り込みで、掘形を持ち、1号住居跡に形状及び規模が近似するもので、住居跡である可能性も考えられる。また、北側谷部は捨て場であったのか、当概期の遺物包含層も形成されていた。

当概期の集落跡には、飯館村羽白C遺跡（鈴鹿他1988）、須賀川市浜井場B遺跡（阿部他1988）等のように、比較的広い丘陵平坦面や緩斜面に立地し、複数の堅穴住居跡や掘立柱建物で構成され、場合によっては墓地と考えられる土坑群を有する大規模なものと、飯館村岩下向A遺跡（松本他1987）、須賀川市閑林N遺跡（吉田他1999）等のように、山間の谷地に面した斜面に立地し、少數の堅穴住居跡で構成される小規模なものが認められる。本遺跡は立地的条件や遺構数から後者的小規模なものに当たると考えられる。近年実施された福島空港公園遺跡発掘調査の成果によれば、丘陵末端の斜面部や開析谷の末端部に当概期の遺跡が散在することから、縄文時代晩期の人々が小規模な集落跡や捨て場を谷部などに形成し、点々と移動して生活していた可能性が指摘されている。本遺跡の周辺では面的な調査が行われていないことから、断定はできないが、本遺跡から尾根を一つ隔てた南西側に所在する閑場B遺跡（本報告第3編）で当概期の遺物が出土していることや、樹枝状の開析谷が発達した地形的な共通点から、福島空港公園周辺と近似する様相であった可能性が高いものと思われる。

(笠井)

参考文献

- 松本 茂樹 1987 「岩下向A遺跡」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告X」 福島県教育委員会
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白C遺跡（第1次）」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告X II」 福島県教育委員会
- 阿部 俊夫他 1988 「浜井場B遺跡」「母畠地区遺跡発掘調査報告25」 福島県教育委員会
- 山内 幹夫他 1990 「上ノ台A遺跡（第2次）」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告X IV」 福島県教育委員会
- 吉田 秀章他 1999 「閑林N遺跡」「福島空港公園遺跡発掘調査報告II」 福島県教育委員会
- 能登谷康矩 2001 「鍛冶屋遺跡（2次調査）」「常磐自動車道遺跡調査報告24」 福島県教育委員会

第3編 関場^{せきじょう} B 遺跡

遺跡略号 ON—SB・B

所在地 田村郡小野町大字雁股田字関場

調査期間 平成13年10月1日～11月9日

調査員 津田 直子・阿部 知己

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

閑場B遺跡は、田村郡小野町大字雁股田（かりまんだ）字閑場（せきば）に位置する。本遺跡から西約0.5km離れた同一字名内に、既に「閑場遺跡」が縄文土器と土師器の散布地として遺跡登録（福島県遺跡登録番号52200028）されていることから、今回調査した遺跡を「閑場B遺跡」として既存の遺跡と区別した。

遺跡は、小野町の中心街から南西に直線距離にして4kmほどのところに位置する。小野町の西に位置する雁股田地区一帯の地形は丘陵の合間を流れる十石川（じっこくがわ）などの小河川に沿って、複雑に入り込んだ狭い谷底平野が形成されている。閑場B遺跡は南西へと開く小さな谷地頭に存在する。調査に入る直前の本遺跡内の土地利用は、主に根菜類や豆を栽培する畑及び水田として利用されていた。遺跡内には背後にある丘陵から湧き出す水が斜面裾に沿って常時流れおり、今年度調査区のすぐ下段にある水田では水の引き込みに困らないほどの水量を有していた。

閑場B遺跡の位置する字閑場地内には、先述した縄文時代及び古代の遺物が散布するとされる閑場遺跡が存在する。その他に、本遺跡の南側に接する丘陵一帯は、小野氏の居館跡と伝えられる黒森館跡（大字雁股田字堀切、福島県遺跡登録番号52200115）が位置する。また、本遺跡から南へ約0.5kmの字堀切地内にある舌状に張り出した低丘陵上には、大木8a・b式段階の土器、土偶、石鎚などが出土した縄文時代中期の集落跡の堀切（ほっきり）遺跡（福島県遺跡登録番号52200031）が存在する。

さらに、本年度の試掘調査の結果、県道矢吹・小野線を挟んで南側の丘陵頂部には縄文時代早・前期の土器・石器を出土した仁井殿遺跡（大字雁股田字仁井殿）が近接している。（阿部）

第2節 調査経過

閑場B遺跡は、平成9年度の高規格道路予定地内遺跡表面調査によって、当時畠と水田であった土地が集落跡の可能性があるとして、予定路線の内外を含め5,000m²の範囲を遺跡（遺跡推定地番号ON-B3）として推定された。表面調査時の遺跡の範囲は県道矢吹・小野線に接した南西方向へ開く谷地部全体で、遺跡北端の耕作地内からわずかに遺物が採取されていた。

表面調査で推定されていた遺跡の範囲の内、ほぼ中央部の3,200m²が工事計画路線内にかかることから、福島県教育委員会では、関係機関との協議の結果、平成13年度に遺跡の具体的な範囲と性格を明らかにする目的で、試掘調査を財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部に委託して実施した。平成13年6月11日から開始された試掘調査の結果、縄文土器と近世陶磁器及び土製品が出土し、縄

文時代晚期の遺物包含層を確認したことから工区内の1,200m²が要保存となった。この成果を受けて、関場B遺跡の発掘調査は、同年10月から財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部に委託して実施することとなった。

10月1日から予定路線内に連絡所・休憩所用のプレハブの設置などで調査員2名体制で現地に入り、発掘器材の運搬等の準備から開始した。10月2日から重機を投入し表土の除去を開始した。表土剥ぎに際し、あぶくま高原道路建設事務所より調査区の東側を県道からの進入通路として残して欲しいとの要請が事前にあったことから、当初、丘陵裾部を掘削せずに通路として残し、付近の調査状況を見てその部分の取り扱いについて検討していくことにした。調査が進捗するにつれて、調査区の東側では造構は確認されず、遺物の出土も希薄であることが判明したことから、この部分の調査はあえて実施しないことにした。

表土除去は、表層の土と共に、盛土された層の除去を北西隅から実施した。排土は調査区の南西側に隣接する予定路線内に積み上げることにし、すぐ近くを走る県道への土砂の流出には十分に配慮した。表土除去の結果、遺跡対象範囲の北端において、丘陵の裾部が緩やかに立ち上がりてくるのを確認し、その上位に層厚の比較的薄い遺物包含層が形成されていた。表土除去の作業は、もともと軟弱な地盤であった土地に、秋の長雨などにより地盤が緩み、さらには掘削した箇所から止め処なく水が湧いてくるなどの悪条件が重なり予想以上に難航した。特に、調査区の北側では谷地頭から流れてくる水の影響で、法面が崩落し始めた。調査区の北側は、現在も作付けが行われている畑と接していたこともあって、崩落を止め、なお且つ、畑耕作時の安全を考慮し、調査区内の法面にかなり緩やかな傾斜をつけながら表土除去を実施した。

10月9日からは作業員を投入し、調査区への進入路の確保など周辺整備に取り掛かった。折からの雨水や、湧き水によって難航した表土除去も完了し、10月18日からは予定の作業員全員を投入し、調査区南西部より造構の検出作業を開始した。また、同日、測量杭の打設を実施した。検出作業の

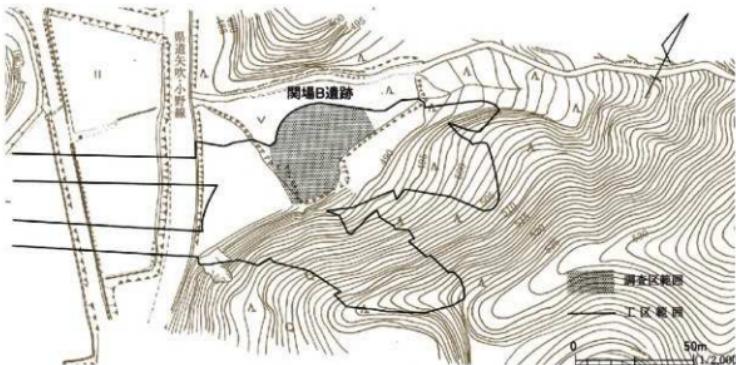


図1 関場B遺跡調査区位置図

結果、調査区の北側において確認されていた縄文時代晩期及び平安時代の遺物包含層、及び遺物包含層の上面から土坑を1基確認した。調査区の上層を1~1.5mの厚さで覆っていた盛土の中にも近世の陶磁器片がわずかながら含まれていた。しかしながら、確実に近世と判断できる遺構は調査区からは確認されなかった。調査区は遺跡の中央部にあたるもの、遺構・遺物の密度は比較的低いものであった。

雨天の影響もあったが、遺物包含層の精査、記録類の作成は順調に進み、10月22日には地形測量、遺跡の全景写真の撮影まで終了することができた。11月1日からは遺物包含層下の掘り下げに入り、土層観察用の溝を数箇所設定し、標高約483.5mの水が湧き出す直上まで人力で掘り下げるに至った。

調査区内外の地盤が軟弱で重機による土層観察用の溝の掘削は断念したが、人力での掘削であったことから、地形の基盤をなす花崗岩風化土を露呈させるまでには至っていない。

11月9日には発掘器材の撤収等を済ませ、本遺跡の調査を終了した。その後、調査員の内1名は小野町大字菖蒲谷にある反田B遺跡の調査に合流し、作業員もそれに合わせて反田B遺跡と、同じ菖蒲谷地内にある鹿島遺跡の2つの現場へ分かれて合流した。

11月13日に関場B遺跡の引渡しを関係機関で行った。

(阿部)

第3節 調査方法

関場B遺跡の発掘調査を行うにあたって、工事側の工区を示す幅杭をもとに調査区を設定し10m四方の方眼（グリッド）を設定した。その際に、グリッドは国土座標軸（公共座標第IX系）を基に規定している。グリッドの原点は、調査区の外、北西側にある国土座標X=140,840, Y=66,790に位置する。各グリッドには個別の番号を与え、南北方向に北から南へA・B…というようにアルファベットの大文字を付し、東西方向には西から東へ1・2…と算用数字を付し、A3グリッド、B4グリッドなどと呼称した。このグリッド番号は、遺構のおおまかな位置を示し、また、遺構外出土遺物の出土位置を表示するのにも使用した。

また、遺構平面図を作成するため、水糸ラインを1m方眼で規定した。水糸ラインの方向は、グリッドの分割線の方向と一致しており、その原点はグリッド設定の原点と同じである。水糸ラインには水糸番号を付し、国土座標軸のXをNに、YをEに置換して、それぞれ国土座標の下3桁を水糸番号として用いた。ちなみに、原点のA1でみると、N 840・E 790 (X=140,840の下3桁, Y=66,790の下3桁)と表される。水糸番号「N」の数値は、北へ1mごとに増し、南へは1mごとに減り、「E」の数値は東へ1mごとに増し、西へ進むごとに1m減ってゆく。

発掘作業に際しては、まず調査区の表土を重機で掘削、除去し、それから人力により遺構の検出作業及び遺物包含層の掘り下げを行った。遺構の掘り込みは、2分割法を基本として掘り下げた。遺物の取り上げに際しては、遺構外のものについては10m四方のグリッド単位で取り上げた。土層

番号は基本土層を「L」とローマ数字を組み合わせて L I, L II …と表し、遺構内の層序は「ℓ」と算用数字の組み合わせて ℓ 1 と表示した。

調査の記録は、実測図作成及び写真撮影により行い、遺構図は平面図、断面図そして遺物出土位置図を作成した。実測図の縮尺は、対象により縮尺を変え、遺構及び遺物出土状態は 1/20 縮尺で作成し、調査区の地形図は 2.5 cm ごとに等高線を巡らして 1/200 縮尺で作成した。写真撮影は、遺構・遺物検出状況、土層堆積状況、完掘全景などについて 35 mm 及び 6 × 4, 5 判のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用した。

調査において出土した遺物は、財団法人福島県文化振興事業団に持ち帰り、水洗を行い個々に出土地点を記録して、整理（接合・図化・写真撮影）、分類することを基準とした。また、今回の調査で作成した実測図、記録写真、さらに出土遺物は、各整理台帳（撮影記録台帳）と合わせて福島県教育委員会にて保管している。
(阿部)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層（図2・3、写真3-3）

先に述べたように、遺跡は低丘陵に挟まれた西へと広がる谷地部に位置する。確認された遺構は調査区北側の丘陵裾部のみに限定される。遺構は土坑 1 基のみで、その他、縄文・平安の両時代にまたがる小規模な遺物包含層が確認されている。

開場 B 遺跡の基本土層は、AA' ~ GG' の計 7 地点における土層の堆積状況の比較を行ない、設定した（図2・3、写真3-3）。基本的には、現地表からの土を 6 層に大別し、図3 中には L I ~ VI と表記している。

基本となる堆積土を上層から順を追ってみていくと、最上層の L I は現表土及び盛土を表し、L II・III は遺物を土中に含んだ堆積土を指し、そして、L IV ~ VI は遺物を全く含んでいない粘性のある堆積土及び粘土を示している。さらに、これら層位は含まれる砂礫の量、粘性、土質そして土色などの肉眼観察によってさらに細分され、それらをアルファベットの小文字（a ~ c）で示し、合計 9 層に分けた。これらの土層は同年 6 月に実施された試掘調査の時点で認識された土層番号とは若干異なっている。

9 層の基本土層の内、L I a・b は合わせて最大約 1 m ほどの厚さで調査区全面を覆っていた。この土は花崗岩風化土を主体としているため、地下水の浸透が良い上に軟弱であったことから、調査区周囲の壁面は急な傾斜で削り残しておくことはできず、北～西壁では傾斜を緩くするなどの処置を行った。この内、L I b は元地権者や地元の古老人によると、調査区内は昭和 10 年前後に当時桑畠であった土地を水田に作り変える目的で、谷地頭を切り崩した土砂をトロッコで運び入れたものであることが分かっている。試掘調査の時点ではこの土層を「L II」としている。

L II・IIIは調査区北端のみで確認され、標高485.9mあたりから平安時代の土師器を包含したL IIが露出し、そのすぐ下層からは主として縄文時代晩期の粗製土器を包含したL IIIが確認される。これら2層は調査区の北側へと続いている。試掘調査の時では縄文土器を包含する層位を「L III」としている。遺物を包含しているのはL I b, L IIそしてL IIIの3層であった。

遺物を包含していないL IV a～VIのうち、L IV aは遺物包含層であるL IIIが存在する箇所から確認されていない。L IV bから下位の層位は標高484.5mのところから確認され始め、標高483.5m付近から確認されるL Vを掘り込むと地面からじわじわと水が湧いてくる。
(阿部)

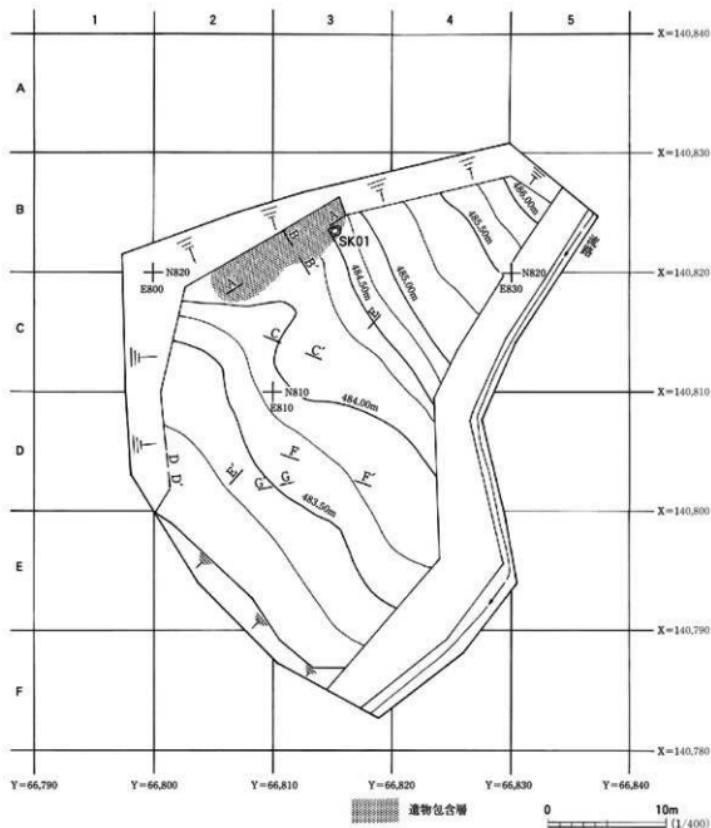


図2 遺構配置図

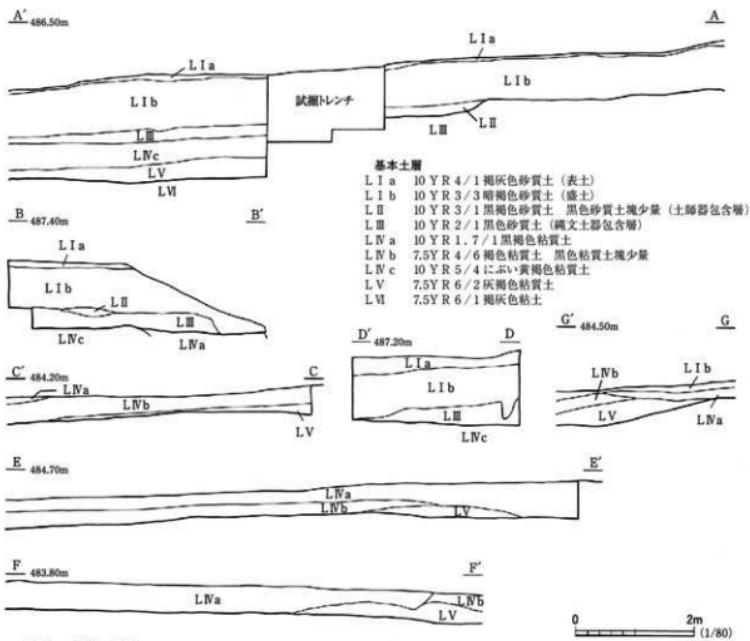


図3 基本土層

第2節 土 坑

1号土坑 SKO 1 (図4, 写真3-3・6)

本土坑は調査区北側、B 3 グリッドの中央部に位置している。本土坑は縄文時代の遺物包含層を掘り下げている途中に、L III 上面にて長方形状の落ち込みとしてはっきりと確認された。

土坑の長軸はほぼ東西方向を向いている。規模は東西長で 1.5 m, 南北長では 1 m を測る。確認面からの深さは造構の中央部において 1.8 cm と浅かった。北辺に残っていた壁面は底面から急な角度で立ち上がる。造構内堆積土は L 1 の砂質土のみを確認した。

造構内堆積土からの出土遺物は、造構の中央部において、底面より 10 cm 前後上方に浮いた状態で人頭大の河原石が 3 個出土し、また、大堀相馬焼の仏飯具の破片と思われるものが 1 点出土している。

年代の分かれる遺物は 18 世紀頃の大堀相馬焼の仏飯具片のみで、本土坑はその時期頃に掘り込まれたと考える。

(津田)

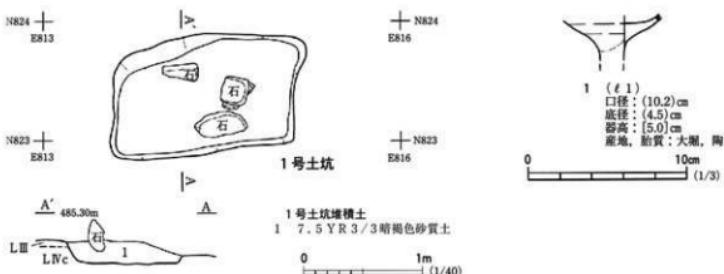


図4 1号土坑、出土遺物

第3節 遺物包含層

ここでは、遺構に伴わずに出土した遺物のうち、図化したものについて報告する。遺物の種類と出土数は、縄文土器片 281点、土師器片 4点、陶磁器片 78点、石器・剥片 24点、そして、土製品1点であった。

関場B遺跡における遺物包含層は、L I b、L II、L IIIの3層である。前節でも述べたように、L I bは調査区全体に堆積しており、この土は昭和10年前後に、当時桑畠だった土地を水田に作り変える目的で、谷地頭を切り崩し、土砂をトロッコで運び入れたことにより生じた盛土で、花崗岩の風化した砂礫を多く含んでいる。L I bのはほとんどは重機により除去しているので、この層中からの遺物は、調査区内の掘り下げ時や、周囲の壁面を土層観察用に清掃した際に調査区北端にあった遺物集中域の精査時に採集したものが大半である。この層中からは、陶製土管の破片などと共に、近世陶磁器の破片を合計78点確認し、6月に実施された試掘調査時には小型の泥人形片なども出土している。

L II及びL IIIは、図2で示したように、調査区北端のB2・3、C2・3の計4グリッドの範囲内でのみ確認され、堆積土はそのまま北側の調査区外へ続いている（写真3-3・4）。L IIをみると、この層の遺存状況は悪く、土層の最大厚は10cm前後と下層のL IIIと比べると薄い。L IIには縄文土器の他、平安時代の土師器片が計4点と極端に少なかった。

L IIIはL IIと同様のグリッドの範囲内でのみ確認される。上層には土師器細片をわずかに含んでいるものの、縄文時代晩期の土器片が計237点と大半を占め、次いで、石器及び剥片が計24点、そして、土製品は1点のみ出土した。以下に、確認された遺物の種類ごとに特徴を記してゆく。

縄文土器（図5、写真3-5）

主にL IIIより出土した縄文土器は図5にも一部を示した通り、出土した土器の全てが小破片で、器形全体をうかがい知れるものは皆無であった。器種的には深鉢形土器が主体を成し、土器片から

第3編 開場B道路

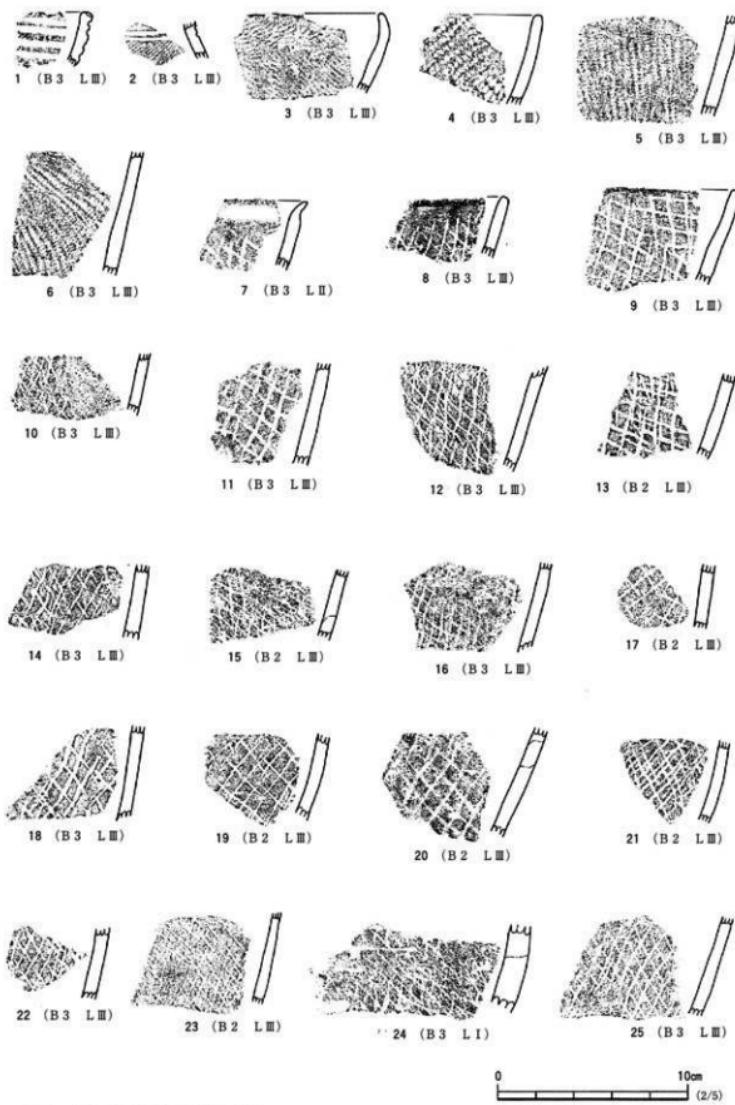


図5 遺物包含層出土遺物(1)

分かる時期は縄文時代晩期、大洞C 1式段階のもので占められる。

図5-1は浅鉢形土器の口縁部片で、外面には4条の平行沈線を引き、端部には等間隔に浅い刻みを入れている。同図2は小型の深鉢形土器の肩部にあたる小破片で、2条の平行する沈線の下に縄を横方向に転がしている。器面は赤黒く発色している。

同図3-6の外面には全面に縄文が観察される。3は口縁部が僅かに内湾し、外面の縄目を見ると、口縁端部付近とその下では施文方向が異なっている。5・6の外面には縄を斜位または横方向に転がしている。

同図7-25は外面に網目状撲糸文の見られる深鉢形土器の破片である。8・9は胴部から口縁端部へ直線的に外傾するのに対し、7は端部が短く外反している。10-25は胴部片である。土器外面には0段の燃りの紐を原体とした網目状撲糸文が施文されている。いずれも比較的薄手である。

土製品・石器（図6、写真3-5）

縄文土器の他にLⅢから出土した遺物は、図6に示した土玉と石器が確認されている。土玉は図化した1点だけであり、石器の破片が1点と剥片類が大小合わせて計23点出土している。

ほぼ円形に形作られた土玉（図6-13）は、重さ16.3gと比較的軽いことから、ここでは土玉としたものの、その用途に多少の疑問が残る。

同図14は珪質頁岩製の石器で、基部がわずかに残存していた。同図15・16は流紋岩と珪質頁岩の剥片及び石核で、他に出土しているものを見ると、流紋岩のものが大半を占めている。16は四角柱状に形作られ、石核の可能性が考えられる。これらの遺物は、出土層位、共伴する土器片などから判断して、縄文時代晩期の資料である可能性が考えられる。

土 器（図6、写真3-6）

LⅡからは縄文土器の小破片に混じって、平安時代の土器小片が4点出土し、そのうちの2点を図6-1・2として図化した（写真3-6）。1は土器器杯の底部小片で、内面は井桁状に密にミガキを施し、黒色処理されている。底面をみると、「成」という漢字が墨書きされている。確認できた文字の下に、別の漢字やつくりが組み合わさっていたものかは不明である。2は土器器底の底部片で、底面には木葉痕を有する。

陶 磁 器（図6、写真3-6）

調査区のはば全域に厚く堆積したLⅠbからは、ガラス片などと一緒に、江戸時代前～中期、17世紀前半～18世紀前半頃にかけての福島県内外の窯で焼かれた陶磁器片が破片数にして78点ほど確認されている。そのうち、形状及び産地の判明する資料を図6-3～12として図化した（写真3-6）。出土した陶磁器片の器種は、細片化し器種さえ判断つかないものが多いが、主に碗、皿で占められ、その他に灯明皿、擂鉢、瓦質香炉などの破片も確認された。生産地は、在地の窯と思われるがよく判らないものが大半で、判るのは、県外の窯では肥前及び瀬戸・美濃産の製品（3～8）、県内では相馬大堀産、会津本郷産の製品（9・12）が見られた。以下に出土した破片を産地別にそれぞれの特徴を見ていくことにする。

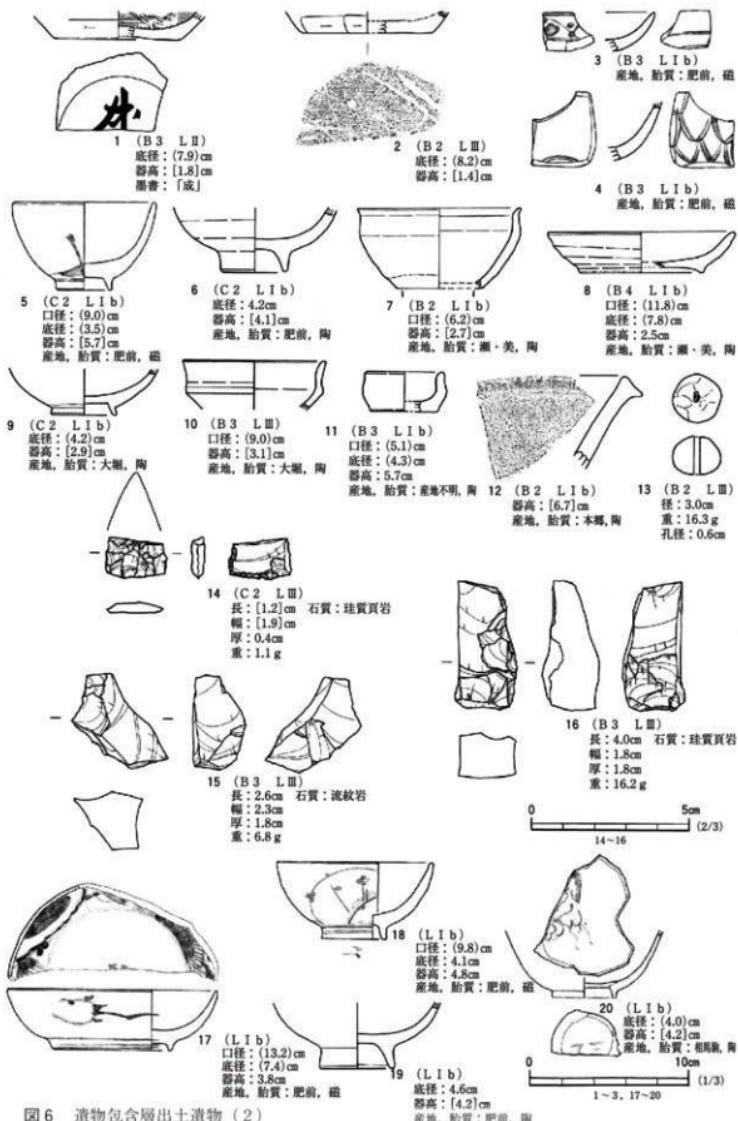


図6 遺物包含層出土遺物（2）

3～6は肥前産のもので、6を除く3点は磁器である。3は染付皿の小破片で、内外面に染付が見られ、外面には高台を中心に2本の同心円が描かれ、内面には花唐草文を描いている。4は染付碗の小破片で、外面には二重網目文様を描き、内面底部中央には同心円を描いている。5も染付碗の小破片で、外面にのみ僅かに文様の痕跡が残っている。3～5の3点の製作時期は概ね18世紀前半頃としておきたい。6は17世紀末頃とされる呉器手碗の体部から底部にわたっての破片である。くすんだ黄褐色に発色した釉薬は、高台疊付を除いて全面に塗られている。この他に細片となつて図示しなかつた染付碗片が1点出土している。

7・8は瀬戸・美濃産の皿と天目茶碗の破片である。7は内外に黒鉄釉が塗られた天目茶碗の小破片で、高台部分は欠損し不明である。口径6.2cmと比較的小振りで、口縁部は僅かにくびれている。8は丸皿の小破片で、内外面に白い長石釉が厚く掛けられ、釉表面には貫入が目立つ。高台は低く削り出され、その断面は三角形状になっている。以上の2点の年代は17世紀前半頃と考えておきたい。この他に、長石釉が掛けられた丸皿細片が2点出土し、うち1点の内面には鉄釉で同心円状の模様が描かれている。

9・10は大堀相馬産の碗の小破片である。9は碗の胴部下半から高台までの破片で、削り出し高台部分の内外を除いて、均一に釉が掛けられている。10はウグイス色に発色する釉を掛けた稜碗の口縁部片である。この他に、細片化した碗の破片が8点ほど出土しており、いずれも表面の釉薬は透明なウグイス色に発色している。11は県内産と思われるが、産地の分からぬ灯明皿の破片である。この資料は使用時に一度半分に割れており、割れ口を見ると漆接ぎをした痕跡がうかがえる。12は会津本郷産の擂鉢の口縁部片である。内外面の釉は光沢のある小豆色に発色している。この他にも、産地の分からぬ擂鉢の細片が10点ほど出土している。

同図17～20の4点は試掘調査時に出土した陶磁器片である。調査区北側付近(4T, 8T)から主に出土している。いずれの破片もL1bから出土した。17・18は、17世紀末～18世紀初頃の肥前産の磁器片である。19・20はいずれも陶器片で、前者は肥前産、後者は相馬駒焼である。17・18はいわゆるくらわんか手と呼ばれるものである。17は1/3ほど残存した厚手の染付皿の破片で、体部内面に草花文を、底部内面の中央には印判が押されている。その体部外面上には唐草文を、高台の付け根には2重の同心円を描き、高台裏には銘の一部が確認できる。断面をみると、漆接ぎをした痕跡がみられる。18は1/2ほど残存した染付碗の破片で、体部外面上には梅樹文、高台裏には簡略化された銘が書きされる。19は呉器手碗の高台部片で、高台疊付を除いて全面に透明釉を掛けている。20は18世紀頃の相馬駒焼碗の破片で、底部内面には簡略化された馬の柄を描き、底裏には2文字が墨書きされている。

L1bから出土した陶磁器の内容を整理すると、碗・皿類、擂鉢が主体で、化粧道具や漆器、ぐい飲みなどの飲酒用食器の破片は確認できなかった。

(阿部)

第3章 まとめ

今回の開場B遺跡の調査では、近世以降に掘り込まれた土坑1基と、わずかではあるが縄文時代晚期中葉大洞C1式段階、平安時代、江戸時代前期から中期にかけての遺物包含層を確認した。ここでは、本遺跡の様相を時代別に触れ、隣接する黒森館跡について若干触れてまとめとする。

縄文時代 雁股田地区において、縄文時代晚期の遺物や遺構が見つかった遺跡はこれまで確認されていない。本遺跡からは大洞C1式段階の網目状撲糸文が施された深鉢形土器片が主に出土したもの、当該期の遺構は確認できなかった。遺物包含層が調査区北端に偏ることから、住居跡などの遺構は調査区北側の丘陵裾部にある可能性が考えられる。また、丘陵を挟んで北側に位置する反田B遺跡(第2編)でも、本遺跡と同様に縄文時代晚期の土器片が遺物包含層から確認された。

平安時代 雁股田地区で平安時代の遺物を確実に出土する遺跡は、現在のところ本遺跡以外に無い。丘陵を挟んで北側に位置する菖蒲谷地区では、本年度調査した鹿島遺跡の他、平成9年度に調査された柳作A・C遺跡などで平安時代の住居跡等が確認された。

江戸時代 陶磁器片が出土したL1bは前述した通り、北側の谷地頭を切り崩したことによる。本遺跡の北側丘陵裾には奥行き11~16m、東西長は45m以上と思われる平場が確認される。この平場には、江戸時代前~中期、17~18世紀頃に平場aの位置に南向きの家屋が建っていた。いつしか家屋は廃絶し、平場の周囲は後世の開墾や、昭和時代の土取り等によって削り均らされ、その際に生活道具の一部が調査区内の盛土(L1b)中に紛れ込んだと考える。

最後に、本遺跡に隣接する黒森館跡について若干触れておきたい。黒森館跡とされた県道よりの丘陵西斜面には階段状に大小4箇所の平坦面が形成される。4箇所の平場の面積は、裾部に位置するものが最大で約840m²、その他は北側にいくにつれ規模を減じ200~450m²ほどであった。最も北端の平場で壊れた石塔を1基確認した。石塔は傘部と塔身部の2つの部分のみで、下位の基礎の部分などは既に無かった。角柱状の塔身の上部は円柱状の突起が削り出し、寄棟造の屋根風に形作られた傘部は全体の1/3を欠損する。塔身部の銘文を見ると、不明な箇所も所々見られるものの、「干時延寶六年（空風火水地など9字の梵字）權大僧都□□□□菩提 戊 □年三月十一日」とある（写真3-4）。壊れた石塔は、延宝6（1678）年3月11日に死亡した僧のために建てた墓塔、あるいは供養塔のいずれかと判断する。寛延3（1750）年に記された「寺社方差出帳」によると、江戸期の小野町内には計20箇所の寺があり、既に廃寺となり所在地さえ不明となった寺の中に「雁股田村常光院」という真言宗の寺の名が記される（『小野町史』1992）。

以上から、黒森館跡とされる字堀切地内の丘陵裾部には江戸時代のある時期まで常光院という寺があった可能性が考えられる。寺の伝承さえ失われた現在、堀切地内の県道沿いには不動明王を祀った小さなお社が木陰に鎮座している。

(阿部)

付 編

付編 福島県小野町鹿島遺跡および反田B遺跡出土石器の石材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿島遺跡では、丘陵裾部から平安時代の集落跡に伴う遺構・遺物が検出されている。また、縄文時代、中・近世の遺物も出土している。反田B遺跡では、縄文時代晚期の集落跡が検出されて、地山や表土除去前の現地表面などから多量の種が出土している。

本報告では、鹿島遺跡および反田B遺跡から出土した石器類について、肉眼鑑定による石材鑑定を行う。

1. 試 料

(1) 鹿島遺跡

出土した石器類20点(F.B. A 01・201~220)である。縄文時代または平安時代、中・近世の遺物とされる。

(2) 反田B遺跡

出土した石器類9点(F.B. A 01・221~229)で、縄文時代のものとされる。

2. 方 法

肉眼およびルーペで岩石学的特徴を観察し、種類を鑑定する。

3. 地質の概要

小野町鹿島遺跡と反田B遺跡は、阿武隈山地のほぼ中央に位置する。本地域を構成する地質は、古期花崗岩類が広範に分布し、小野町一川俣町には南北に斑れい岩を主体とする径1~数kmの塙基性~超塙基性岩体が点在している。

(1) 花崗岩質岩類

北部阿武隈山地の花崗岩質岩類は大きく古期花崗岩質岩類と新期花崗岩質岩類に区分される。鹿島遺跡と反田B遺跡が位置する周辺は、古期花崗岩質岩類の分布範囲にある。古期花崗岩質岩類は次の3型に区分されている。

a) 常葉型: 中粒角閃石黒雲母花崗岩~石英

閃綠岩。

b) 船引型: 粗粒~中粒角閃石黒雲母花崗岩。

c) 落合型: 粗粒~中粒角閃石黒雲母花崗岩。

これらの花崗岩質岩類は多数のアブライト岩脈を伴っている。

(2) 塙基性~超塙基性岩類

小野町から川俣町にかけた花崗岩分布地帯には、ほぼ南北方向に斑れい岩を主体とする塙基性深成岩体が断続して露出している。比較的まとまった規模を有するものは北から羽山(麓山)、百目木、移ヶ岳、愛宕山、文殊山、片曾根山、鞍掛山、黒石山が挙げられ、この他にいくつかの小規模な岩体が存在することが知られている。これらの塙基性深成岩体を構成する岩石は、斜長石と角閃石を主要構成鉱物とする角閃石斑れい岩が主体で、斜長石と角閃石の量比により斜長石が多い優白色の斜長岩質から、角閃石斑れい岩を経て、角閃石が多い優黑色のコートランド岩までの岩相を示すが、角閃石斑れい岩の岩相を呈する岩石が最も多い。

4. 石 器

(1) 鹿島遺跡出土石器の岩種と器種

今回鑑定した石器の時代は縄文時代、平安時代、中・近世の遺物と推測されている。石器の岩種は多様で、堆積岩類としてチャートが2試料、珪質頁岩と砂岩が各1試料、丸成岩類は流紋岩が3試料、アブライトが3試料、花崗閃綠岩が1試料、変成岩類として粘板岩・ホルンフェルスが各2試料、斑れい岩質角閃岩が1試料。変質岩として変質流紋岩が1試料、鉱物として石英・玉髓・滑石が各1試料である。

遺跡周辺の地質環境を考慮すると、アブライト・花崗閃綠岩・斑れい岩質角閃岩を除く他の岩種の試料はすべて異地性とみなされ、異地性岩石が7.5%を占める。

器種別にみた岩質は、出土試料が少ないために特徴を抽出することはできない。

a) 堆積岩類

チャート・砂岩・珪質頁岩が使用されている。チャートは、玉髓質の非変成チャートで石礫に使用されているが、小野町周辺に非変成チャートが存在する可能性は見出せない。砂岩は固結度の高い中央生層起源の岩石でくぼみ石に使用されているが、当該地区での分布は知られていない。石錐に使用されている珪質頁岩は山形県下または新潟県下の新第三系として産出する堆積岩と判定される。玉髓質で緻密堅硬な岩質を有している。

b) 火成岩類

流紋岩・アブライト・花崗閃綠岩が使用されている。流紋岩3試料のうち、2試料は緻密質で砥石に、他の1試料は剥片となっているが、柘榴石と黒曜石岩片を含む特殊な岩相を呈し、砥石の流紋岩とは異質である。鹿島遺跡周辺には流紋岩の分布は知られていないので異地性の石材と判定される。

アブライトは、3試料で磨石、剥片、および礫として出土している。アブライトは花崗岩質岩体に伴って脈状に産出する岩石で在地性岩石と認定される。

花崗閃綠岩は、石皿に使用され、黒雲母花崗閃綠岩の岩質を示し、遺跡の周辺を構成する古期花崗岩質岩類に属する在地性の岩石と判定される。

c) 変成岩類

弱変成岩として粘板岩、接触変成岩としてホルンフェルスが各2試料、変形変成岩（破砕岩）として斑れい岩質角礫岩が1試料出土している。

粘板岩は石製品として出土しているが、そのうちの1試料は黒色の硯の破片状を呈し、岩質は雄勝玄晶石（宮城県）と類似する。他の1試料は緻密質で平板状の風化粘板岩で京都市鳴滝産の合紙の破片と判定される。

ホルンフェルスは石製品および剥片として出土している。本遺跡周辺では、粘板岩およびホルンフェルスの分布はないが、大越町大平山付近にルーフベンダント状あるいは捕獲岩状に泥質岩を原岩とする変成岩類が存在し、主として黒雲母片岩と董青石-黒雲母片岩の岩相を呈する。遺物の岩質と大平山変成岩の比較検討が必要であるが、現段階では遺物は異地性の岩石と

認定される。

変形変成岩に属する斑れい岩質角礫岩は断層活動により斑れい岩が破碎されて形成された岩石である。打製石斧に使用されている。斑れい岩体は小野町周辺でも黒石山等に存在が知られており、在地性の岩石と判定される。

d) 变質岩

磨製石斧として変質流紋岩が1試料検出されている。やや緑色を帯びた緻密質の岩質を示す。脊梁山地に分布するグリーン・タフを構成する異地性岩石と推定される。

e) 鉱物

石礫として玉髓が1試料、耳飾りとして滑石が1試料、剥片として石英（珪石）が1試料検出されている。いずれも異地性の鉱物と判定される。

(2) 反田B遺跡出土石器の岩種と器種

縄文時代の石器および羅とされる9試料を観察した。石礫と砥石の2試料が異地性岩石で他は在地性の岩石で構成されている。

a) 堆積岩

石礫としてチャートが1試料検出されている。いわゆる非変成チャートで遺跡が所在する地域には存在しない。異地性の岩石である。

b) 弱変成岩

砥石として弱変成岩に属する粘板岩が1試料検出されている。熱変成作用を被っておらず、チャートと同様に異地性の岩石と判定される。

c) 火成岩類

花崗閃綠岩が5試料出土し、磨石・炉石・礫として使用されている。岩相は黒雲母花崗閃綠岩が3試料、角閃石黒雲母花崗閃綠岩が1試料、黒雲母角閃石花崗閃綠岩が1試料となっている。いずれも本地域を構成する古期花崗岩質岩類と認められる在地性の岩石である。

閃綠岩が磨石として1試料検出される。閃綠岩は塩基性岩体に伴って産出する岩石で本地區に於ては在地性の岩石と判定される。

斑れい岩が磨製石斧から転用された礫石として1試料検出されている。斑れい岩は塩基性深成岩体の主体

となる岩石で在地性の岩石と認められる。

5. 結 語

鹿島遺跡と反田B遺跡は小野町菖蒲谷の近接して所在する遺跡である。両遺跡から出土し観察した石器の種類と数量が異なるため単純な比較はできないが、石器石材の岩質の構成比は大きく異なる。鹿島遺跡出土の石器は複雑な岩種構成を示し、在地性岩石はアプライト3試料、花崗閃綠岩1試料、および斑れい

岩質角礫岩1試料で合計5試料に過ぎず、全体（20試料）の25%となっている。本遺跡で京都鳴滝砾および雄勝玄晶石とみられる礫破片が検出された。遺物の時代についてさらに吟味する必要がある。これに対し、反田B遺跡出土の石器の岩質は単純で、石礫に使用しているチャート1試料と砾石に使用している粘板岩1試料を除く他の7試料は在地性の花崗閃綠岩、閃綠岩、および斑れい岩となっている。

表1 鹿島・反田B遺跡出土石器の岩質鑑定一覧表

試料番号	遺跡名	出土位置	出土層位	種類	備考	岩質
FB A01-201	鹿 島	I 4	L II a	石 磬		珪質頁岩(毛鰐質)
FB A01-202	鹿 島	H 6	L III	石 磬		チャート(玉髓質)
FB A01-203	鹿 島	H 6	L II a	石 磬		玉 錫
FB A01-204	鹿 島	I 4	L V	其他 刃		滑 石
FB A01-205	鹿 島	I 3	L V	磨製石斧		変質流紋岩(グリンタフ)
FB A01-206	鹿 島	I 5	L III	砾 石		流紋岩
FB A01-207	鹿 島	E 7	L III	砾 石		流紋岩
FB A01-208	鹿 島	S D 03	1層	磨 石		アプライト
FB A01-209	鹿 島	I 4	L III	くぼみ石		砂岩(古期)
FB A01-210	鹿 島	J 4	L III	打製石斧		斑れい岩質角礫岩
FB A01-211	鹿 島	I 4	L III	石 盆		黒雲母花崗閃綠岩
FB A01-212	鹿 島	G 7	L II a	石 製品		粘板岩
FB A01-213	鹿 島	H 6	L II	石 製品		風化粘板岩(鳴滝系)
FB A01-214	鹿 島	E 8 混乱		石 製品		ホルンフェルス
FB A01-215	鹿 島	E 7	L III	砾		アプライト
FB A01-216	鹿 島	I 5	L II b	測 片		ホルンフェルス
FB A01-217	鹿 島	H 5	L II b	測 片		アプライト
FB A01-218	鹿 島	H 5	L II b	測 片		石 美
FB A01-219	鹿 島	J 4	L III	測 片		チャート
FB A01-220	鹿 島	I 5	L III	測 片		流紋岩(含折榴石・黒曜岩)
FB A01-221	反田B	B 3	L III a	磨 石		黒雲母花崗閃綠岩
FB A01-222	反田B	S I 01	5層	磨 石		閃綠岩
FB A01-223	反田B	E 4	L I b	礫 石	磨製石斧転用	斑れい岩
FB A01-224	反田B	S I 01 混乱		砾 石		粘板岩
FB A01-225	反田B	B 2	L III f	石 磬		チャート
FB A01-226	反田B	S I 01	鉛 石			黒雲母角閃石花崗閃綠岩
FB A01-227	反田B	S I 01	鉛 石			角閃石黒雲母花崗閃綠岩
FB A01-228	反田B	S M 02		砾		細粒黒雲母花崗閃綠岩
FB A01-229	反田B	E 3	L I	砾	地山の石	黒雲母花崗閃綠岩

表2 鹿島遺跡出土石器・岩種一覧表

	石蹴	石鋸	磨製石斧	打製石斧	石皿	砥石	剥片	磨石	凹石	螺	耳飾り	石製品	計
堆積岩	チャート	1					1					2	
	珪質頁岩		1									1	
	砂岩								1			1	
火山岩	流紋岩				2	1						3	
半深成岩	アブライト					1	1		1			3	
深成岩	花崗閃綠岩				1							1	
	粘板岩										2	2	
変成岩	ホルンフェルス						1				1	2	
	角礫岩				1							1	
変質岩	変質流紋岩			1								1	
鉱物・鉱石	石英						1					1	
	玉髓	1										1	
	滑石									1	1	1	
計		2	1	1	1	1	2	5	1	1	1	3	20

表3 反田B遺跡出土石器・岩種一覧表

	石蹴	石鋸	磨製石斧	砥石	磨石	鉢石	螺	計
堆積岩	チャート	1						1
	花崗閃綠岩				1	2	2	5
	閃綠岩				1			1
深成岩	斑れい岩		1					1
弱変成岩	粘板岩			1				1
計		1	1	1	2	2	2	9

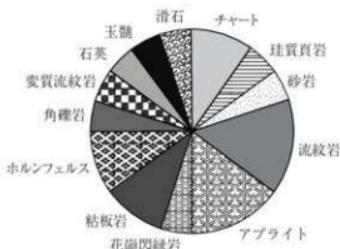


図1 鹿島遺跡出土石器の岩種構成

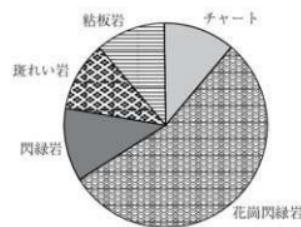


図2 反田B遺跡出土石器の岩種

写 真



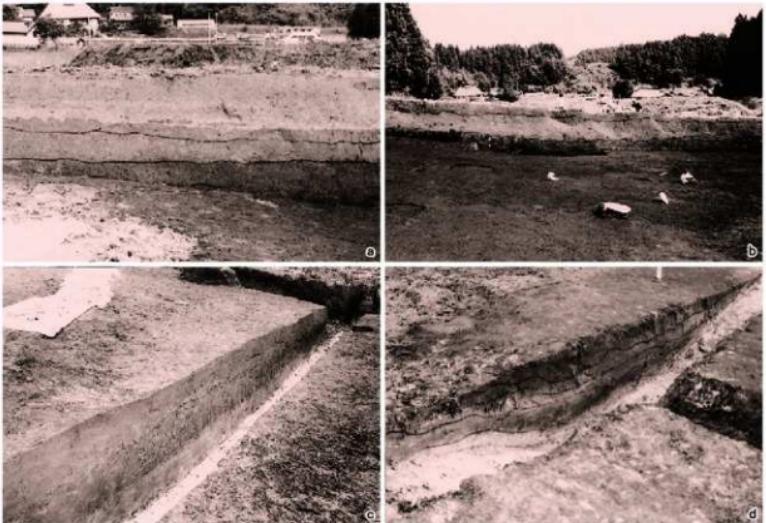
1-1 調査区遠景（1）（北上空から）



1-2 調査区遠景（2）（南上空から）



1-3 調査区近景（北上空から）

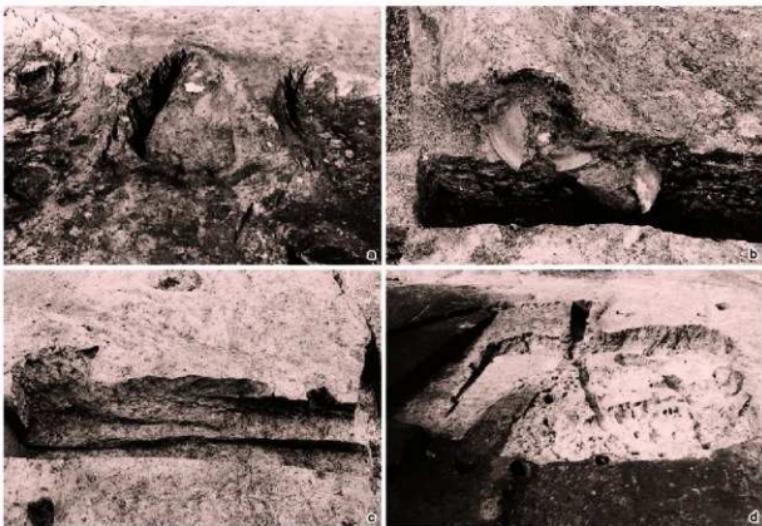


1-4 基本土層

a 基本土層 A-A' (南西から) b 基本土層 B-B' (L I ~ II) (南から)
c 基本土層 D-D' (南西から) d 基本土層 E-E' (東から)



1-5 1号住居跡全景（南東から）

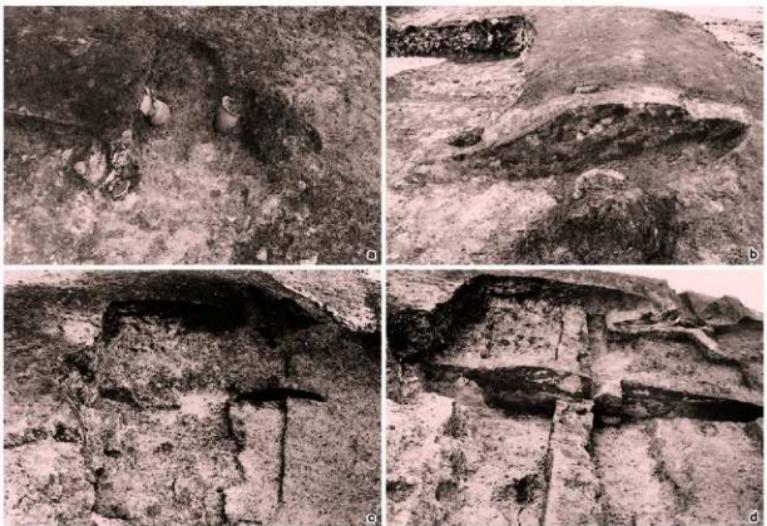


1-6 1号住居跡

a 新カマド全貌（南から）
b 新カマド軸内土器出土状況（南西から）
c 旧カマド全貌（南西から）
d 深形全貌（南東から）



1-7 2号住居跡全景（南西から）



1-8 2号住居跡

a カマド全景（南から） b カマド土層（南東から）
c 剥形全景（南西から） d 剥形土層（B-B'）（南西から）



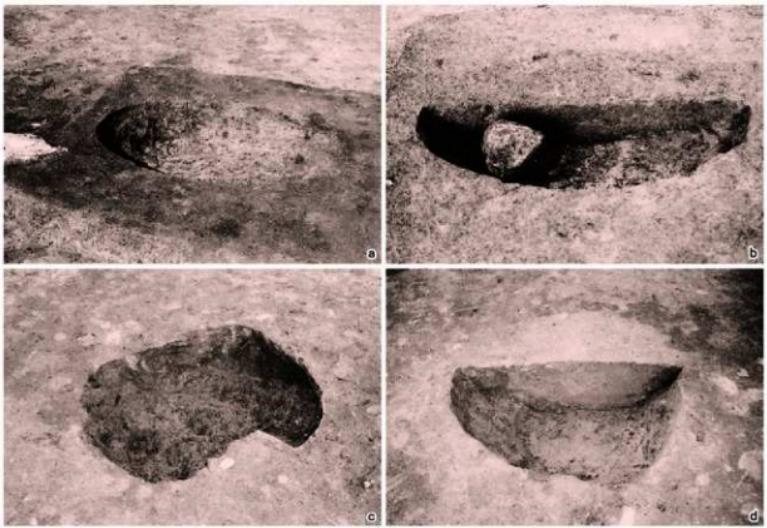
1-9 1号建物跡全景（東上空から）



1-10 2号建物跡全景（東から）

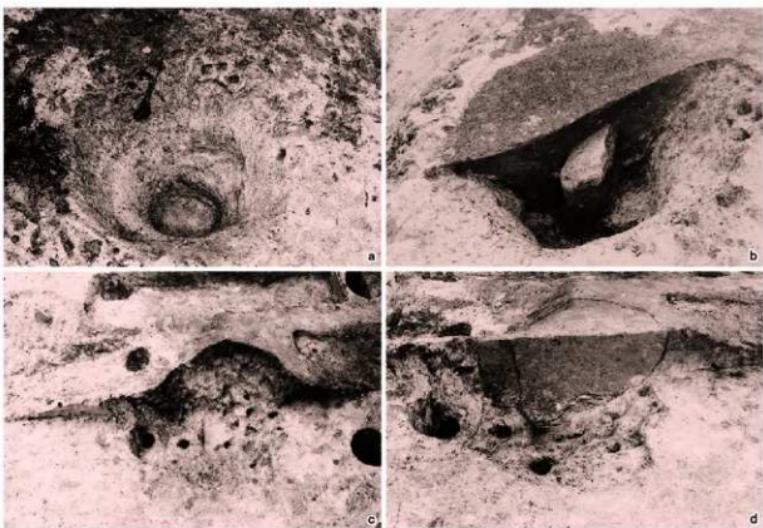


1-11 3号建物跡と周辺の小穴群全景（南上空から）



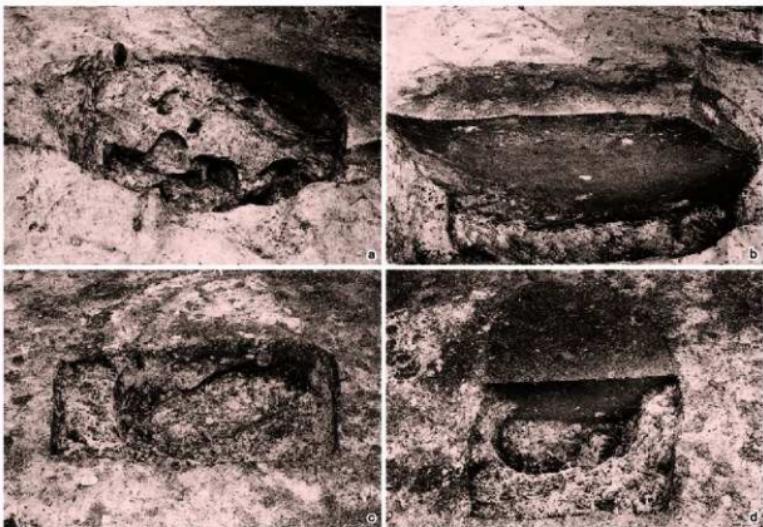
1-12 1・2号土坑

a 1号土坑全景（南から） b 1号土坑土層（南から）
c 2号土坑全景（西から） d 2号土坑土層（南東から）



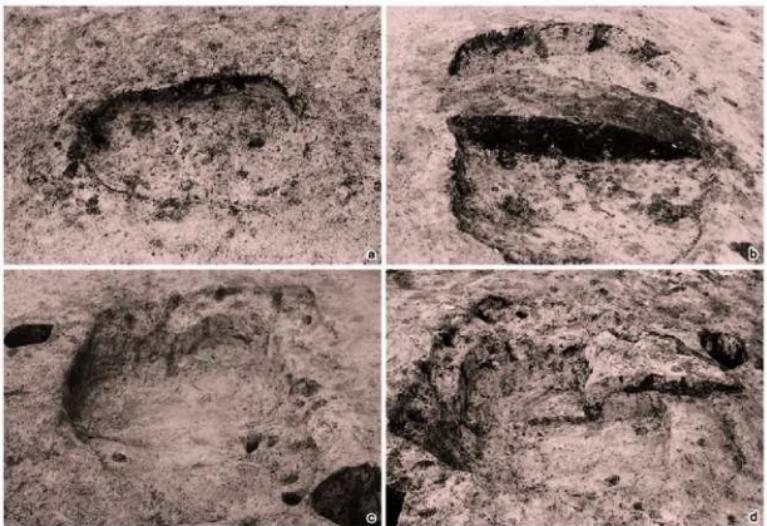
1-13 3・4号土坑

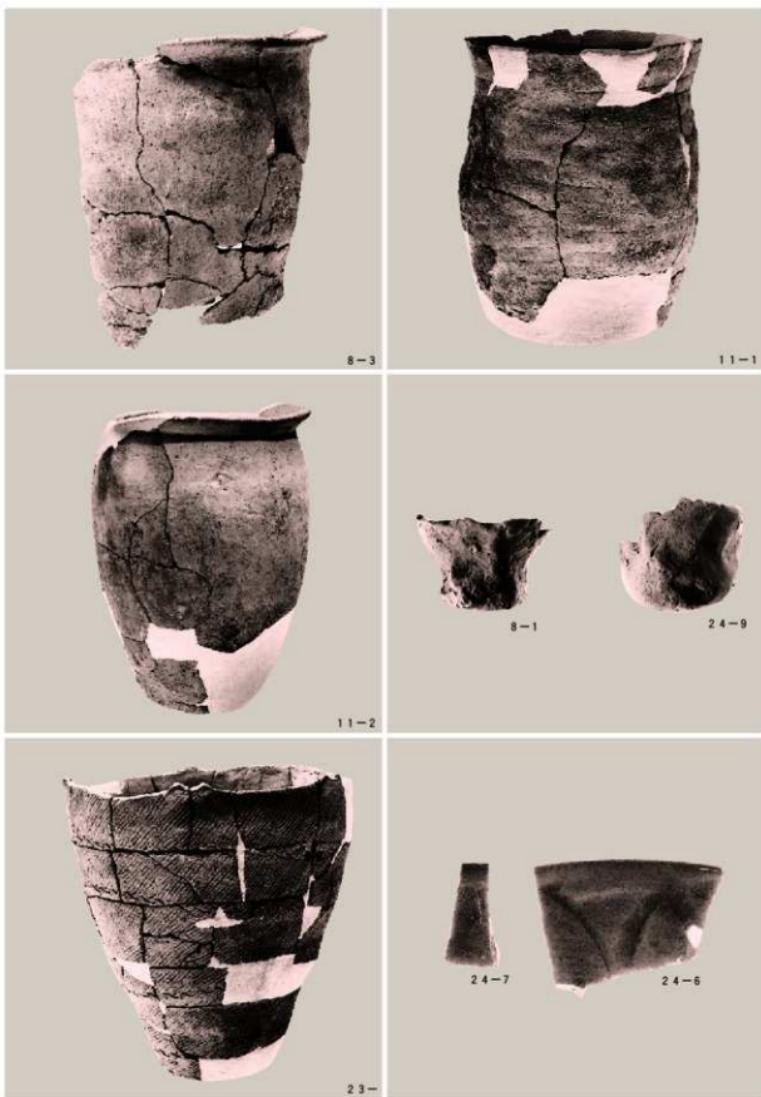
a 3号土坑全貌(東から)
b 3号土坑土層(北から)
c 4号土坑全貌(北東から)
d 4号土坑土層(北から)



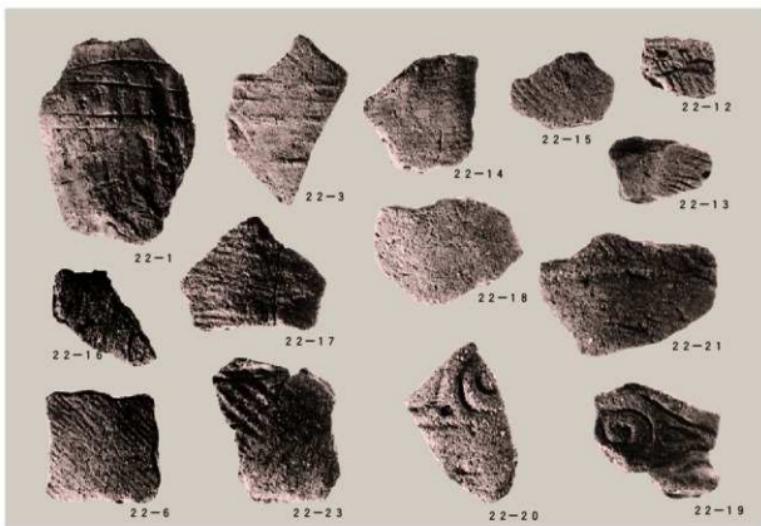
1-14 5・6号土坑

a 5号土坑全貌(南東から)
b 5号土坑土層(西から)
c 6号土坑全貌(南から)
d 6号土坑土層(西から)

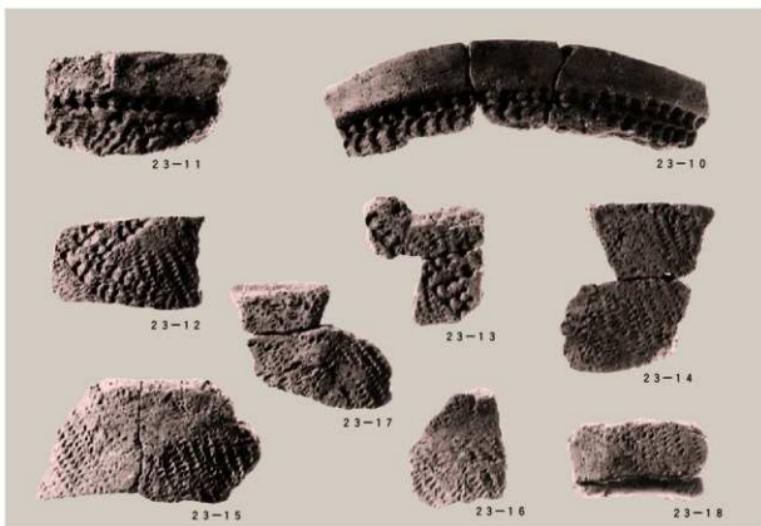




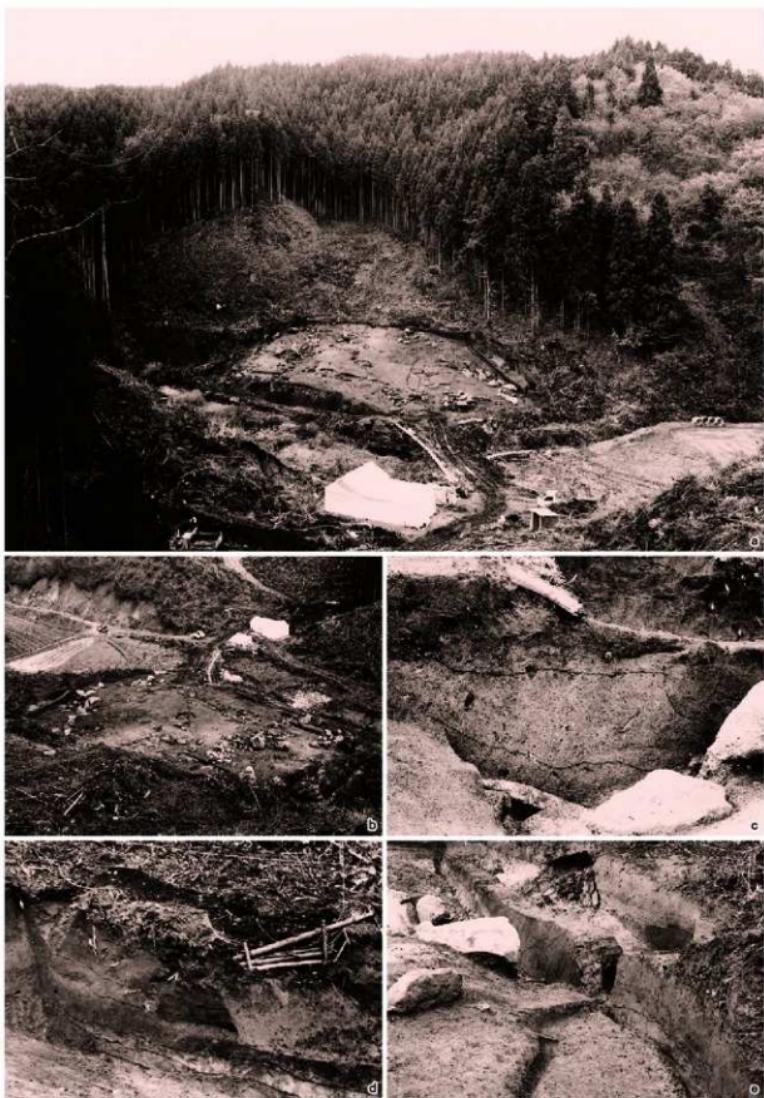
1-17 1・2号住居跡出土土器、遺構外出土縄文土器、土師器、青磁



1—18 遺構外出土繩文土器（1）

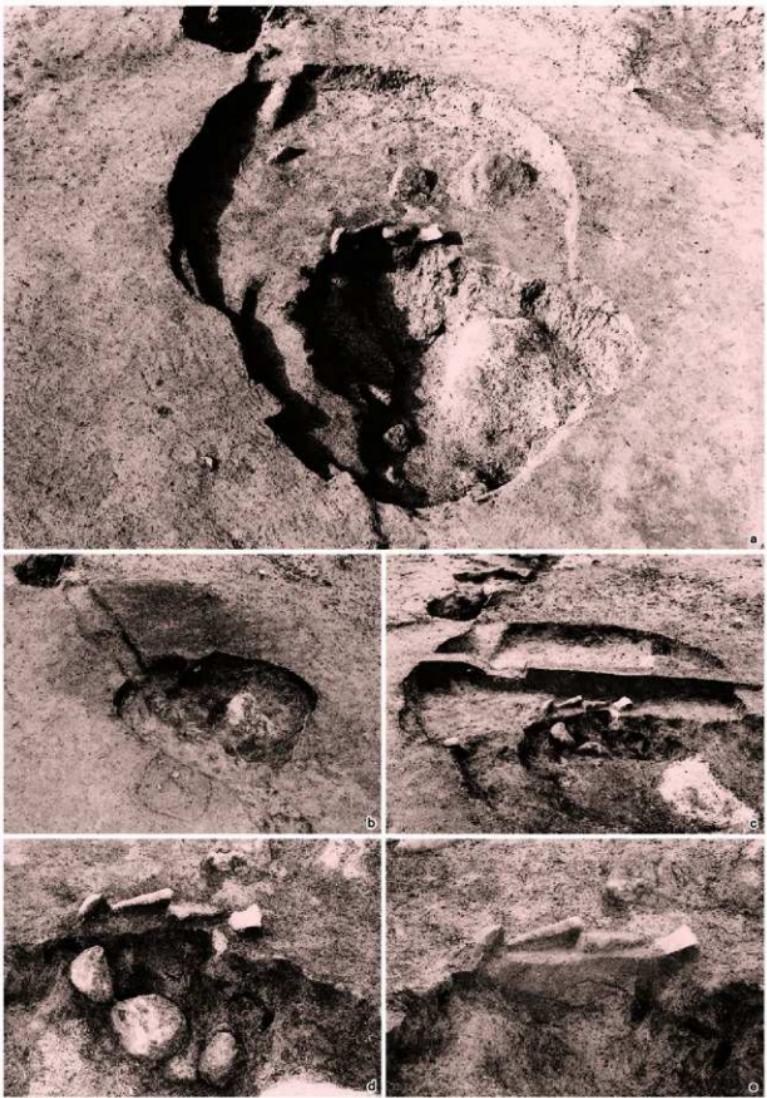


1—19 遺構外出土繩文土器（2）



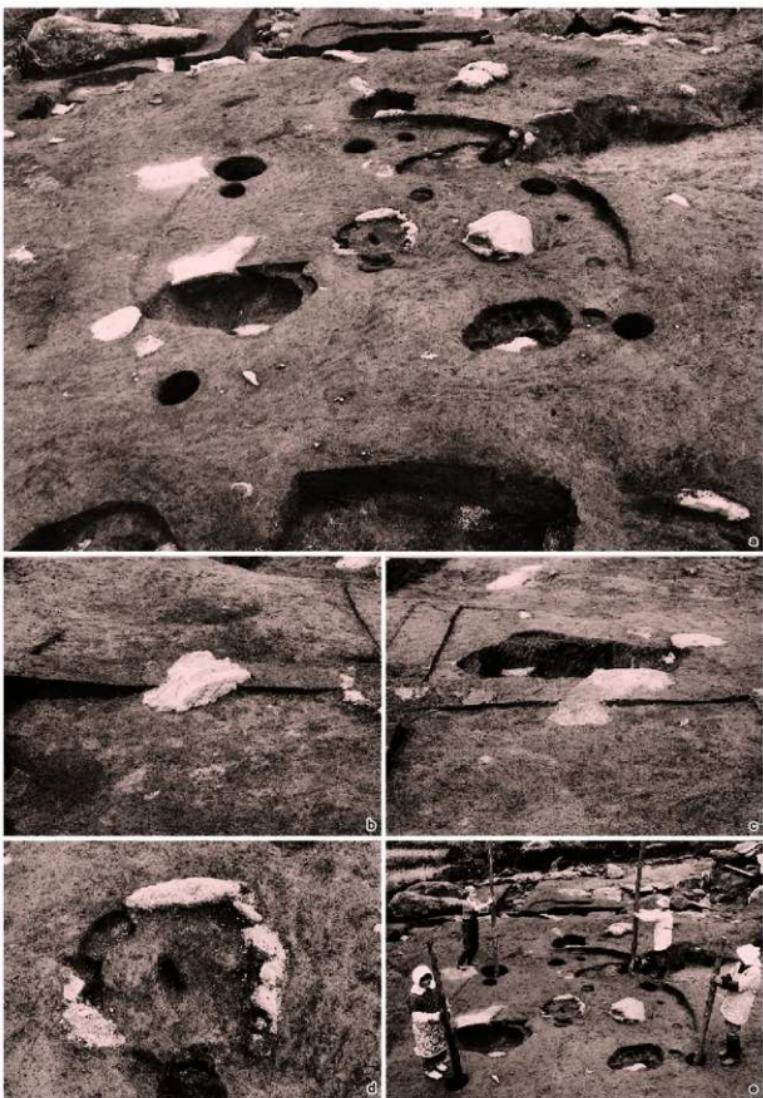
2-1 遺跡全景・基本土層

a 遺跡全貌（東から）
b 遺跡全貌（西南から）
c 基本土層A（東から）
d 基本土層B（南から）
e 基本土層C（南東から）



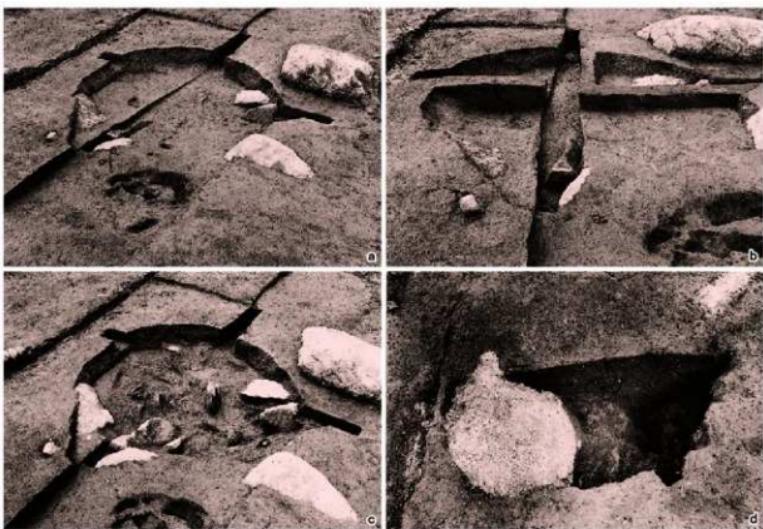
2-2 1号住居跡

a 全景（東から）
 b 掘出状況（東から）
 c 土壁（東から）
 d 仰全景（東から）
 e 仰土壁（東から）



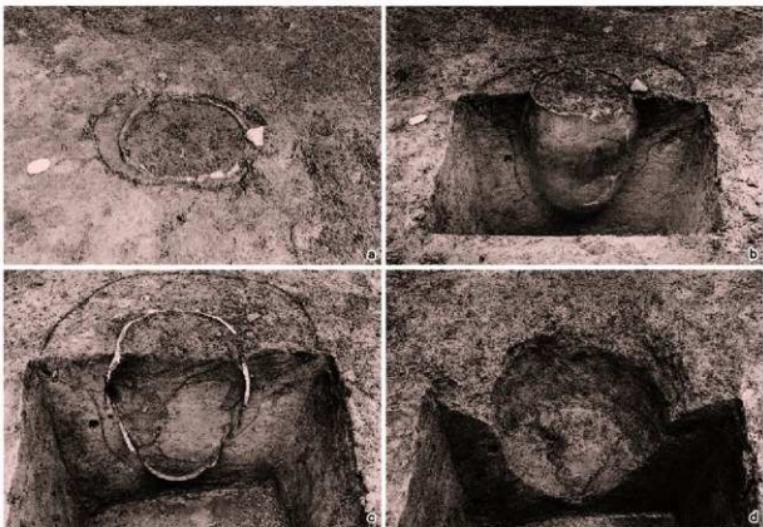
2-3 2号住居跡

a 全景（北から）
b 東西土層西側（南から）
c 東西土層東側（南から）
d 仰全貌（北から）
e 柱配置状況（北から）



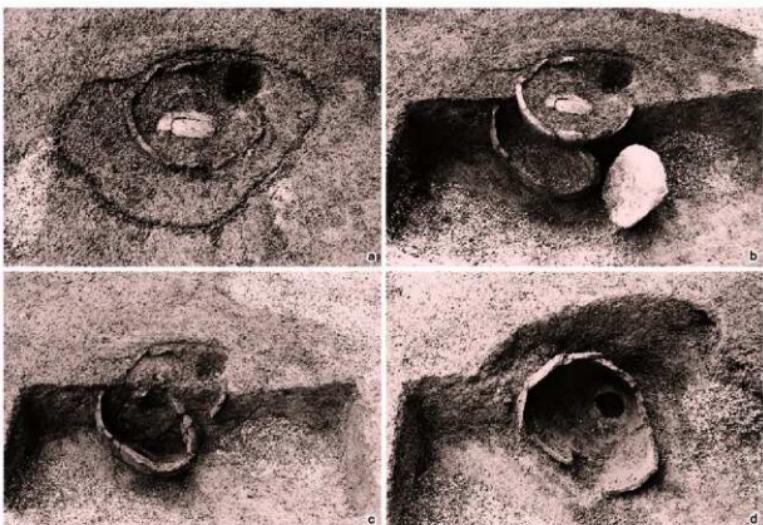
2-4 1号竪穴状遺構・1号土坑

a 1号竪穴状遺構全景（北東から）
 b 1号竪穴状遺構土堤（東から）
 c 1号竪穴状遺構側面全景（北東から）
 d 1号土坑土層（西から）



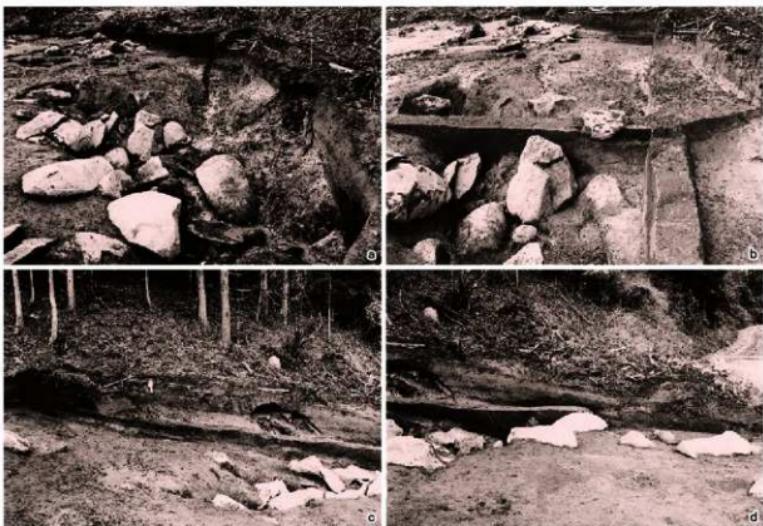
2-5 1号土器埋設遺構

a 掘出状況（南から）
 b 土器埋設状況（南から）
 c 土層（南から）
 d 形全景（南から）



2-6 2号土器埋設遺構

a 掘出状況（北東から） b 土器埋設状況（北東から）
c 土層（北から） d 下部土器埋設状況（北東から）



2-7 遺物包含層

a 北側谷部全景（北東から） b 南北土層（北東から）
c 東西土層西側（南から） d 東西土層東側（南から）



15-8



8-1



18-26



16-7



11-1



12-2

2-8 遺構内外出土縄文土器



3-1 遺跡全景（1）（南から）

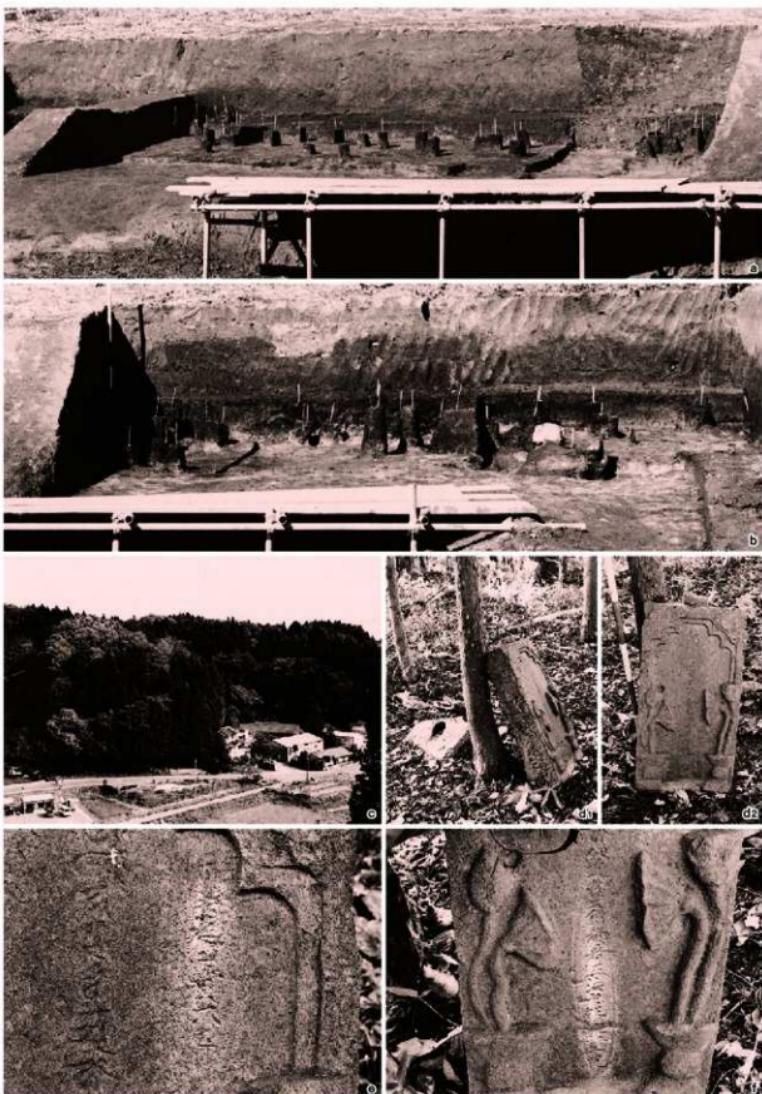


3-2 遺跡全景（2）（西から）



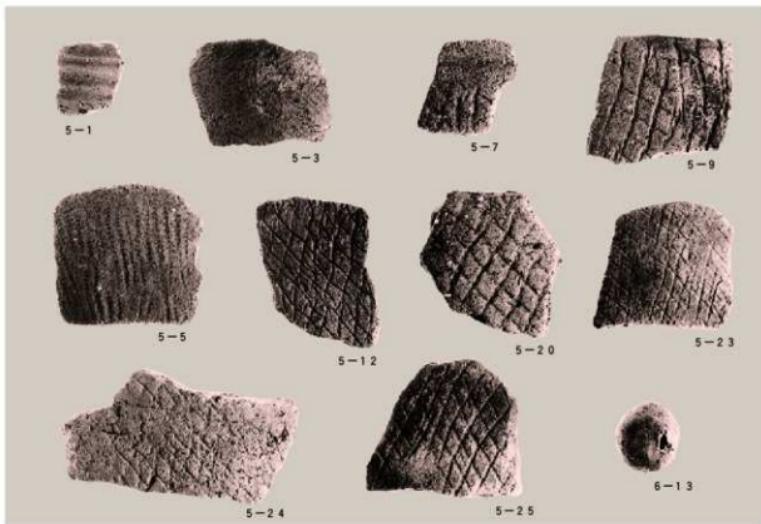
3-3 基本土層・1号土坑・遺物包含層

a 基本土層1(南西から) b 基本土層2(南から) c 1号土坑(西から)
d 遺物出土状況1(南西から) e 遺物出土状況2(東から)



3-4 遺物包含層・黒森館跡

a 遺物出土状況3（南東から）
b 遺物出土状況4（南東から）
c 黒森館跡（南西から）
d 黒森館跡石塔1
e 黒森館跡石塔2
f 黒森館跡石塔3



3-5 遺物包含層出土繩文土器・土製品



3-6 1号土坑出土陶器、遺物包含層出土土師器・陶磁器

報告書抄録

ふりがな	ふくしまくこうう・あぶくまみなみどうろ いせきはっくつちょうさほうこく 16						
書名	福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第408集						
編著者名	大越道正、芳賀英一、能登谷宣康、吉田昌彦、関博人、国井秀紀、津田直子、阿部知己、山元出、笠井崇吉						
編集機関	財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課						
所在地	〒960-8116 福島県福島市春日町5-54						
発行年月日	西暦2002年11月1日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° °	° °		
鹿島遺跡	福島県田村郡小野町 大字菖蒲谷字鹿島	07522	131	37°16'37"	140°35'24"	20010905	道路(福島空港・あぶくま南道路)建設に伴う事前調査
				37°16'44"	140°35'35"	20011130	
反田B遺跡	福島県田村郡小野町 大字菖蒲谷字反田	07522	132	37°16'43"	140°35'28"	20010919	同上
				37°16'46"	140°35'33"	20011120	
閑場B遺跡	福島県田村郡小野町 大字雁股田字閑場	07522	133	37°16'24"	140°35'49"	20011001	同上
				37°16'27"	140°35'54"	20011109	
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鹿島遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 鎌倉時代	堅穴住居跡(2) 掘立柱建物跡(3) 溝路(3) 土坑(8)	縄文土器・石器 須恵器・土師器 陶磁器	平安時代の集落跡。堅穴住居跡と掘立柱建物跡では古地を異にしている。		
反田B遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡(2) 土坑(1)・埋甕(2) 遺物包含層	縄文土器・石器	縄文時代晩期の集落跡。縄文時代早期の遺物も出土している。		
閑場B遺跡	遺物包含層	縄文時代 平安時代 近世	遺物包含層 土坑(1)	縄文土器・石器 土師器・陶磁器 土製品	遺跡の北端より、土坑1基と縄文時代晩期の遺物包含層を確認した。		

福島県文化財調査報告書 第408集

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16

鹿島遺跡

反田B遺跡

閑場B遺跡

平成14年11月1日 発行

編集	財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部	
発行	福島県教育委員会	〒960-8688 福島市杉妻町2-16
	財團法人福島県文化振興事業団	〒960-8116 福島市春日町5-54
	福島県土木部	〒960-8670 福島市杉妻町2-16
印刷	石井電算印刷株式会社	〒963-0724 郡山市田村町上行合字南川田37-2